

地域包括ケアシステムにおける
高齢者の社会参加活動
—高齢者ケアとしての紙芝居に着目して—

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2021年3月

久保田 泉

目次

1.はじめに.....	1
1.1 研究背景と研究目的.....	1
1.2 先行研究.....	3
1.3 研究課題と研究方法.....	7
1.4 用語の定義.....	8
1.5 論文の構成.....	10
2. 地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動.....	17
2.1 日本の高齢者の社会参加活動をめぐる現状.....	17
2.1.1 日本の少子高齢化・人口減少社会の現状.....	17
2.1.2 高齢者の社会参加活動への期待.....	19
2.1.3 高齢者の社会参加活動を促進する現状.....	20
2.2 地域包括ケアシステムの構築における高齢者の社会参加活動.....	22
2.2.1 地域包括ケアシステムの理念.....	22
2.2.2 地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の位置づけ.....	24
2.2.3 高齢者の社会参加活動の枠組みと課題.....	27
2.2.4 高齢者の社会参加活動の現状と課題.....	28
2.3 日本における高齢者のボランティア活動.....	29
2.3.1 ボランティア活動の概念.....	29
2.3.2 高齢者のボランティア活動の現状と課題.....	30
3. 地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の実際.....	37
3.1 地域包括ケアシステムにおける高齢者ケアとしての社会参加活動.....	37
3.1.1 本研究における地域包括ケアシステムの自助・互助の捉え方.....	37
3.1.2 通いの場としての「ふれあい・いきいきサロン」の現状と課題.....	38
3.1.3 世代間交流プログラムにおける高齢者の社会参加活動の実際と課題.....	40
3.2 高齢者ケアとしての紙芝居の活用に関する現状.....	43
3.2.1 高齢者ケアとしての紙芝居上演の現状.....	43
3.2.2 高齢者ケアとしての人生紙芝居の実際.....	45
3.2.3 高齢者向け紙芝居の出版に至る経緯.....	46
3.2.4 高齢者向け紙芝居の前史.....	47
3.2.5 コミュニケーションメディアとしての紙芝居の特性.....	48
4. 高齢者向け紙芝居の出版に関する現状と意義および展望.....	57
4.1 高齢者向け紙芝居の出版に関する調査の概要.....	57
4.2 高齢者向け紙芝居の出版に関する調査結果.....	59

4.2.1	分析方法.....	59
4.2.2	調査対象者について	59
4.2.3	高齢者向け紙芝居の出版・編集・監修における現状	60
4.2.4	高齢者向け紙芝居の現状	60
4.2.5	高齢者向け紙芝居の意義	62
4.2.6	高齢者向け紙芝居の展望	63
4.3	高齢者向け紙芝居に関する調査結果の考察.....	64
4.3.1	高齢者を介護する紙芝居	64
4.3.2	高齢者との関係を構築する紙芝居.....	65
4.3.3	高齢者向け紙芝居の出版による波及効果.....	66
4.3.4	地域包括ケアシステムにおける高齢者向け紙芝居の可能性	66
5	紙芝居を活用した社会参加活動を行う高齢者ボランティアの現状と課題.....	69
5.1	高齢者ボランティアへのインタビュー調査の概要.....	69
5.1.1	調査目的と調査方法	69
5.1.2	調査項目.....	70
5.1.3	調査対象者の選定方法.....	71
5.1.4	分析方法.....	72
5.2	高齢者ボランティアへのインタビュー調査結果	73
5.2.1	紙芝居上演の活動状況.....	73
5.2.2	介護施設における紙芝居上演の現状.....	75
5.2.3	紙芝居上演の現状と課題	76
5.2.4	紙芝居上演の目的・意義・やりがい.....	79
5.2.5	紙芝居上演における作品選定の現状.....	84
5.2.6	手づくり紙芝居と出版紙芝居の位置づけ.....	86
5.2.7	高齢者と紙芝居の現状と今後の展望.....	87
5.3	高齢者ボランティアへのインタビュー調査結果の考察	88
5.3.1	地域の担い手としての高齢者の紙芝居上演.....	88
5.3.2	介護現場との関係をつくる高齢者の紙芝居上演.....	89
5.3.3	高齢者ボランティアの紙芝居上演をめぐる課題、公共図書館との関係	90
5.3.4	高齢者ケアとしての紙芝居上演の役割	91
5.3.5	紙芝居上演の作品選定における自己の納得感	93
5.3.6	自己表現としての紙芝居制作.....	93
5.3.7	高齢者と紙芝居の親和性と展望	93
6	地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動.....	96
6.1	地域の担い手としての高齢者の役割と可能性.....	96
6.2	よりよく生きるための高齢者の社会参加活動.....	99

7.おわりに.....	103
7.1 研究のまとめ.....	103
7.2 今後の研究課題.....	106
謝辞.....	107
参考文献.....	108

目次

図 1：日本の総人口の推移と推計.....	18
図 2：高齢化の推移と将来推計.....	19
図 3：新体力テストの合計点.....	20
図 4：健康寿命と平均寿命の推移.....	21
図 5：「地域包括ケアシステム」の概要.....	22
図 6：「自助・互助・共助・公助」から見た「地域包括ケアシステム」.....	23
図 7：進化する「地域包括ケアシステム」の植木鉢.....	25
図 8：生活支援・介護予防サービスの充実と高齢者の社会参加.....	26
図 9：ボランティア活動の男女、年齢階級別行動者率（2016年）.....	30
図 10：ボランティア活動の種類 男女別行動者率（2016年）.....	30

1.はじめに

1.1 研究背景と研究目的

日本は現在、世界で最も高い高齢化率で少子高齢化が進んでいる。2019年10月1日現在、日本の総人口は1億2,617万人、65歳以上の人口は3,589万人である。総人口に占める65歳以上の割合を示す高齢化率は28.4%となり、今後も上昇することが予想されている。一方、15歳～64歳人口は減少しており、2019年には7,507万人と総人口の59.5%となった¹。このように高齢化が進む社会においては、社会保障費、医療や介護の需要が増加することが見込まれている。

今後も高齢化率が上昇し現役世代（15歳～64歳）が減少することで、社会を支える担い手の不足が予測されている。1965年には1人の65歳以上を現役世代10.8人で支えていたが、2015年には現役世代2.3人に減少している。2065年には1人の65歳以上を現役世代1.3人で支える社会の到来が見込まれている²。少子高齢社会においては、医療・介護費を含む社会保障の世代間不均衡と社会保障給付費の増大に対応するため、社会を支える担い手を増やす努力が求められている。

また、65歳以上の一人暮らしの者が増加傾向にある。1980年には男性約19万人、女性約69万人、65歳以上人口に占める割合は男性4.3%、女性11.2%であった。2015年には男性約192万人、女性約400万人、65歳以上人口に占める割合は男性13.3%、女性21.1%と増加している³。また、孤立死⁴を身近な問題だと感じる人の割合は、60歳以上の者全体では34.1%だが、一人暮らし世帯では50.8%となっている⁵。

以上のような背景から、厚生労働省は団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、地域包括ケアシステムの構築の推進している。地域包括ケアシステムとは、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、人生の最期まで自分らしく暮らしていけるように地域の包括的な支援・サービス提供を行うシステムである。また、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが必要である⁶。

地域包括ケアシステムの構築においては、少子高齢化や財政状況から「公助」と「共助」の拡充は難しく、「自助」と「互助」の役割を意識した取り組みが必要と示されている。公助は税による公の負担、共助は介護保険等の社会保険制度である。自助は自分で自分のことをすることに加え、市場サービスの購入がある。互助は相互に支えるという意味で共助と共通点があるが、費用負担が裏付けられていない自発的なものである⁷。

そこで、地域包括ケアシステムの構築の推進のために「元気な高齢者」の社会参加活動が求められている。元気な高齢者とは、身体的に自立した生活を送る高齢者である。自治体は、単身世帯や軽度な支援が必要な高齢者が増加する中で、多様な生活支援と介護予防サービスを提供する必要がある、そのためのネットワーク作りには、地域住民の参加による地域づ

くりの強化が重要である。また、高齢者が社会参加活動を通して役割を持つことは、高齢者自身の生きがい、介護予防等にもつながると考えられる⁸。

一方、高齢者の社会参加を促進する元気な高齢者が増加していることは、各種の調査で明らかとなっている。高齢者の健康面では、70~79歳において健康と思っている人の割合は男性で77.0%、女性で76.5%となっており、8割近い高齢者は自らを健康であると認識している⁹。また、日常生活に制限のない期間とされる健康寿命は、2016年時点で男性が72.14年、女性が74.79年となっており、それぞれ2010年と比較して男性1.72年、女性1.17年延びている¹⁰。

高齢者の体力、運動能力面においては、2018年の新体力テストによると65歳~79歳でほとんどの測定項目が1998年よりも向上している¹¹。また、2017年の報告によると、高齢者は10~20年前と比べて加齢に伴う身体・心理機能の変化の出現が5~10年遅延しており若返りの現象が見られている¹²。高齢者の社会参加への意欲の面では、60歳以上を対象にした調査において、参加したい活動があると答えた人は72.5%であった¹³。

社会参加活動の効果としては、高齢者の主観的幸福感にプラスの影響を与え、孤独感を緩和し、高齢者に社会的役割、生きがい、自尊心の向上等をもたらすことが報告されている¹⁴。また、社会参加活動によるネットワークの拡大は高齢者の孤立を予防し^{14, 15}、高齢者の健康寿命が延伸することは社会保障費の減少と介護予防の促進につながる¹⁶。また、2004年から継続されている世代間プログラムでは、高齢者ボランティアが子どもに読み聞かせを行う社会参加活動を対象にした介入研究が行われている。このプログラムにおいて、高齢者ボランティアの世代間と世代内のネットワークが広がり¹⁷、高齢者ボランティアとの交流が子どもの老いへの理解を醸成する可能性が示された¹⁸。

少子高齢化が進む日本において、元気な高齢者が支えられる側から支える側となり地域の担い手として活躍することは、高齢者の現状から可能だと考えられる。前述の各種の調査結果から、高齢者の多くに身体・心理機能において若返りの現象が確認されているからである。また、社会参加活動は高齢者にさまざまな効果をもたらすことが示されている。そして、高齢者の社会参加活動は社会保障費の減少や地域の担い手の拡充という観点から、社会のニーズとしても求められている。

高齢者の多様な社会参加活動の一つに、紙芝居に関する活動がある。紙芝居は長らく子どもの文化として定着してきたが、対象を高齢者にも広げて上演活動が行われている¹⁹。この活動は2000年の介護保険制度施行前後から、高齢者ケアの一環として主に介護施設のレクリエーションとして始まった²⁰。この頃より介護施設を含め、子育てサークルや文庫等で紙芝居の活用が広がり、紙芝居研究や上演活動が活発となった²¹。2009年には初めて高齢者向けの紙芝居が出版され、2020年現在までに31点刊行されている²²。

紙芝居は集団で一体感を共有して楽しむ共感のメディアである²³。紙芝居の演じ手には高齢者が多い。集団を対象にしたメディアである紙芝居の共感とは、観客である高齢者たちと演じ手である高齢者との横の関係で起こる「共にある感覚」を共有することである²⁴。つま

り、演じ手と観客、観客同士が相互に作品に共感することによって、上演の場の一体感を共有し、相互に関係を構築することになる。しかし、このような視点で高齢者と紙芝居を論じた先行研究は少ない。

高齢者の紙芝居上演や紙芝居に関する活動は、社会貢献と生涯学習の要素を含んだ社会参加活動と考えられる。例えば高齢者による絵本の読み聞かせ活動においては、世代間交流を通じた社会貢献として、多面的な効果が検証されている²⁵。しかし、高齢者の紙芝居に関する活動を、地域包括ケアシステムにおける社会参加活動として捉えた先行研究は管見の限り見当たらない。また、高齢者が高齢者に紙芝居を演じる活動を、双方向の高齢者ケアという視点から論じた先行研究は少ない。

高齢者の紙芝居を活用した社会参加活動の現状や意義等を明らかにすることは、高齢者の社会参加活動の裾野を広げ、地域包括ケアシステムのネットワークの構築を促進する一助となる。また、高齢者ケアとしての社会参加活動の目的や意義等を、活動を行う高齢者の視点から明らかにすることは、地域の担い手としての多様な高齢者の役割と可能性を考察する重要な視点である。

そこで本研究では、紙芝居を活用して高齢者ケアを行う社会参加活動に着目し、紙芝居の演じ手である高齢者に焦点を当て、紙芝居上演に関する活動の現状と課題を明らかにし、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討することを目的とする。

高齢者の社会参加活動は、地域包括ケアシステムにおける自助・互助の取り組みである。本研究では、まず、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の現状を明らかにする。また、高齢者ケアを目的とした高齢者の社会参加活動の現状と課題を明らかにする。そして、高齢者の社会参加活動の目的や意義、現状と課題、地域社会との関係等を明らかにする。そのため、紙芝居を活用した社会参加活動に着目し、紙芝居の演じ手である高齢者に焦点を当てる。これらの結果を踏まえ、自助・互助の観点から、地域包括ケアシステムの構築を推進する地域の担い手としての高齢者の役割と可能性を考察し、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動について言及する。

1.2 先行研究

地域包括ケアシステムとは、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、人生の最期まで自分らしく暮らしていけるように地域の包括的な支援・サービス提供を行うシステムである。高齢者の社会参加活動は、地域包括ケアシステムを構築する地域の担い手として期待されている。高齢者が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるために、先行研究では高齢者の社会参加活動と地域の社会的ネットワークの関係について知見が報告されている。

片桐恵子と菅原育子は、地域で老いていくためには、地域社会に溶け込み、コミュニティとの関わりを形成することが必要だと述べている。過去に居住経験がなくても、地域で社会参加活動を行うことで、コミュニティ感覚が高まり地域社会に溶け込む一助となることを報告している²⁶。また、片桐は、高齢者が地域で自分らしく暮らし続けるためには、社会的

孤立を防ぐことが重要だと指摘している。そのために、個人ができることが社会参加活動であり、地域ネットワークの構築に大きな効果をもたらすことを検証している²⁷。

佐藤陽は、シニア世代が地域で社会参加活動を行う意義として、自分の趣味や特技等を生かす「自助」的な社会参加活動から、地域で役割を持ち緩やかな人との関わりや仲間づくりを通し、他者との「互助・共助」の姿勢を育むことを挙げている。このような互助・共助の姿勢を持つことで、社会から孤立せず、住み慣れた地域で安心感を得て暮らし続けられると述べている。また、シニア世代が地域で社会参加活動を始めるには、受け身ではなく、自ら準備する必要があると示している²⁸。

岡本秀明は、都市部の高齢者に調査を行い、社会参加活動促進に重要な要因は、地域社会への態度、親しい友人や仲間の数、活動情報の認知であることを明らかにしている。高齢者の社会参加活動を活発にするには、人と人とのつながりが豊かになり、コミュニティの大切さが分かるような多面的な取り組みの必要性を示している。また、高齢期の社会参加活動の促進には、高齢期以前から地域で他者との関係性をもっておくことを指摘している²⁹。

これらの先行研究では、高齢者の地域における社会参加活動は、地域のネットワーク構築を促進し、高齢者の孤立を防ぐことが示されている。また、高齢者が住み慣れた地域でできるだけ長く自分らしく暮らすためには、他者とつながり、関係を構築する必要性を指摘している。

また、藤原佳典は、高齢者の社会参加活動・社会貢献を、社会的責任の大きい順に 1.就労 2.ボランティア活動 3.自己啓発(趣味・学習・保健)活動 4.友人・近所づきあい 5.通所サービス利用、という5つのステージを定義している。このステージは、高齢者の生活機能(健康度)に応じて移行しながら長期間の活動継続を目指す枠組みである。ステージ間をシームレスに移行するための支援機能として、地域包括ケアシステムの活用が求められると述べている^{30, 31}。

さらに、先行研究では、高齢者の社会参加活動として期待される高齢者のボランティア活動の動機と、活動継続に必要な条件を検証している。斎藤ゆかは、ボランティア活動に踏み出す動機には、「人のため」「社会のため」という利他的動機と「自分のため」という利己的動機があると示している。また、シニアが生き生きとした生活を送るために必要とすることは、「健康・交流・心がけ・やるべきこと・人に役立つこと」であると報告している。そして、ボランティア活動は、シニアが自分を活かし社会とつながり、社会の担い手となる社会貢献活動であると述べている³²。

伊藤順子は、60歳以上の高齢者ボランティアの活動動機において、自己志向性と他者志向性の両志向性がともに高いほど、ボランティア活動満足感・ボランティア活動から得た利益が多く、両志向性がともに低いほど活動満足感も得られた利益も少ないことを検証している。また、ボランティアするもの、されるものの相互作用がボランティア活動の本来の意味であると述べている。そして、活動を通じた人との関係性が、ボランティア活動のモチベーションとなることを示唆している³³。

野中久美子他は、健康課題を持つ高齢者ボランティアの活動継続は、自身のボランティア観、老いへの受容の度合い、ボランティア仲間からの支援によって影響を受けると述べている。健康課題を持ちつつ活動を継続するためには、できないことをボランティア仲間に補ってもらおう等、ボランティア仲間の理解と支援が不可欠であることを報告している。また、活動を継続する支援策として、身体や認知機能の状態によって活動内容を簡易にする、場所を変更する等の柔軟な対応と仕組みが必要だと指摘している³⁴。

また、先行研究では、高齢者が社会参加活動を行うことによる、さまざまな効果を挙げている。トーマス、パトリアシア (Thomas, Patricia A) は、高齢期において、サポートの提供はサポートを受け取る以上に幸福感を高めると報告している³⁵。豊島彩と佐藤眞一は、高齢者が他者をサポートすることで、他者から感謝され親密な関係を築き、自分自身も満足感を感じることが、主観的ウェルビーイングの維持と関連することを示唆している。また、サポートの提供は他者を援助しているだけでなく、周囲と互恵的な関係を築いていることをあらわすと述べている³⁶。

60歳以上の高齢者ボランティアが学校で絵本の読み聞かせを行う世代間交流プログラムでは、高齢者のボランティアと交流頻度が高い児童は、肯定的な高齢者イメージを維持することが報告されている³⁷。さらに保護者による高齢者ボランティアに対する認知度と評価の一部が高まり、相互理解に寄与する可能性が示されている³⁸。また、同じ世代間交流プログラムにおいて、高齢者ボランティアの知的活動や身体機能の維持・促進に役立つ長期的な効果が検証されている³⁹。このように、高齢者の社会参加活動の効果は、高齢者本人だけでなく、地域社会への多面的な波及効果が明らかにされている。

また、本研究が高齢者の社会参加活動として着目する、高齢者の紙芝居上演に関する先行研究では、介護現場での上演、高齢者を対象に出版された紙芝居、介護施設での紙芝居を活用した高齢者ケアに関して、活動の現状と意義が報告されている。

遠山昭雄は、介護職として介護施設で演じた経験から、紙芝居の力は、高齢者の「共にある感覚」を呼び戻すという意味で、アクティビティにおける高齢者ケア、認知症ケアの構造と重なりと主張している。紙芝居は絵本や児童書のように読み聞かせるという媒体ではなく、集団を前に演じるメディアのため、演じ手と観客・観客同士の共感を呼ぶと述べている。また、紙芝居は専用の舞台を使って演じることで、観客の集中を一点に促すことが可能であると、舞台の効果を示している⁴⁰。

堺正一は、自身が高齢者ボランティアとして高齢者に紙芝居を演じる目的として、演じ手と観客、観客相互間が作品に共感し、そのコミュニケーションを通して、高齢者の自尊感情や自己肯定感を高めることを挙げている。また、紙芝居の作品世界を共有することによって、辛い戦争体験や明日への不安を紙芝居に昇華させ、今生きている事実感謝と喜びを見いだすという紙芝居のメディアとしての可能性を指摘している。また、今の高齢者は子どもの頃に街頭紙芝居に胸を躍らせた世代であるため、紙芝居に特別な感情を持っている、と述べている⁴¹。

堀田穰は、子ども向けの教育紙芝居の出版が衰退する中で、出版紙芝居の新規事業として高齢者向け紙芝居が出版され商業的に成功したことは、画期的なことだと述べている。高齢者向け紙芝居が出版される前から、介護施設において紙芝居がレクリエーションに使われており、介護職やボランティアの人々が、既存の教育紙芝居の中から高齢者が楽しめる作品を選んで上演していた活動を報告している⁴²。

奥田真美は、介護施設での紙芝居づくりを通して高齢者の人生を理解し、集団で互いを認め合う関係づくりを行う、回想法をベースにしたレクリエーション「人生紙芝居」を紹介している。介護施設の職員が紙芝居の主人公になる高齢者の人生を聴き取り、主人公以外の利用者である高齢者と共に紙芝居を制作する過程が、回想法のグループワークとなる。また、完成した人生紙芝居を地元の小学校で演じることは、人生経験を語り継ぐ役割を担う高齢者の社会参加になると報告している^{43, 44}。

先行研究の知見から、地域包括ケアシステム概念である、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けるためには、孤立を防ぐことが重要であることが明らかにされている⁴⁵。地域社会に溶け込み、コミュニティ感覚を醸成するためには社会参加活動が有用であり⁴⁶、豊かな社会的ネットワークが高齢期の社会参加活動を促進し⁴⁷、社会参加活動による緩やかな関係づくりが地域の「互助・共助」につながる⁴⁸と考えられる。

また、高齢者が子どもに絵本の読み聞かせを行う世代間プログラムは、地域に互恵的な効果をもたらし、高齢者の継続的な社会参加活動として機能していることが報告されている^{49, 50, 51}。しかし、世代間交流を通じた高齢者の社会貢献に関するモデル研究のため、高齢者を対象にした読み聞かせの活動報告は少ない⁵²。高齢者の世代間交流における社会参加活動に加えて、高齢者が高齢者を対象に行う社会参加活動に焦点を当て、活動の目的や意義を明らかにすることは、地域包括ケアシステムの観点において重要であると思われる。

また、高齢者と紙芝居に関する先行研究では、紙芝居は介護職やボランティアによって高齢者ケアとして活用されていることが報告され、高齢者と紙芝居の親和性が指摘されている^{53, 54, 55, 56}。さらに、手づくり紙芝居の制作と上演を通して、高齢者ケアや高齢者の社会参加活動・社会貢献が可能であると示されている⁵⁷。しかし、このような紙芝居に関する活動を、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動として扱った先行研究は、管見のかぎり見当たらない。紙芝居を活用する社会参加活動の現状や課題を明らかにし、高齢者ケアの観点から活動の意義や可能性を示すことは、高齢者の社会参加活動の捉え方を再考し、高齢者の多様な社会参加活動の裾野を広げ、地域のネットワーク促進の一助となると考えられる。

そこで本研究は、紙芝居を活用して高齢者ケアを行う社会参加活動に着目し、紙芝居の演じ手である高齢者に焦点を当て、紙芝居上演に関する活動の現状と課題を明らかにし、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討することを目的とする。

1.3 研究課題と研究方法

本研究は、紙芝居を活用して高齢者ケアを行う社会参加活動に着目し、紙芝居の演じ手である高齢者に焦点を当て、紙芝居に関する活動の現状と課題を明らかにし、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討することを目的とする。

そこで、研究目的を達成するために下記のように研究課題を定める。

研究課題 A 地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の現状を明らかにする。

研究課題 B 高齢者ケアとして的高齢者の社会参加活動の現状と課題を明らかにする。

研究課題 C 紙芝居を活用して社会参加活動を行う高齢者の目的や意義、現状と課題、地域社会との関係等を明らかにする。

課題 A・B・C の研究課題の結果を踏まえて、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性を考察し、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の検討を行う。

これらの研究課題に対し、本研究では、文献調査とインタビュー調査を実施する。以下に、各研究課題における目的と研究方法を述べる。

(1)研究課題 A 地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の現状を明らかにする。

研究課題 A では、地域包括ケアシステムの構築を推進する背景と、高齢者の社会参加活動の位置づけ、高齢者の社会参加活動の枠組みや課題等を明らかにする。そのため、政策文書、図書、学術論文を中心に文献調査を実施する。調査対象の文献に関する時期は、介護保険施行の 2000 年前後から 2020 年現在までを中心に調査を行う。

(2)研究課題 B 高齢者ケアとして的高齢者の社会参加活動の現状と課題を明らかにする。

研究課題 B では、高齢者ケアとして的高齢者の社会参加活動の現状と課題を明らかにする。本研究における高齢者ケアの概念や、地域における高齢者ケアを目的とした社会参加活動の現状と課題を明らかにするために、文献調査とインタビュー調査を実施する。文献調査の対象は、図書や雑誌記事、学術論文を中心とする。調査対象の文献に関する時期は、介護保険施行の 2000 年前後から 2020 年現在までを中心に調査を行う。高齢者向け紙芝居の前身に関しては、それより溯って調査を行う。

また、高齢者ケアとして主に介護現場で利活用されている、高齢者向け紙芝居の編集者と監修者にインタビュー調査を行う。インタビュー調査では、高齢者向け紙芝居の出版・編集の現状と課題、目的、意義、展望等を明らかにする。

(3)研究課題 C 紙芝居を活用して社会参加活動を行う高齢者の目的や意義、現状と課題、地域社会との関係等を明らかにする。

研究課題 C では、紙芝居を活用して社会参加活動を行う高齢者ボランティアに半構造化インタビュー調査を実施する。インタビュー調査では、高齢者に向けた紙芝居上演を中心に、活動の現状と課題、活動における意識や行動、目的と意義、可能性と展望、地域との関係等を明らかにし、地域包括ケアと高齢者ケアの観点から考察を行う。

研究課題 A・B・C の結果から、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性を考察し、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動のあり方を検討する。

1.4 用語の定義

本節では、本論文の主要な用語である「地域包括ケアシステム」「高齢者」「社会参加活動」「高齢者ケア」「紙芝居」について、下記のように定義する。

(1)地域包括ケアシステム

厚生労働省によると、地域包括ケアシステムとは、「2025年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、概ね30分圏内に提供される地域の包括的な支援・サービス提供体制」と示されている。地域包括ケアの概念はどこでも変わらないが、地域包括ケアの概念に基づくネットワークである地域包括ケアシステムは、「保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていく」とされている⁵⁸。

また、地域包括ケアシステムの5つの構成要素には、「介護」、「医療」、「予防」という専門的なサービスと、その前提としての「住まい」と「生活支援・福祉サービス」が相互に関係し、連携しながら在宅の生活を支えている。地域包括ケアシステムの提供においては、前述の5つの構成要素に加えて、地域が持つ「自助・互助・共助・公助」という4つの役割が必要とされている。4つの役割のうちの自助・互助に、セルフケアや高齢者のボランティア活動が含まれると明示されている⁵⁹。

これらを踏まえ、本研究においては、地域包括ケアシステムの定義を「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるような、個々の人のつながりをもとにした地域のネットワーク」と定義する。

なお、地域包括ケアシステムの詳細は、第2章で述べる。

(2)高齢者

本研究における高齢者とは、特に断りが無い限り65歳以上とする。高齢者に関する一律な定義はないとされているが^{60・61・62}、内閣府の高齢社会白書では65歳以上を高齢者としている⁶³。また、日本の高齢者医療制度では、65~74歳を前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と区分している。

(3)社会参加活動

片桐恵子は、退職シニアを対象に実施したインタビュー調査の結果から、社会参加活動を「自己のために行う、家族・親族などの親しいネットワークにとどまらない広い対人関係を

基盤とし、社会と積極的にかかわりをもつ行動」と定義している⁶⁴。

高齢社会対策大綱（2018年2月16日閣議決定）においては、社会参加活動の促進として「活力ある地域社会の形成を図るとともに、高齢者が年齢や性別にとらわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍したり、学習成果をいかしたりできるよう、高齢者の社会参加活動を促進する」と明記している⁶⁵。

また、高齢者の社会参加活動は、地域包括ケアシステムの構築を推進するために、地域が持つ自助・互助の役割りとして、高齢者のセルフケアやボランティア活動が期待されている。

これらを踏まえ、本研究では、社会参加活動を「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを最期まで続けるために、自助と互助のために行う、地域のネットワークをはじめとした社会とかわりを持つ行動」と定義する。

(4)高齢者ケア

広井良典は、ケアという言葉の概念は、「1. 狭くは看護や介護、2. 中間的なものとして世話、3. 広義では配慮・関心・気遣い」という3つの概念に整理しており⁶⁶、ケアという行為を、「他者とのケアのかかわりを通じて、ケアする人自身がある力を得たり、自分という存在の確認をしたりする」と示している。また、ケアを「与える・与えられる」という一方向的な関係として捉えず、人間はケアへの欲求を持っており、それが実現する場としてさまざまなかかわりの形があると論じている⁶⁷。そして、ケアのさらに広い意味として、人と人との、あるいは自然等との「関係性」と重なる意味で使われることが増えていると述べている^{68, 69}。

メイヤロフ、ミルトンは、人がよりよく生きるためにケアの持つ重要性を論じ、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することを助けることである」「他の人々をケアすることをおして、他の人々に役立つことによって、その人は自身の生の真の意味を生きているのである。（中略）それは支配したり、説明したり、評価したりしているからではなく、ケアし、かつケアされているからなのである」と述べている⁷⁰。

2008年の地域包括ケア研究会の報告書によると、地域包括ケアシステムを提供するための前提として、自助・互助・共助・公助の役割を述べている。自助は、自らの選択に基づいて自分らしく生きるための最大の前提であり、互助は家族・親族、地域の人々、友人等との助け合いにより行われ、人生と生活の質を豊かにするものと示している。また、地縁・血縁が希薄な都市部の互助を推進するため、趣味・興味、知的活動、身体活動、レクリエーション、社会活動を多様な関係をもとに進めるべきと指摘している。そして、地域で安全で質の高いケアを提供するために、全ての人が能力を出し合ってケアの提供に貢献できることが必要とされると述べている⁷¹。

本研究においては、前述したケアの概念と地域包括ケアシステムにおける自助・互助の概念を踏まえ、「高齢者ケア」をより柔軟に捉えて「高齢者に対して配慮、関心、気遣いをもって接し、ケアする者とケアされる者との間に構築される関係である」と定義する。

なお、本研究における、地域包括ケアシステムの自助・互助の捉え方と高齢者ケアの関連については、第3章でも述べる。

(5)紙芝居

図書館情報学用語辞典第5版の「紙芝居」の項では、「物語を場面に分け、B4からA3判の大きさの厚紙の表に1枚ずつ絵として描き、厚紙の裏に文を書いたもの。一般に紙芝居舞台に入れ、演者が絵を順番に見せながら物語る日本独特の文化財とみなされている」⁷²と紹介されている。また、片岡輝は、紙芝居が受け継いだ2つの要素として、芸能の要素を楽しむ街頭紙芝居と、説話の要素を含む教育紙芝居を挙げている⁷³。まついしは、紙芝居作家と演じ手の視点から述べた紙芝居の理論書において、紙芝居の特性を、作品への強い集中と臨場感によっておきるコミュニケーションによって、演じ手と観客・観客相互が、作家世界への共感をつくりだす⁷⁴、と論じている。上地ちづ子は、紙芝居は、ストーリーに従って描かれた何枚かの場面を次々と引き抜きながら、ストーリーを効果的に語っていくメディアで、演じ手によって演じられなくては、紙芝居は完結しない⁷⁵、という見解を示している。鈴木常勝は、「紙芝居は絵と筋書きだけでは半製品であり、演者の語りと観客の反応によって完成品となる。演者のアドリブ、演者と観客の掛け合いが演劇としての紙芝居を生む」⁷⁶と述べている。

これらを踏まえ、本研究では、紙芝居を「街頭紙芝居と教育紙芝居の要素を持ち、一般に紙芝居舞台に入れ、何枚かの絵を抜きながら演じられる芝居であり、演じ手と観客と観客相互で共感して楽しむコミュニケーションメディアである」と定義する。

なお、手づくり紙芝居に関しては、自由な創作が想定されるため、必ずしもこの定義にあてはまらない可能性がある。また、紙芝居に関しては、第3章でも述べる。

1.5 論文の構成

第1章では、研究背景と研究目的、先行研究、研究課題と研究方法、用語の定義、論文の構成を述べる。第2章では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の現状を明らかにする。第3章では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の実際を明らかにする。第4章では、高齢者向け紙芝居の出版に関する現状と意義および展望に関する調査結果と考察を行う。第5章では、紙芝居を活用した社会参加活動を行う高齢者ボランティアへのインタビュー調査結果と考察を述べる。第6章では、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性の考察を行い、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動のあり方について検討を行う。第7章では研究のまとめを行い、研究の課題と今後の展望を述べる。

-
- 1 内閣府. 令和 2 年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.2-3.
 - 2 内閣府. 令和 2 年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.4-5.
 - 3 内閣府. 令和 2 年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.10.
 - 4 孤立死: 社会から孤立した状態で亡くなり、長期間気づかれないこと。独居高齢者や老老介護世帯だけでなく、若年層の家族がいる世帯や生活困窮世帯でも起こっている。
小学館. “孤立死”. デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ, <https://japanknowledge.com/>, (参照 2020-12-15)
 - 5 内閣府. “第 2 章調査結果の概要: 3.生活環境に関する事項”. 平成 30 年度 高齢者の住宅と生活環境に関する調査結果. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h30/zentai/pdf/s2.pdf>, (参照 2020-010-20).
 - 6 厚生労働省. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/, (参照 2020-010-20).
 - 7 厚生労働省. “地域包括ケアシステムの 5 つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」”. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf, (参照 2020-10-20).
 - 8 厚生労働省. “生活支援サービスの充実と高齢者の社会参加”. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link5.pdf, (参照 2020-10-20).
 - 9 厚生労働省. “世帯員の健康状況”. 平成 28 年度 国民生活基礎調査. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/04.pdf>, (参照 2020-10-30).
 - 10 厚生労働省. “第一章高齢化の状況: 第二節高齢期の暮らしの動向(2) 2 健康・福祉”. 平成 30 年版高齢社会白書. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2018/html/gaiyou/s1_2_2.html, (参照 2020-10-30).
 - 11 スポーツ庁. 平成 30 年度 体力・運動能力調査結果の概要. https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2019/10/15/1421921_1.pdf, (参照 2020-10-30).
 - 12 日本老年学会, 日本老年医学会. 「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ」報告書. 2017. http://geront.jp/news/pdf/topic_170420_01_01.pdf, (参照 2020-10-30).
 - 13 内閣府. “社会参加活動への考え方に関する事項”. 平成 25 年度 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/pdf/s2-2-1.pdf>, (参照 2020-10-30).
 - 14 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.118-219.
 - 15 齋藤民, 李賢情, 甲斐一郎. 高齢転居者に対する社会的孤立予防プログラムの実施とその評価の試み. 日本公衆衛生雑誌. 2006, 53(5), p.338-346.

-
- 16 藤原佳典, 倉岡正高編著. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 大修館書店, 2016, p.5-9.
- 17 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 李相侖, 井上かず子, 吉田裕人, 佐久間尚子, 吳田陽一, 石井賢二, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム: “REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果. 日本公衆衛生雑誌, 2006, 53(9), p.702-714.
- 18 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 19 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.4-8.
- 20 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.174.
- 21 文民教育協会子どもの文化研究所編. 新・紙芝居全科: 小さな紙芝居の大きな世界, 文民教育協会子どもの文化研究所, 2007, p.189.
- 22 遠山昭雄. 「介護紙芝居」とは何か (四十九). 絵芝居. 2020, (317), p.9-10.
- 23 まついのりこ. 紙芝居: 共感のよろこび. 童心社, 1998, p.11-18.
- 24 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.24-27.
- 25 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. 藤原佳典監修. 地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉: 現役シニアボランティアが選んだ子どもたちに何度でも読んであげたい絵本続々101選. ライフ出版社, 2015, p.225-263.
- 26 片桐恵子, 菅原育子. 社会参加と地域への溶け込みの関連: 地域での社会的ネットワークの及ぼす影響に着目して. 応用老年学. 2010, 4(1), p.40-50.
- 27 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.216-217.
- 28 佐藤陽. 支え合いにつなぐシニア世代の地域デビュー. 十文字学園女子大学紀要. 2020, 50, p.47-60.
- 29 岡本秀明. 都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討: 地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて. 社会福祉学. 2012, 53(3), p.3-17.
- 30 藤原佳典. 高齢者のシームレスな社会参加と世代間交流: ライフコースに応じた重層的な支援とは. 日本世代間交流学会誌. 2014, 4(1), p.17-23.
- 31 藤原佳典, 倉岡正高編著. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 大修館書店, 2016, p.1-12.

-
- ³² 斎藤ゆか. “シニアボランティアの活躍”. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 藤原佳典, 倉高正高編著. 大修館書店, 2016, p.13-32.
- ³³ 伊藤順子. 高齢者のボランティア活動参加動機とボランティア活動満足感、活動から得た利益および生活満足度との関係. 高齢者のケアと行動科学. 2019, 24, p.42-52.
- ³⁴ 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- ³⁵ Thomas, Patricia A. Is it better to give or to receive? Social support and the well-being of older adults. *The Journal of Gerontology : Series B Psychological sciences and social sciences*. 2010, 65B(3), p.351-357.
- ³⁶ 豊島彩, 佐藤眞一. 高齢者のソーシャルサポートの提供に対する評価の質的検討. 生老病死の行動科学. 2014, 17-18, p.65-78.
- ³⁷ 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 李相侖, 大場宏美, 吉田裕人, 佐久間尚子, 深谷太郎, 小宇佐陽子, 井上かず子, 天野秀紀, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因: “REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から, 日本公衆衛生雑誌. 2007, 54(9), p.615-625.
- ³⁸ 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 大場宏美, 李相侖, 小宇佐陽子, 矢島さとる, 吉田裕人, 深谷太郎, 佐久間尚子, 内田勇人, 新開省二. 高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果: 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム”REPRINTS”から. 日本公衆衛生雑誌. 2010, 57(6), p.458-466.
- ³⁹ Sakurai, Ryota; Yasunaga, Masashi; Murayama, Yoh; Ohba, Hiromi; Nonaka, Kumiko; Suzuki, Hiroyuki; Sakuma, Naoko; Nishi, Mariko; Uchida, Hayato; Shinkai, Shoji; Rebok, George W; Fujiwara, Yoshinori. Long-term effects of an intergenerational program on functional capacity in older adults: Results from a seven-year follow-up of the REPRINTS study. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 2016, 64, p.13-20.
- ⁴⁰ 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.23-27.
- ⁴¹ 堺正一. 高齢者と紙芝居: 紙芝居の歴史とともに歩んだ人たち. 人間の福祉. 2014, (28), p.1-20.
- ⁴² 堀田穰. 紙芝居研究をめぐる現況について: 展望と課題. 人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要. 2014, (33), p.136(1)-119(18)

-
- 43 奥田真美. “宅老所「みんなの家」(西伊豆町)における創作紙芝居の取り組み”. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 遠山昭雄監修. 雲母書房, 2006, p.141-161.
- 44 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, 111p.
- 45 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.216-217.
- 46 片桐恵子, 菅原育子. 社会参加と地域への溶け込みの関連: 地域での社会的ネットワークの及ぼす影響に着目して. 応用老年学. 2010, 4(1), p.40-50.
- 47 岡本秀明. 都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討: 地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて. 社会福祉学. 2012, 53(3), p.3-17.
- 48 佐藤陽. 支え合いにつなぐシニア世代の地域デビュー. 十文字学園女子大学紀要. 2020, 50, p.47-60.
- 49 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 李相侖, 大場宏美, 吉田裕人, 佐久間尚子, 深谷太郎, 小宇佐陽子, 井上かず子, 天野秀紀, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因: “REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から. 日本公衆衛生雑誌. 2007, 54(9), p.615-625.
- 50 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 大場宏美, 李相侖, 小宇佐陽子, 矢島さとる, 吉田裕人, 深谷太郎, 佐久間尚子, 内田勇人, 新開省二. 高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果: 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム”REPRINTS”から. 日本公衆衛生雑誌. 2010, 57(6), p.458-466.
- 51 Sakurai, Ryota; Yasunaga, Masashi; Murayama, Yoh; Ohba, Hiromi; Nonaka, Kumiko; Suzuki, Hiroyuki; Sakuma, Naoko; Nishi, Mariko; Uchida, Hayato; Shinkai, Shoji; Rebok, George W; Fujiwara, Yoshinori. Long-term effects of an intergenerational program on functional capacity in older adults: Results from a seven-year follow-up of the REPRINTS study. Archives of Gerontology and Geriatrics, 2016, 64, p.13-20.
- 52 鈴木宏幸, 渋川智明. 認知症対策の新常識: 「絵本の読み聞かせ」が、予防・機能改善に効く!. 日東書院本社, 2018, p.30-34.
- 53 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.4-47.
- 54 堺正一. 高齢者と紙芝居: 紙芝居の歴史とともに歩んだ人たち. 人間の福祉. 2014, (28), p.1-20.
- 55 堀田穰. 紙芝居研究をめぐる現況について: 展望と課題. 人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要. 2014, (33), p.136(1)-119(18)
- 56 奥田真美. “宅老所「みんなの家」(西伊豆町)における創作紙芝居の取り組み”. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 遠山昭雄監修. 雲母書房, 2006, p.141-161.

-
- 57 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, p.12-13.
- 58 厚生労働省. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/, (参照 2020-10-30).
- 59 厚生労働省. “地域包括ケアシステムの5つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」”. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf, (参照 2020-10-20).
- 60 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.3.
- 61 岐阜県図書館. “「高齢者」が65歳以上とされている根拠は何か”. レファレンス協同データベース. 国立国会図書館. 2009-10-23. https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000029866, (参照 2020-11-08).
- 62 京都府立高等学校図書館協議会司書部会. “「高齢化社会」「高齢社会」「超高齢社会」はそれぞれ高齢者人口が何パーセントと定義されているか”. レファレンス協同データベース. 国立国会図書館. 2017-4-24. https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000187804, (参照 2020-11-08).
- 63 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.2-6.
- 64 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.208-209.
- 65 内閣府. “3.学習・社会参加: (2)社会参加活動の促進”. 高齢社会大綱(平成30年2月16日閣議決定). 2018-2-16. <https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/h29/2-3.html>, (参照 2020-11-08).
- 66 広井良典. ケアを問いなおす: 深層の時間と高齢化社会. 筑摩書房, 1997, p.9-13.
- 67 広井良典. ケア学: 越境するケアへ. 医学書院, 2000, p.16-17, (シリーズケアをひらく).
- 68 広井良典. 特集, ケアの社会政策: ケアの倫理と公共政策. 社会保障研究. 2016, 1(1), p.22-37.
- 69 広井良典. ケアのゆくえ科学のゆくえ. 岩波書店, 2005, p.205-207, (フォーラム共通知をひらく).
- 70 メイヤロフ, ミルトン. ケアの本質: 生きることの意味. 田村真, 向野宣之訳. ゆみる出版, 1987, p.13-16.
- 71 地域包括ケア研究会(平成20年度老人保健健康増進等事業). “地域包括ケア研究会報告書: 今後の検討のための論点整理”. 地域包括ケア研究会 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. 2010. https://www.murc.jp/sp/1509/houkatsu/houkatsu_01_pdf01.pdf, (参照 2020-11-15).
- 72 日本図書館情報学会. “紙芝居”. 図書館情報学用語辞典第5版. ジャパンナレッジ, <https://japanknowledge-com/>, (参照 2020-11-15).

-
- ⁷³ 片岡輝. 文民教育協会子どもの文化研究所編. “紙芝居の魅力と可能性 おもしろさの復権”. 新・紙芝居全科: 小さな紙芝居の大きな世界. 文民教育協会子どもの文化研究所, 2007, p.190-199.
- ⁷⁴ まついのりこ. 紙芝居: 共感のよろこび. 童心社, 1998, p.11-18.
- ⁷⁵ 上地ちづ子. 紙芝居の歴史. 久山社, 1997, p7, (日本児童文化史叢書, 15).
- ⁷⁶ 鈴木常勝. メディアとしての紙芝居. 久山社, 2005, p.40-41, (日本児童文化史叢書, 38).

2. 地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動

本章では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の現状を明らかにする。第1節では、地域包括ケアシステムの構築における背景と、地域の担い手として期待される高齢者の社会参加活動をめぐる現状を明らかにする。第2節では、地域包括ケアシステムの理念と地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の位置づけを明らかにする。さらに、高齢者の社会参加活動の枠組み、現状と課題を明らかにする。第3節では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動として想定される、ボランティア活動の概念と、高齢者のボランティア活動の現状と課題を明らかにする。

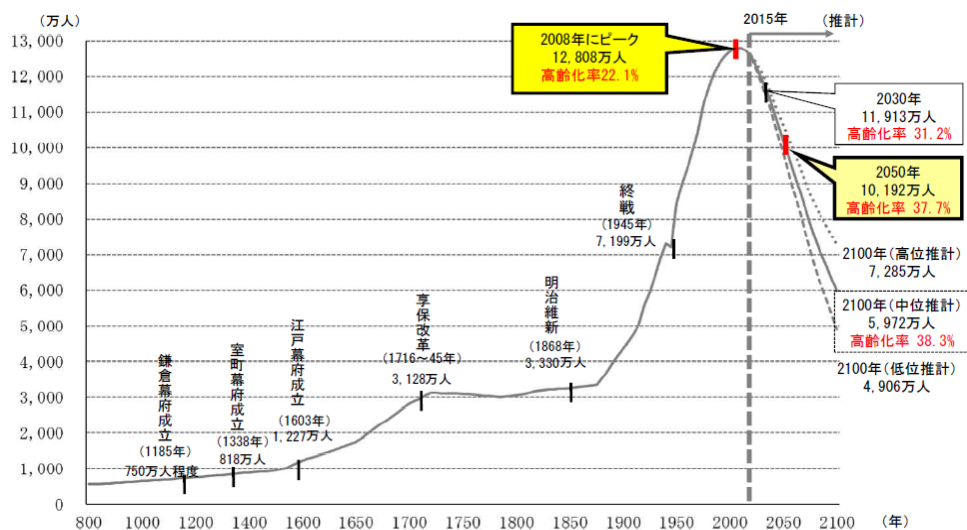
2.1 日本の高齢者の社会参加活動をめぐる現状

2.1.1 日本の少子高齢化・人口減少社会の現状

日本は現在、世界で最も高い高齢化率で少子高齢化が進んでいる。令和2年版高齢社会白書によると、2019年10月1日現在、日本の総人口は1億2,617万人で、そのうち65歳以上人口は3,589万人である。日本の高齢化率（総人口に占める65歳以上の割合）は1970年に7%、1994年には14%を超えてその後も上昇を続け、2019年に28.4%となった。一方、現役世代（15歳～64歳）は、1995年以降、減少が続き2019年には7,507万人と総人口の59.5%である¹。また、日本の高齢化の特徴として高齢化の進行が速いことが挙げられる²。

少子高齢化・人口減少社会の背景には、出生数の低下と平均寿命の延伸による長寿化がある。2018年現在、日本の平均寿命は男性81.25年、女性87.32年と、前年に比べて男性は0.16年、女性は0.05年延びている。今後、男女とも平均寿命は延びて、2065年には、男性84.95年、女性91.35年となると予測されている³。一方、2018年の出生数は91万8,400人で、2017年の出生数の94万6,146人より27,746人減少している⁴。出生数は今後も減少を続け、2065年には約56万人になると推計されている⁵。

日本の総人口は 2008 年の 1 億 2,808 万人をピークに長期の人口減少過程に入っている。明治維新の頃（1868 年）の人口は約 3,330 万人であったが、その後の約 140 年間で急激に増加している。そして、今後の 80 年間では急激に人口が減少し、約 100 年前の大正時代後半の水準に戻っていくと推定されている（図 1）⁶。つまり、日本は人口のピークを過ぎて、既に少子高齢化・人口減少社会に入っており、今後も進行する少子高齢化・人口減少社会を世界のトップランナーとして歩いていくことになる。



(出典) 1920年までは、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」(1974年)、1920年からは、総務省「国勢調査」、「人口推計年報」、「平成17年及び22年国勢調査結果による補間補正人口」、2015年からは 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年推計)」を基に作成。

図 1：日本の総人口の推移と推計

出典：国土交通省 国土の長期展望専門委員会（第 1 回）配付資料

「これまでの国土の状況変化について」より引用

2.1.2 高齢者の社会参加活動への期待

少子高齢化・人口減少社会の課題は、社会を支える担い手の不足と社会保障給付費の増大である。1965年には1人の65歳以上の者に対して10.8人の現役世代（15～64歳の者）で支えていたが、2015年には65歳以上の者1人に対して現役世代2.3人となり、2065年には65歳以上の者1人に対して1.3人の現役世代という割合が推定されている（図2）⁷。このような人口構成の変化に対応するには、現役世代と高齢者が「支える側」と「支えられる側」という一律の関係ではなく、互いに支え合う関係が求められる。

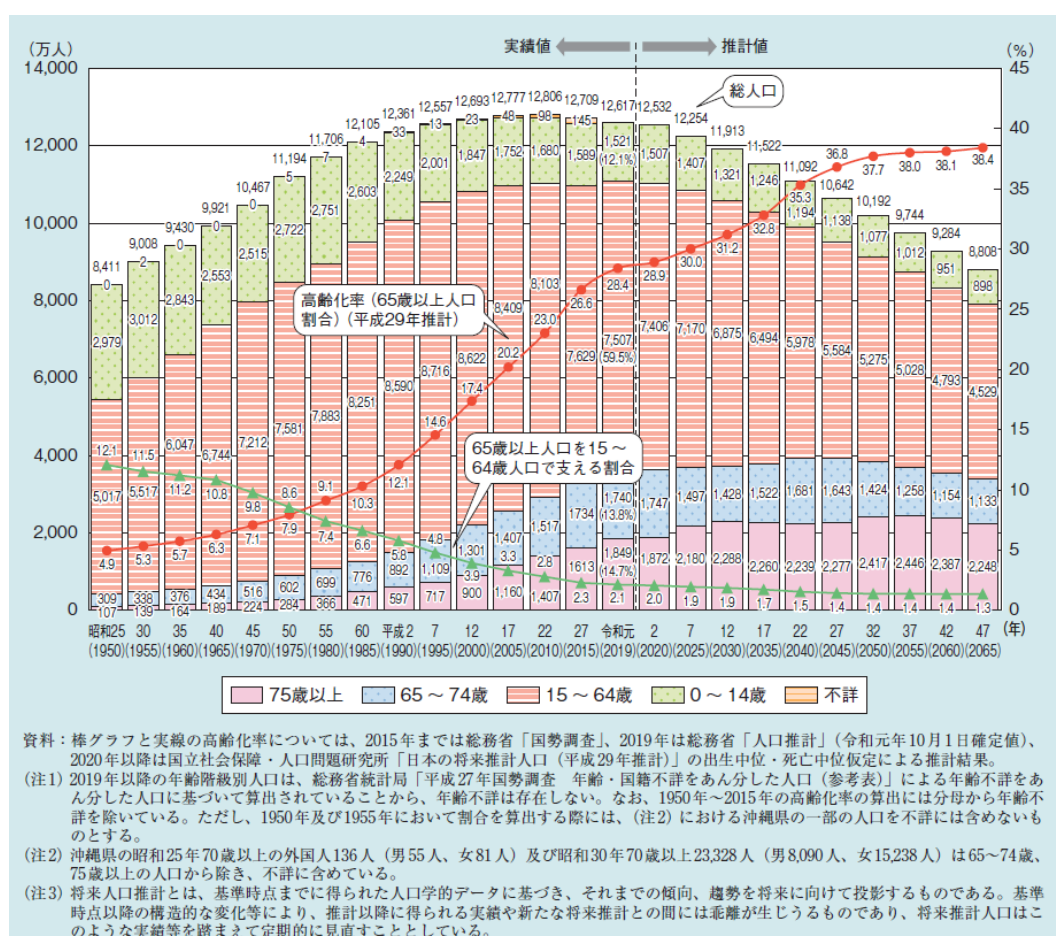


図2：高齢化の推移と将来推計

出典：内閣府 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, p.4より引用

高齢者を「支えられる側」と一律に見なすことは、社会保障の負担と受益の差異の観点において、現役世代と高齢者の対立を生む懸念がある。国立社会保障・人口問題研究所の「平成29年度社会保障費用統計」は、社会保障給付費（年金・医療・福祉その他を合わせた額）全体は、2017年度は120兆2,443億円と過去最高の水準になったと報告している⁸。元気な高齢者の社会参加活動が求められる一面には、社会の担い手を増やしたい社会の側からの期待があるといえる。

2.1.3 高齢者の社会参加活動を促進する現状

高齢社会対策大綱によると、「ボランティア活動や NPO 活動等を通じた高齢者の社会参加の機会、生きがい、健康維持、孤立防止等につながるとともに、福祉に厚みを加えるなど地域社会に貢献し、世代間、世代内の人々の交流を深めて世代間交流や相互扶助の意識を醸成するものである」と明示している。また、高齢者が他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍したり、学習成果をいかせるよう、社会参加活動を促進すると示している⁹。

高齢者の社会参加活動には、現役時代の能力を活かした活動の他、興味関心がある活動、新たにチャレンジする活動があり、社会参加活動の種類として「一般就労、起業、趣味活動、健康づくり活動、地域活動、介護、福祉以外のボランティア活動等」が挙げられている¹⁰。社会参加活動の状況においては、60歳～69歳では71.9%、70歳以上では47.5%の者が働いているか、またはボランティア活動、地域社会活動（町内会、地域行事など）、趣味やおけいこ事を行っていることが報告されている¹¹。

高齢者の社会参加活動を促進する元気な高齢者が増加していることは、各種の調査や研究で明らかとなっている。平成28年国民生活基礎調査によると、高齢者の健康意識の面において、65歳以上で健康と思っている者（よい・まあよい・ふつうを合わせた者）の割合は、男性で76.4%、女性で74.5%と報告されている。75歳以上では、男性で69.3%、女性で66.4%となっており、多くの高齢者が日常生活において、自身を健康と捉えていることが報告されている¹²。

高齢者の身体機能は平均寿命の延伸とともに改善・向上し、社会参加活動を行うのに相応しい体力があるといえる。高齢者の体力、運動能力を測定する新体力テスト（握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行）の合計点は、実施するご

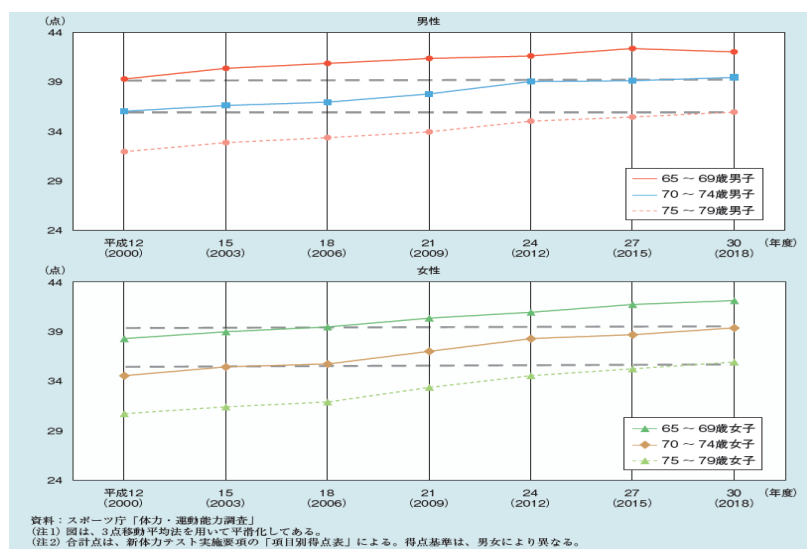


図 3：新体力テストの合計点

出典：内閣府 令和2年版高齢社会白書、高齢化の状況、2020,p.27.より引用

とに向上傾向にある（図3）¹³。また、同一の地域に在住する高齢者に対する長期縦断研究から、身体機能において最小で3歳から最大で11歳相当の若返りが検証された¹⁴。

さらに、高齢者は健康寿命の延伸も明らかとなっており、活力ある高齢期を送ることができると示唆している。日常生活に制限のない期間とされる健康寿命は、2016年時点で男性が72.14年、女性が74.79年となっており、それぞれ2010年と比べて男性1.72年、女性1.17年延びている。そして、2010年から2016年の健康寿命の伸びは、同期間における平均寿命の伸び（男性1.43年、女性0.84）よりも大きい。また、2016年の平均寿命は男性が80.98年、女性が87.14年であることから、健康寿命は平均寿命より男性8.84年、女性12.35年短いことになる（図4）¹⁵。

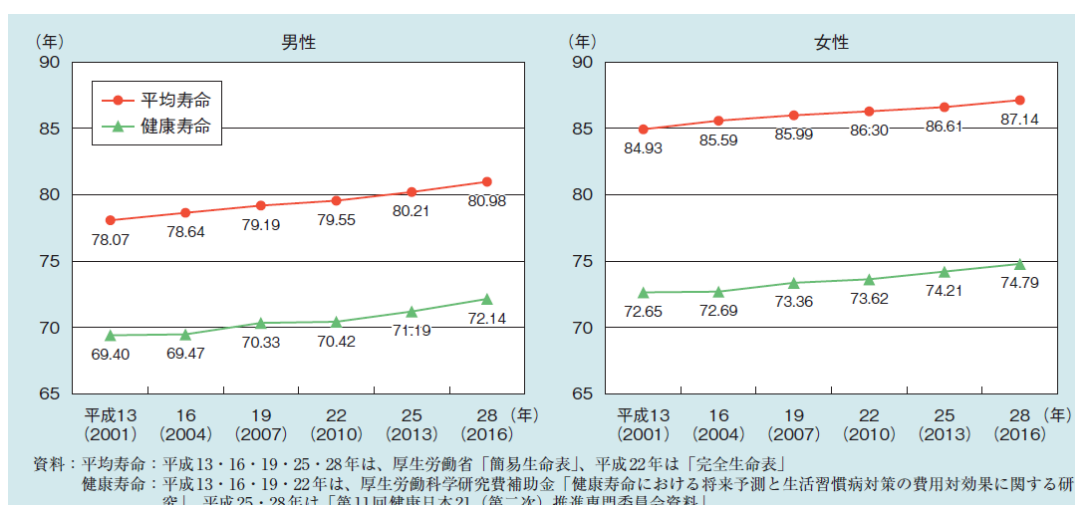


図4：健康寿命と平均寿命の推移

出典：内閣府 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.28. より引用

また、65歳以上の高齢者の一人暮らしの者が男女ともに増加傾向にある。近年までの日本においては、高齢者の家族形態は子ども世帯と一緒に暮らすことが多かった。1980年の65歳以上の一人暮らしは男性約19万人、女性約69万人、65歳以上人口に占める割合は男性4.3%、女性11.2%であった。2015年には男性約192万人、女性約400万人、65歳以上人口に占める割合は男性13.3%、女性21.1%と増加している。2018年では夫婦のみの世帯と単独世帯をあわせると、全体の6割ほどを占めている¹⁶。

高齢者の一人暮らしが増加することにより生じる問題の一つが、社会的孤立である。60歳以上の一人暮らし世帯では、会話の頻度（電話やEメールを含む）が「2～3日に1回」以下の者も多く、男性で28.8%、女性で22.0%を占める¹⁷。人間が社会的な接触を失うことは、健康を害するほど大きな影響があり、「閉じこもり」の危険性が高まる。地域で過ごす時間が多くなる高齢者が社会的孤立を防ぐには、自分が生きる地域社会においてネットワークを構築する社会参加活動が効果的である¹⁸。

2.2 地域包括ケアシステムの構築における高齢者の社会参加活動

2.2.1 地域包括ケアシステムの理念

日本の少子高齢化・人口減少社会に対応する国の対策の一つとして「地域包括ケアシステム」がある。地域包括ケアシステムとは、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるような包括的な支援・サービス提供体制のネットワークであり、2025年を目途に構築の実現を目指している。

地域包括ケアシステムは、おおむね30分以内に医療・介護・予防・住まい・生活支援サービスが提供される日常生活圏域を単位として想定している。地域包括ケアシステムの概念は共通であるが、地域包括ケアシステムの仕組みは保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが必要とされている。例えば、人口は横ばいで75歳以上人口が急増する大都市部、75歳以上人口の増加は緩やかだが人口は減少する町村部等、高齢化の進展状況には大きな地域差が生じるため、地域の実情に合った仕組みを構築する必要がある（図5）¹⁹。

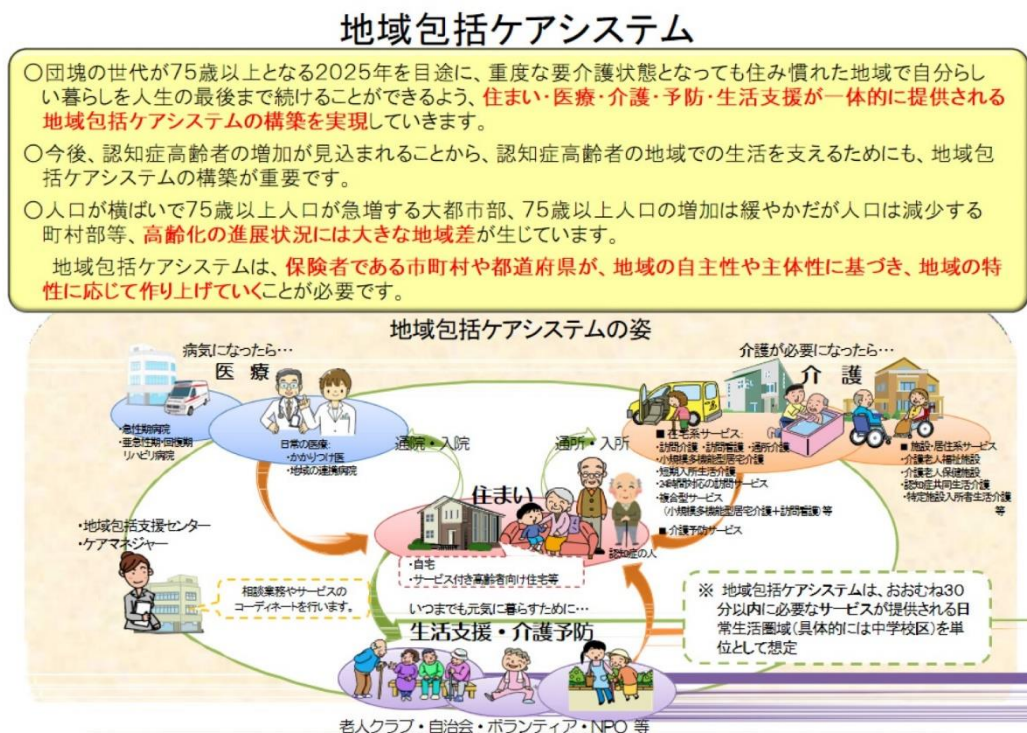


図 5：「地域包括ケアシステム」の概要

出典：厚生労働省 地域包括ケアシステムより引用

地域包括ケアシステムの5つの構成要素は、「介護」、「医療」、「予防」という専門的なサービスと、その前提としての「住まい」と「生活支援・福祉サービス」が相互に関係し、連携しながら在宅の生活を支えている。地域包括ケアシステムの提供においては、前述の5つの構成要素に加えて地域が持つ「自助・互助・共助・公助」という4つの役割が必要である。とりわけ、伝統的な地縁や血縁の弱い都市部では、意識的に互助の強化が必要と指摘されている（図6）^{20, 21}。

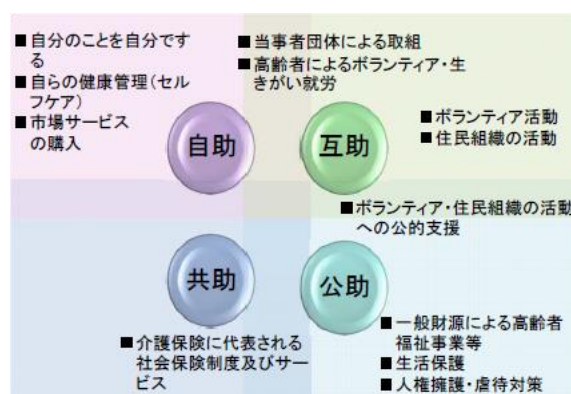


図6: 「自助・互助・共助・公助」から見た「地域包括ケアシステム」

出典: 厚生労働省 地域包括ケアシステムの5つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」より引用

地域包括ケア研究会は、2013年3月の報告書²²において「自助・互助・共助・公助」を誰の費用負担で行うのかという視点で整理を行っている。以下にそれぞれの概要を述べる。

1. 「公助」は公の負担、すなわち税による負担。「共助」は介護保険や医療保険にみられるように、リスクを共有する仲間（被保険者）の負担。「自助」は、文字通り「自らの負担」。「自助」の中には、「自分のことを自分でする」という以外に、自費で一般的な市場サービスを購入する方法も含む。

2. 介護保険は、「自助」である自己負担が費用の1割、残りの保険給付分の負担を「共助」である保険料と「公助」である税が折半しているが、社会保険の仕組みをベースとする「共助」の仕組みと考える。

3. 「互助」は、相互に支え合っているという意味で「共助」と共通点があるが、費用負担が制度的に裏付けられていない自発的なものであり、地域の住民やボランティアという形で支えられていることが多い。また、寄附金などの支援を受けている場合もある。

4. 有償ボランティアとして、利用者から市場価格に及ばない報酬のみを受け取っている場合は、「互助的要素」と「自助的要素」を備えている。また、ボランティア活動に市町村が補助金を交付している場合は、「互助」と「共助・公助」が重複している。

さらに、地域包括ケア研究会は、2013年3月の報告書²³において「自助・互助・共助・公助」は時代とともに、範囲や役割を変化させていくと述べている。地域包括ケアシステムの構築を目指す2025年には、高齢者の単身世帯が一層増加し、その後も増加が続いていく。このような時代には、自助・互助の概念や求められる範囲や役割も、新しい形が求められる。また、少子高齢化や財政状況を考慮すれば、共助・公助の大幅な拡充を期待することは難しいと考えられる。特に地縁や血縁が弱い都市部では、個人の積極的な取り組みが、都市型の自助・互助として注目されることを示唆している。

地域包括ケアシステムは、従来の医療・介護を核とする狭義の地域包括ケアシステムだけでなく、高齢者の生きがい・自己実現を原動力とした社会参加活動を通じて、できるだけ自立して生活を支援する広義の地域包括ケアシステムも併せて検討することが示されている。広義の地域包括ケアシステムには、自助・互助を中心とした、高齢者の学び、健康・生きがいづくり、コミュニケーションの場の創出を基盤に、社会の変化に合わせながら、新しい暮らしの仕組みを作るまちづくりと捉える視点が必要であると、指摘されている²⁴。

また、地域包括ケアシステムの構築においては、「主役は住民、専門職はサポーター、地域は舞台、行政は仕掛け人」と考えられている。行政は、市民の理解を深め、取り組みが動き出すきっかけをつくる仕掛け人であり、具体的には情報を提供する、市民を含む関係主体が集まって協議する場を設ける等、地域包括ケアシステムの方向性、すなわち、まちづくりの方向性の案を示す役割が期待されている²⁵。

2.2.2 地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の位置づけ

地域包括ケアシステムの構築を推進するには、高齢者が一律に「支えられる側」としてではなく、「支える側」として自発的に社会参加活動を行い、地域の担い手として活躍することが必要となる。2017年度の報告によると、介護保険制度において、65歳から74歳では要支援認定を受けた人が1.3%、要介護認定を受けた人が2.9%で、75歳以上では要支援認定を受けた人が8.6%、要介護認定を受けた人が23.3%となっている²⁶。この結果から、特に65歳から74歳の前期高齢者においては、高齢者が一律に支えられる側ではないことが示唆され、高齢者の社会参加活動の可能性がうかがえる。

厚生労働省は、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、地域包括ケアシステムの構築を目指している。少子高齢化・人口減少社会においては2025年以降も介護需要は増加することが予測されている。また、地域の担い手となる生産年齢人口も減少し、2040年前後には、団塊ジュニア世代が65歳に到達する。つまり、2025年以降も持続可能な地域包括ケアシステムを支えるために、高齢者の自助・互助の役割を果たす社会参加活動が重要であると考えられる。

要支援者に対する介護予防が、2015 年度より介護予防・日常生活支援総合事業として実施され、介護予防は生活支援と一体的に、住民自身や専門職以外の担い手を含めた多様な主体による提供体制へと移行していくと示された²⁷。従来の植木鉢の中に位置づけられた予防活動の多くは、自助や互助などの取り組みを通して、社会参加活動の機会が確保され、日常生活の中で生活支援や介護予防の機能が発揮されることになった（図7）²⁸。高齢者の社会参加活動は介護予防の新たな役割を果たすことが求められている。



図 7：進化する「地域包括ケアシステム」の植木鉢

出典：三菱UFJリサーチ&コンサルティング「<地域包括ケア研究会>地域包括ケアシステムと地域マネジメント」（地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書）平成 27 年度厚生労働省老人保健健康増進等事業, 2016 年より引用

厚生労働省は、地域住民の参加を前提とした生活支援・介護予防サービスを充実させるために、高齢者の社会参加を図²⁹のように位置づけている。高齢者の単身世帯等が増加し、支援を必要とする軽度の高齢者が増加する中、生活支援の必要性が増加している。そのため、ボランティア、NPO、民間企業、協同組合等の多様な主体が生活支援・介護予防サービスを提供することが必要であり、高齢者が社会参加活動を通して社会的役割を持つことが生きがいや介護予防につながると示している²⁹。

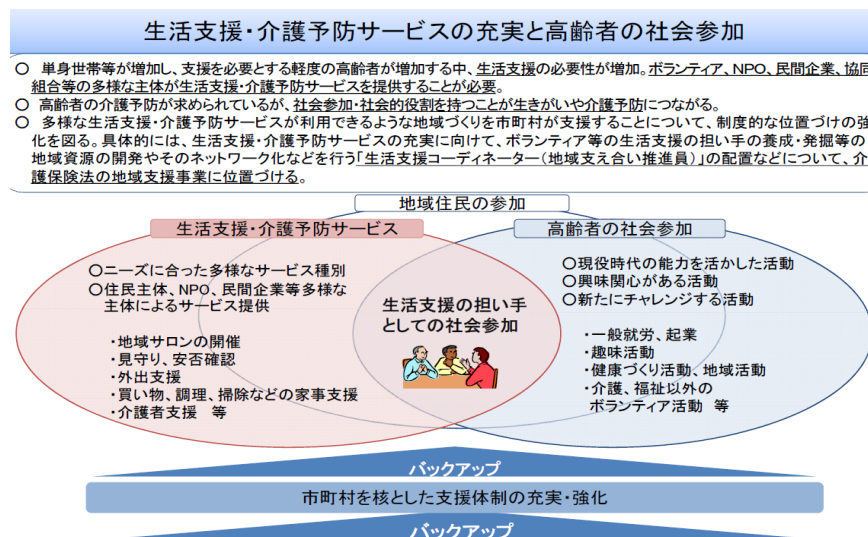


図 8：生活支援・介護予防サービスの充実と高齢者の社会参加

出典：厚生労働省老健局振興課 介護予防・日常生活支援総合事業の基本的な考え方より引用

地域包括ケア研究会は、高齢者が社会参加活動に対して、自ら能動的に地域で活躍する主体として捉える考えを示している。積極的な高齢者の社会参加活動は、地域の担い手となるだけでなく、高齢者自身の生活への意欲を高め、最終的に要介護状態になることを予防する効果を持つと述べている。そして、高齢者が社会貢献しているという実感が、社会的孤立を解消し介護予防になるという認識を広めることが必要であると指摘している³⁰。

高齢者が自ら能動的に地域の担い手として社会参加活動を行うには、地域社会へ溶け込むことが必要である。片桐と菅原は、50歳から69歳の男女における過去の居住経験に着目し、コミュニティ感覚の醸成を図るには、社会参加活動をすることが重要であることを検証した。社会参加率は、子どもの頃の居住があった場合に最も高かった。過去に居住経験の無い地域では社会活動に参加しにくい、社会参加活動を行えば、コミュニティ感覚が高まり地域社会に溶け込む一助となることを明らかにしている³¹。

高齢者の社会参加活動は、地域の中での役割を感じられる活動や、地域での居場所づくりとなるような取り組みが必要だと考えられる。佐藤は、シニアの多様な歩み方を考えるきっかけとして地域デビューを紹介している。まず、自分の生きがいのための「自助」としての

地域デビューから、人間関係を育み支え合う「互助」「共助」の活動を通じて、地域での緩やかなつながりができる。そのつながりが、地域での役割と仲間と居場所を作ると述べている³²。

また、地域包括ケアシステムの構築が求められる背景には、今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者の生活を地域で支える必要があることも挙げられる。2012年で認知症の人の数は約462万人、軽度認知障害の人の数は約400万人と推計され、合わせると65歳以上高齢者の約4人に1人が認知症の人またはその予備軍とも言われている。認知症の人は2018年に500万人を超え、誰の身にも起きうる可能性があり、多くの人にとって身近なものとなっている³³。

認知症施策推進大綱³⁴では、認知症の人も含め、一人一人が尊重され、その本人に合った形での社会参加が可能となる「地域共生社会」に向けた取り組みを進めるとしている。認知症の人の多くが、買い物や移動、趣味活動など地域のさまざまな場面で、外出や交流の機会を減らしている実態がある。このため、認知症になってからもできる限り住み慣れた地域で普通に暮らし続けていくための障壁を減らしていく「認知症バリアフリー」の取り組みへの推進が示されている。

地域共生社会とは、地域包括ケアの理念を普遍化し、制度・分野ごとの「縦割り」や「支えられる側」「支える側」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人一人の暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指すものとしている³⁵。また、2013年の地域包括ケア研究会の報告書³⁶では、地域包括ケアシステムは、高齢者だけでなく地域の全ての住民にとっての仕組みであると言及している。

2.2.3 高齢者の社会参加活動の枠組みと課題

高齢者の社会参加活動は長期間の活動継続を目指して、高齢者の健康度に応じた活動を行うことが重要である。高齢者の社会参加活動として、社会的責任の大きい順に1. 就労 2. ボランティア活動 3. 自己啓発・生涯学習(趣味・稽古ごと)・保健活動 4. 友人・隣人等との近所付き合い 5. 要介護期の通所サービス(デイサービス)利用、という健康度に応じた5つのステージがある。これらのステージは、それぞれ独立しているわけではなく、同時にいくつか重なることもある^{37, 38}。

高齢者の社会参加活動は、長い人生の中で自分や家族の状況が変化し、そのときどきに応じて、対象や頻度、取り組みの内容等が変化していくと示されている。前述の5つのステージは、生活機能の低下にともない1から5へと移行していくことを想定しているが、例えば、3の趣味から発展して2のボランティア活動に移行する場合もある。高齢期においては、社会参加活動の5つのステージをスムーズに移行することもあれば、同時に複数の役割を担う場合もあると考えられる。

高齢者の社会参加活動を継続するためには、元気な高齢者だけでなく、「支えられる側」とされる、支援を必要とする高齢者が社会参加活動を行う環境づくりが必要である。さらに、要支援者が支えられる側と決めつけるスティグマを減らすことが重要である。佐藤は、支援が必要になっても社会に役立つ機会を創出し、可能性を引きだし合い、支え、支えられるお互い様の関係づくりを可能にするよう価値観を転換していく必要があると指摘している³⁹。

高齢者の社会参加活動は、「する」「される」の一方的な関係ではなく「双方向」の視点が大事になる⁴⁰。松繁卓哉は、イギリスの互助の動向として、地域の問題を解消するために、地域内の資源（人的資源を含む）を効果的に活用し、支えられる側と支える側という固定化された関係から脱却した取り組みの効果を紹介している。また、固定化された関係は、支援をしているように見えて実際には地域を弱体化させると指摘している⁴¹。

2.2.4 高齢者の社会参加活動の現状と課題

2019年度における高齢者の経済生活に関する調査結果によると、60歳以上の男女において社会的な活動を行っているとする回答は36.7%で、特に活動はしていないとする回答は63.3%であった。行っている活動内容は「自治会、町内会などの自治組織の活動」が21.8%で最も多く、次いで「趣味やスポーツを通じたボランティア・社会奉仕などの活動」が16.9%で、これ以外の活動は少数である。また、持家の人は、活動を行う割合が賃貸住宅の人より高い傾向にある。

一方、社会的な活動をしていない人の70.7%が活動する意思があり、活動する意思がない者は28.7%であった。社会的な活動をしていない理由として最も多いのは、「体力的に難しい」(30.5%)と「時間的な余裕がない」(28.0%)が多く、他の理由は1割未満で「活動の誘いがない」(7.0%)「活動に関する情報がない」(6.3%)等がある。また、「時間的な余裕がない」は、中都市(33.3%)で高く、小都市(22.2%)で低いということが報告されている⁴²。

また、60歳以上の男女の社会的な活動において、2019年度の特に活動をしていない割合は、2016年度の69.9%から6.6%減少している⁴³。しかし、社会参加率は地域や性別によっても異なり、今後、高齢者が増大する都市部では、低く減少傾向にある⁴⁴。つまり、都市部においては社会参加活動が活発とはいえない現状にある⁴⁵。今後、さらに社会参加率の低い都市部の高齢者人口の増加や、未婚率の上昇が予測されることから、国全体の社会参加率はこれまでのように上昇しないことも考えられる⁴⁶。

都市部の高齢者における社会参加率の減少には、長引く経済的不況のため、お金のかかる趣味などのグループ参加から1人で楽しむ志向性の個人化、60歳代前半の就業率の上昇、一般的に地域との関わりが薄い賃貸に住む人の増加等、複合的な背景があることが示されている⁴⁷。小林江里香の報告に同様の知見があり、高齢者の社会参加活動において、仲間と一緒になくても個人で余暇を楽しむ選択肢が増えた可能性が示唆されている⁴⁸。

2018 年度高齢者の住宅と生活環境に関する調査結果によると、現在住んでいる地域に住み続ける予定の人が、安心して住み続けるために必要なものは、「近所の人との支えあい」(55.9%) が最も多かった⁴⁹。岡本は、都市部の高齢者への調査から、高齢者の社会参加活動・奉仕活動においては、高齢期以前から地域で他者との関係性を持つ活動への参加が重要であると述べている。豊かな社会的ネットワークが高齢期を充実させることの啓発や、地域において受け入れやすさと参加しやすさを考慮した仕組みの必要性を指摘している⁵⁰。

2.3 日本における高齢者のボランティア活動

2.3.1 ボランティア活動の概念

本項では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動として、地域の担い手としての活動に想定されるボランティア活動の概念と、高齢者のボランティア活動の現状と課題に関して述べる。

ボランティア活動の特徴には、1. 自発的 2. 組織 3. 報酬 4. 利益 5. 参加レベル、という 5 点が挙げられる。まず、ボランティア活動は自発的な活動であることが前提である。組織には、個人単位の行動と組織単位の活動がある。報酬は、「無報酬」を基本とする。利益を受ける「受益者」は、扶養している家族・親戚以外の第三者、および社会や地域である。参加レベルは、短期から長期までさまざまである。一般には、単発より規則的・継続的な参加が望まれる^{51, 52}。

柴田謙治は、ボランティアの目的や成果では、「あなたのため (利他主義)」や「私のため (成果、成長)」にとどまらず、「お互いのため (互酬)」という考え方を述べている。ボランティア活動では、「他人のため」と「自分のため」を明確に区別することは困難である。ボランティアでは、「相手のため」か「自分のため」かを問うのではなく、相手との関係を問い、「相手と共に」を考えることが最も大切であることを示している⁵³。

無償のボランティアは、労働力としての社会資源とも考えられるが、不足する労働力を補うということではない。ボランティア活動は、制度化されたサービスにはない、柔軟で双方向性の関係である。ボランティアは指示されて臨むのではなく、自ら主体的に取り組み、自由な活動とさまざまな人の関わりが保証されている。自立・自律して活動する人は、労働者とはみなされない。ここが、ボランティアと就労との境界を表している⁵⁴。

2.3.2 高齢者のボランティア活動の現状と課題

2016年の社会生活基本調査によると、60歳代から70歳代前半までは、高齢者の男女ともに約3割前後がボランティア活動を行っている。しかし、75歳を過ぎると男女ともに減少していく。また、60歳～64歳では女性が男性よりも高くなっている。男性は60歳代後半から70歳代前半にかけて、ボランティア活動への取り組みが増加しており、高齢者の社会貢献への意識がうかがえる（図9）⁵⁵。

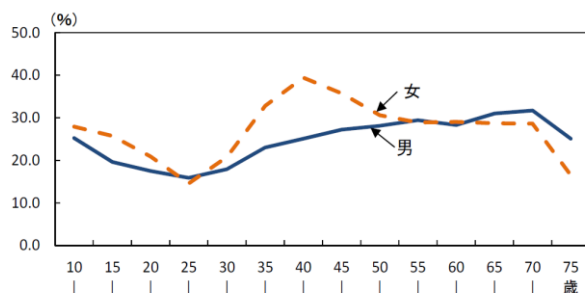


図9：ボランティア活動の男女、年齢階級別行動者率（2016年）

出典：総務省統計局 平成28年社会生活基本調査結果より引用

斎藤によると、男性は、定年退職後の再雇用の期限も終わるため、完全退職期となる60歳代後半から70歳代前半にかけて、ボランティア活動に取り組む割合が高くなる。また、有業男性の場合は、無業男性と比較して70歳を超えても活動が高まる。一方、女性は、活動を主に支えてきた無業女性（専業主婦層）の行動者率が60歳を境に低下する。一方、有業女性は、年齢に関係なく活動が継続すると報告している⁵⁶。

2016年の社会生活基本調査によれば、ボランティア活動の種類を男女別にみると、男性は「まちづくりのための活動」が12.3%と最も高く、次いで「子供を対象とした活動」が6.0%となっている。女性は「子供を対象とした活動」が10.6%と最も高く、次いで「まちづくりのための活動」が10.4%などとなっている（図10）⁵⁷。

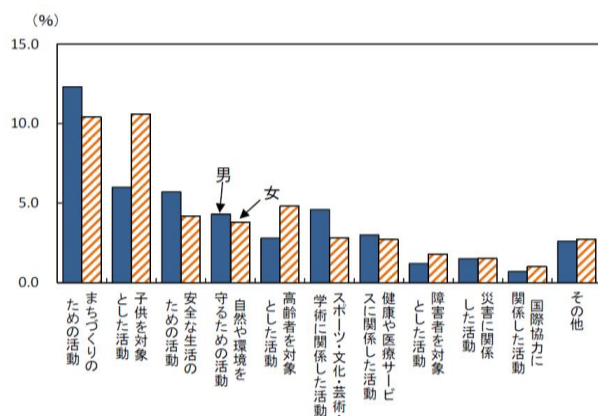


図10：ボランティア活動の種類 男女別行動者率（2016年）

出典：総務省統計局 平成28年社会生活基本調査結果より引用

2014年度の高齢者の日常生活に関する意識調査によると、地域で社会参加活動をする場合に最も重視することは、「活動内容が自分の関心に合っていること」が28.7%、次いで「都合のよい時間が選べること」16.2%、「費用がかからないこと」12.4%となっている。また、「社会奉仕や地域活動をしているとき」に生きがいを感じる人の28.4%は「元気なうちはいつまでも」活動継続の意向がある⁵⁸。この結果から、高齢者の関心と社会参加活動がうまくマッチングすると、活動の継続につながり、高齢者の生きがい創出に貢献することが考えられる。

都市部の60歳～74歳を対象にしたボランティア活動のニーズに関する調査から、性別や学歴にかかわらず、ボランティア活動の活動頻度はあまり多くなく（月に1, 2回）、活動場所は歩いて行ける距離、活動費用の自己負担がない等の条件が好まれることが報告されている。また、高学歴者ほど人に教えるという行為を伴うボランティア活動へのニーズを持つことが示された。また、友人等のネットワークは、活動に関する情報を入手するのに重要であることを示唆している⁵⁹。

齋藤は、高齢者におけるボランティア活動の課題として、自治体がボランティア活動を増やすために講座を開催しても、それが次の実践につながらないケースがあると指摘している。そのため、高齢者の潜在的なボランティアを活動に導くには、新たな学習の場で得た知識を、誰かのために活かす場を明確に示すことを提案している。自分の活動が誰かの役に立つと実感できれば、参加促進につながる可能性がある。さらに、より良い活動成果を得るには、活動の対象や提供する知識等を、深く学ぶ学習機会が必要であると述べている⁶⁰。

梅谷進康らは、就労やボランティア活動をしている高齢者の意識は、していない人に比べて、「人の役に立っている」「大切な役割を担っている」という意識と、ライフコース的要素である自分の「知識・能力が活用できている」という意識を持つ傾向があることを報告している。また、その傾向は、ボランティア活動の方が就労より大きいことを明らかにしている。さらに、高齢者の希望や能力に応じて就労やボランティア活動の機会を設けることは、高齢者の生きがい獲得や保持に寄与すると述べている⁶¹。

高齢者のボランティア活動への参加を促進するためには、高齢者のさまざまな学習の機会を活かし、学んだ経験をボランティア活動につなげる配慮が必要である。さらに、自分の持つ知識や行動が誰かを支え、誰かを支えることが自分を支えるという実感を得ることが肝要であり、自己の生きがいになると考えられる。

高齢者のボランティア活動の意味とは、ボランティア活動を通じて役に立つ自分を実感し、自分の存在感を感じることで「自己実現」することが可能になることである⁶²。つまり、ボランティア活動は、単に地域福祉の担い手にとどまらず、ボランティア自身の生きがいづくりにつながる、自己実現の装置としての働きがあることが指摘されている⁶³。

第2章では、少子高齢化・人口減少社会の課題である、社会を支える担い手の不足に対して、現役世代と高齢者が互いに支え合う関係が求められることから、高齢者の社会参加活動

の必要性を述べた。また、高齢者の社会参加活動を促進する現状として、高齢者の身体機能の若返りと健康寿命の延伸があることを挙げた。さらに、高齢者の一人暮らしが増加傾向にあり、高齢者の社会的孤立が指摘されている。高齢者の社会的孤立を防ぐためには、地域社会において社会参加活動を行うことが効果的であることが示されている。そして、「地域包括ケアシステム」の理念に加え、地域包括ケアシステムの提供には5つの構成要素と自助・互助・共助・公助の役割が必要であることを述べた。さらに、2025年以降も介護需要は増加することから、高齢者のシームレスな社会参加活動を目指す必要性を述べ、今後高齢者が増大する都市部では、高齢者の社会参加率が低く減少傾向にあることが示された。そして、60歳から70歳前半までの男女の約3割がボランティア活動を行っており、高齢者のボランティア活動の意味は、ボランティア自身の生きがいであるとともに、自己実現の装置としての働きがあると指摘されていることを述べた。

¹ 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.2-4.

² 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.7-8.

³ 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.6.

⁴ 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.13-14.

⁵ 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.5.

⁶ 国土交通省. “国土の長期展望専門委員会（第1回）配付資料”. これまでの国土の状況変化について. 2019-10-30. <https://www.mlit.go.jp/common/001314457.pdf>, (参照 2020-08-08).

⁷ 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.4-5.

⁸ 国立社会保障・人口問題研究所. “平成29年度社会保障費用統計”. 社会保障費用統計（旧社会保障給付費）. 2019-8-2. <http://www.ipss.go.jp/ss-cost/j/fsss-h29/H29.pdf>, (参照 2020-08-08).

⁹ 内閣府. “学習・社会参加”. 高齢社会対策大綱（平成30年2月16日閣議決定）. https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/pdf/p_honbun_h29.pdf, (参照 2020-08-08).

¹⁰ 厚生労働省. “生活支援サービスの充実と高齢者の社会参加”. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link5.pdf, (参照 2020-08-08).

¹¹ 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.39.

¹² 厚生労働省. “世帯員の健康状況”. 平成28年国民生活基礎調査の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/16.pdf>, (参照 2020-08-08).

¹³ 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.27.

¹⁴ 鈴木隆雄, 権珍嬉. 日本人高齢者における身体機能の縦断的・横断的变化に関する研究: 高齢者は若返っているか?. 厚生指標. 2006, 53(4), p.1-v.

-
- 15 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.27-28.
- 16 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.9-10.
- 17 内閣府. 平成26年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2014, p.46-47.
- 18 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.11-12,216-217.
- 19 厚生労働省. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/, (参照 2020-08-08).
- 20 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. “地域包括ケア研究会 地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点”. 地域包括ケア研究会三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. 2013-3. https://www.murc.jp/report/rc/public_report/public_report_detail/koukai_130423, (参照 2020-08-08).
- 21 厚生労働省. “地域包括ケアシステムの5つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」”. 地域包括ケアシステム. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf, (参照 2020-08-08).
- 22 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. “地域包括ケア研究会 地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点”. 地域包括ケア研究会三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. 2013-3. https://www.murc.jp/report/rc/public_report/public_report_detail/koukai_130423, (参照 2020-08-08).
- 23 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. “地域包括ケア研究会 地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点”. 地域包括ケア研究会三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. 2013-3. https://www.murc.jp/report/rc/public_report/public_report_detail/koukai_130423, (参照 2020-08-08).
- 24 一般財団法人健康・生きがい開発財団. 高齢者の社会参加を通じた地域包括ケアシステムのあり方検討—通い場の創出と支え手育成の仕組みづくり—調査研究事業報告書. 2016-3. <http://ikigai-zaidan.or.jp/wp-content/uploads/2016/04/houkokusho2016.04.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 25 株式会社 日本総合研究所. “事例を通じて、我がまちの地域包括ケアを考えよう : 「地域包括ケアシステム」事例集成 ～できること探しの素材集～”. 厚生労働省. 2014-3. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/jirei.pdf, (参照 2020-08-08).
- 26 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.31.
- 27 厚生労働省. “介護予防・日常生活支援総合事業の適切かつ有効な実施を図るための指針”. 厚生労働省. 2015-3-31. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000184376.pdf>, (参照 2020-11-30).

-
- 28 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング “地域包括ケア研究会 地域包括ケアシステムと地域マネジメント”. 地域包括ケア研究会三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. 2016-3. https://www.murc.jp/uploads/2016/05/koukai_160509_c1.pdf, (参照 2020-08-08).
- 29 厚生労働省老健局振興課. “介護予防・日常生活支援総合事業の基本的な考え方”. 総合事業(介護予防・日常生活支援総合事業). <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000192996.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 30 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. “地域包括ケア研究会 地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点”. 地域包括ケア研究会三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. 2013-3. https://www.murc.jp/report/rc/public_report/public_report_detail/koukai_130423, (参照 2020-08-08).
- 31 片桐恵子, 菅原育子. 社会参加と地域への溶け込みの関連: 地域での社会的ネットワークの及ぼす影響に着目して. 応用老年学. 2010, 4(1), p.40-50.
- 32 佐藤陽. 支え合いにつなぐシニア世代の地域デビュー. 十文字学園女子大学紀要. 2020, 50, p.47-60.
- 33 認知症施策推進関係閣僚会議. “認知症施策推進大綱”. 厚生労働省. 2019-6-18. <https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 34 認知症施策推進関係閣僚会議. “認知症施策推進大綱”. 厚生労働省. 2019-6-18. <https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 35 厚生労働省. 地域共生社会の実現に向けて. 2017-2-7. <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html>, (参照 2020-08-08).
- 36 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. “地域包括ケア研究会 地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点”. 地域包括ケア研究会三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング. 2013-3. https://www.murc.jp/report/rc/public_report/public_report_detail/koukai_130423, (参照 2020-08-08).
- 37 藤原佳典. 高齢者のシームレスな社会参加と世代間交流: ライフコースに応じた重層的な支援とは. 日本世代間交流学会誌. 2014, 4(1), p.17-23.
- 38 藤原佳典, 倉岡正高編著. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 大修館書店, 2016, p.7-8.
- 39 佐藤陽. 支え合いにつなぐシニア世代の地域デビュー. 十文字学園女子大学紀要. 2020, 50, p.47-60.
- 40 佐藤陽. 支え合いにつなぐシニア世代の地域デビュー. 十文字学園女子大学紀要. 2020, 50, p.47-60.
- 41 松繁卓哉. 地域包括ケアにおける「自助」「互助」の課題: 支援者一被支援者の固定的関係性からの脱却. 理学療法学. 2015, 42(8), p.728-729.

-
- 42 内閣府. 令和元年度 高齢者の経済生活に関する調査結果. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r01/zentai/pdf/s2.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 43 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2020, p.40.
- 44 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.173-183.
- 45 片桐恵子. サードエイジ研究の射程と課題. 老年社会科学. 2018, 40(1), p.67-72.
- 46 片桐恵子. 「サードエイジ」をどう生きるか: シニアと拓く高齢先端社会. 東京大学出版会, 2017, p.27-30.
- 47 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.173-183.
- 48 小林江里香. 日本の高齢者の社会参加は進んだか: 高頻度参加層の拡大と非参加層の縮小の視点から. 老年社会科学. 2015, 36(4), p.423-432.
- 49 内閣府. 平成30年度 高齢者の住宅と生活環境に関する調査結果. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h30/zentai/pdf/s2.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 50 岡本秀明. 都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討: 地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて. 社会福祉学. 2012, 53(3), p.3-17.
- 51 斎藤ゆか. “シニアボランティアの活躍”. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 藤原佳典, 倉高正高編著. 大修館書店, 2016, p.13-16.
- 52 斎藤ゆか. ボランティア活動とプロダクティブ・エイジング. ミネルヴァ書房, 2006, p.18-26, (MINERVA 社会福祉叢書, 15).
- 53 柴田謙治. “ボランティアとは何か”. ボランティア論: 「広がり」から「深まり」へ. 柴田謙治, 原田正樹, 名賀亨編. みらい, 2010, p.1-13.
- 54 佐藤陽. “ボランティアと就労の境界”. 就労支援で高齢者の社会的孤立を防ぐ: 社会参加の促進とQOLの向上. 藤原佳典, 南潮編著. ミネルヴァ書房, 2016, p.131-138.
- 55 総務省統計局. 平成28年社会生活基本調査. <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 56 斎藤ゆか. “シニアボランティアの活躍”. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 藤原佳典, 倉高正高編著. 大修館書店, 2016, p.22.
- 57 総務省統計局. 平成28年社会生活基本調査. <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 58 内閣府. 平成26年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果. 2015-3. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/sougou/zentai/index.html>, (参照 2020-08-08).
- 59 小林江里香, 深谷太郎. 都市部の中高齢者におけるボランティア活動のニーズの分析. 老年社会科学. 2005, 27(3), p.314-326.

-
- ⁶⁰ 斎藤ゆか. “シニアボランティアの活躍”. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 藤原佳典, 倉高正高編著. 大修館書店, 2016, p.28.
- ⁶¹ 梅谷進康, 石田易司, 信達和典, 松尾まどか, 今井大輔, 中野堅太, 恩田泰輔. 高齢者の社会参加と生きがい: 就労・ボランティア活動と生きがい要素に係る意識との関係. 桃山学院大学総合研究所紀要. 2017, 43(2), p.49-61.
- ⁶² 斎藤ゆか. “シニアボランティアの活躍”. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 藤原佳典, 倉高正高編著. 大修館書店, 2016, p.29.
- ⁶³ 新崎国広. “人と人とのかかわり”. ボランティア論: 「広がり」から「深まりへ」. 柴田謙治, 原田正樹, 名賀亨編. みらい, 2010, p.83-84.

3.地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の実際

本章では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の実際を明らかにする。第2章で述べたように、地域包括ケアシステムにおいては、高齢者は自らを支える「自助」の主体である。また、特に血縁・地縁が希薄である都市部で「互助」を推進するためには、多様な社会参加活動を通じて生まれる人や地域との関係から、「互助」を形成していくことが必要である。本章の第1節では、まず、本研究における地域包括ケアシステムの自助・互助の捉え方を述べる。

また、高齢者が生活の意欲を維持し、向上させるためには、地域社会の中に高齢者の居場所と役割をつくっていくことが重要である¹⁾。そこで、第1節では地域包括ケアシステムにおける高齢者の通いの場として全国に展開している「ふれあい・いきいきサロン」を高齢者の居場所の事例として、活動の実際と課題を明らかにする。さらに、高齢者が社会的役割を担う、ボランティア活動の事例として、教育現場で絵本の読み聞かせを行う世代間プログラムの実際と課題を明らかにする。

第2節では、本研究において着目する、高齢者ケアとしての紙芝居を活用した社会参加活動の事例として、高齢者を対象にした紙芝居上演の現状と介護現場での紙芝居を活用した取り組みを紹介する。そして、介護現場での紙芝居上演が定着したことから、高齢者向けの紙芝居が待望され、出版に至った経緯を述べる。さらに、高齢者向け紙芝居の前史を概観し、コミュニケーションメディアとしての紙芝居の特性を挙げる。

3.1 地域包括ケアシステムにおける高齢者ケアとしての社会参加活動

3.1.1 本研究における地域包括ケアシステムの自助・互助の捉え方

地域包括ケアシステムは、地域において自助・互助・共助・公助に関わる全ての人々がケアの提供に貢献するネットワークである。地域包括ケアシステムにおける自助は、高齢者が住み慣れた地域において、人生の最後までその人らしい暮らしを継続するための前提であり、可能な限り自分のことを自分で決め、主体的に生きて活動し、自ら健康づくりに励むセルフケアという要素が含まれている。

地域包括ケアシステムにおける互助は、血縁や友人、地域の人々等との相互間の助け合いであり、その人の状況に合わせた社会参加活動を通じて、自らの人生と生活の質を豊かにするものである。高齢者の社会参加活動は、地域に貢献するだけでなく、社会や地域の人たちとつながる実感を得ることで孤立を解消し、生活への意欲が高まると考えられる。つまり、自分の関心と状況に合う社会参加活動を行うことで、生きがいと自己実現のエネルギーを生み、自分らしい生活の継続に寄与することになる。

本研究では、「高齢者ケア」を「高齢者に対して配慮、関心、気遣いをもって接し、ケアするものとケアされるものとの間に構築される関係である」と定義する。三好春樹は、高齢者の介護を論じ、人間にとって重要な「関係」として、社会的関係・家族的関係の他に「自

分自身との関係」を挙げている。人間の関係は、社会的関係・家族的关系・自分自身との関係という三つの関係を掛け算で見ることがあり、すなわち、どれか一つでもゼロになると全体がゼロになると論じている。さらに、自分自身との関係とは、自己評価、プライド、生の肯定感等に言い換えられると示している²。本研究における高齢者ケアの定義である「高齢者に配慮、関心、気遣いをもって接し、ケアするものとケアされるものの中に構築される関係」に対応させると、自分自身をケアする自助の概念は自分自身との関係を構築することである。

藤原成一は、人間とは自他をケアする存在であり、ケアとは他者をケアする前に自らをケアする、セルフケアがケアの原点である、と述べている。セルフケアとは、自分の抱く自分のイメージで自分らしく自分をつくること、すなわち、自分の世話をすることと示している。また、ケアは自他相互支援的な行為であり、それぞれの持ち味と能力を活かしつつ、相互に気を配り、セルフケアしつつ互いにケアし合う慮りの作法と論じている^{3,4}。

これらを踏まえ、本研究における地域包括ケアシステムにおける自助・互助は、高齢者が主体的にセルフケアを行い、他者をケアすることで相互にケアし合い、自分自身と他者との関係を構築することと捉えられる。

次項では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の通いの場として全国に展開されている「ふれあい・いきいきサロン」の現状と課題について述べる。

3.1.2 通いの場としての「ふれあい・いきいきサロン」の現状と課題

2015年度より介護予防・日常生活支援総合事業として地域の支え合い体制づくりが推進され、住民主体の「通いの場」の創出が求められている。通いの場の定義として、1. 体操や趣味活動等を行い、介護予防に資すると市町村が判断する通いの場であること、2. 通いの場の運営主体は、住民であること、3. 通いの場の運営について、市町村が財政的支援を行っているものに限らないこと、4. 月1回以上の活動実績があること、が示されている⁵。

介護予防事業の一つとして、高齢者が住み慣れた地域でいきいきと過ごすことができるように、高齢者が集い、通う場所として「高齢者サロン」が全国的に取り組みされている。高齢者サロンは、地域住民が主体となって運営・参加を行い、誰でも参加できる地域交流の場である。1994年から全国社会福祉協議会が中心となり、住民主体の地域福祉活動として、「ふれあい・いきいきサロン」の名称で、取り組みが推進されている⁶。

ふれあい・いきいきサロンの特徴としては、利用者もボランティアも一緒に楽しいときを過ごし、気軽に無理なく通うことができ、出入りが自由であること等が挙げられる。活動内容は、体操やレクリエーション、趣味活動等の多様なプログラムを行っている。ふれあい・いきいきサロンの中には、特別なプログラムを持たずに自由に時間を過ごす場もある。また、世代間交流の場づくりを行うところもある。さらに、高齢者のニーズの発見や助け合いを生み出す、つながりづくりの場としても機能している⁷。

2018年の社会福祉協議会活動実態調査等報告書によると、ふれあい・いきいきサロンの実施を主な対象別に見ると、高齢者対象が最も多く78.9%を占めており、次いで複合型が12.3%、子育て家庭が5.4%等となっている。社会福祉協議会が把握するふれあい・いきいきサロンのか所数は、介護保険がスタートした2000年が13,172、以後2003年37,178、2009年52,633、2016年67,903、2019年は86,778と増加し続けている。また、一般介護予防事業の通いの場として位置づけられているふれあい・いきいきサロンがある社会福祉協議会は、24.2%となっている⁸。

通いの場の効果は、認知症予防の観点においても重視されている。認知症施策推進大綱によると、「共生」と「予防」を両輪として施策を推進し、地域住民による体操教室など、介護予防につながる通いの場への高齢者の参加率を8%に高めるとしている。予防とは、認知症にならないという意味ではなく、認知症になるのを遅らせ、進行を緩やかにするという意味である。認知症への備えとしての取り組みを行うとともに、認知症の人が認知症と共に生き、認知症があってもなくても共に生きる社会を目指すとしている⁹。

上條秀元は、地域における高齢者の居場所づくりを、3つの段階に整理している。まず、第1の段階は定年退職を迎える60代前半の人たちが、自分の役割を再認識し、地域との関わりを広げるプラットフォームとしての居場所である。第2の段階は60代後半から80代前半の人たちが、第1段階に加えて健康維持、認知症予防に対応する居場所である。第3段階は、地域活動が困難となった人たちが安心して過ごせる居場所である¹⁰。

ふれあい・いきいきサロンの運営スタッフが企画・運営の際に留意していることは、良好な雰囲気づくりと健康増進、参加者同士の関係が深まること、参加者の健康状態の確認等である。また、元気な参加者に運営の協力をしてもらい、参加者相互の学び合いの場づくりであることを明らかにしている。さらに、今後の改善点として、地域で孤立している高齢者へ参加を呼び掛ける、男性の参加者と運営のボランティアを増やす、活動場所の確保および活動の拡大等が挙げられている¹¹。

豊田保は、ふれあい・いきいきサロンは、人間関係を豊かにしていくための地域づくりであると述べている。また、途切れていた住民のつながりを再構築し、新たな出会いやつながりの場として機能しており、地域社会を再生する役割を持つ意義があると報告している。さらに、1. 楽しさ・生きがい・社会参加、2. 無理なく体を動かせる、3. 適度な精神的刺激、4. 健康や栄養について意識する習慣がつく、5. 生活のメリハリ、5. 閉じこもらせない、ということを実現する意義を持つと示している¹²。

ふれあい・いきいきサロンが、コミュニティ拠点として価値を発揮するためには、地域に住む多くの高齢者が包含され、サロンが存続し続けることが重要である。複数のサロンの10年間の存続と廃止およびその変化を追った調査によると、サロン活動の継続の要件は、活動の成立要素である「利用高齢者」「運営体制」「会場」の3点が確保されることである。高齢者の参加人数は安定しているが、ボランティアは恒常的な確保が課題となっている。また、ふれあい・いきいきサロンのボランティアは高齢者が多い¹³。

ふれあい・いきいきサロンの継続には安定した場所の確保が必要である。活動の持続性の点から地域の集会施設等が利用されるが、老朽化や手狭なことから使いづらさが顕在化しているケースがある。しかし、財政事情から、老朽化した集会施設等の補修や建替えは滞りがちであり、ふれあい・いきいきサロンの継続における課題となっている。一方で、増加している小規模多機能型居宅介護施設や、サービス付き高齢者向け住宅内の集会所における利用例が報告されている¹⁴。

森常人の調査によると、各ふれあい・いきいきサロンには、「学区内の概ね65歳以上の者で、あらかじめ利用申請を行った者」のように、参加者に関する何らかの利用制限があった。運営側への調査から、参加制限を設けずに希望者を自由に受け入れると円滑な運営に支障をきたすとの回答が得られた。想定する主な支障として「ボランティアスタッフの人員確保が困難」、「参加人数次第では、開催場所に収容できない」、「運営費用が補助金、参加費だけでは賄いきれない」等が挙げられた¹⁵。

ふれあい・いきいきサロンの運営に関する課題としては、担い手が固定化しがちで後継者が育ちにくいこと、担い手の運営に対する義務感・負担感の解消を常に意識すること等が挙げられている。担い手の後継者問題は、ふれあい・いきいきサロンに限らず、ボランティア活動一般に起きている問題である。また、運営で最も大切なことは、担い手と参加者が一緒に楽しむ、というスタイルを維持していくことである。担い手が参加者をもてなすという感覚が強まると、マンネリ化を避けようとして担い手の義務感や負担感につながる可能性がある¹⁶。

これらの先行研究から、ふれあい・いきいきサロンが地域における高齢者の交流の場所として機能しており、高齢者の孤立防止や健康維持に貢献していることが示されている。また、高齢者の新たなつながりの場として地域社会の人間形成に寄与し、まちづくりの原動力となる可能性がうかがえる。一方、課題としてはふれあい・いきいきサロンの担い手の後継者不足、担い手の活動における義務感・負担感を生む可能性が挙げられており、担い手と参加者の関係を固定せず、相互にフラットに楽しむことを意識した取り組みが必要であることが指摘されている。

3.1.3 世代間交流プログラムにおける高齢者の社会参加活動の実際と課題

次に、地域の公立小学校、幼稚園、保育園を拠点とした高齢者の社会参加活動の例として、60歳以上の高齢者ボランティアが子どもに絵本の読み聞かせを行う世代間交流プログラムの効果や課題に関して述べる。この世代間交流プログラム(以下プログラムと記述する)は、個人の健康や生活の自立を促進する自助としての働きと、担い手として地域を支え動かす互助としての役割をあわせ持っている。2004年から現在も継続されている、多様な効果を検証している高齢者ケアの要素を内包した持続的なプログラムと考えられる^{17, 18, 19, 20}。

このプログラムのコンセプトは三つあり、一つ目の世代間交流とは、子ども世代への社会貢献である。世代間交流のねらいは、まず、核家族化・活字離れ・虐待・防犯といった近年

の子どもをめぐる社会的ニーズに応えるものである。次に、個人を超えて次世代をケアし責任を果たそうとする意思により、活動の長期のモチベーションを保つことである。さらに、子どもへのボランティアを通じて親世代との信頼関係を回復することである。プログラムが高齢者を社会負担とみなす偏見を払拭する一助になりうるからである²¹。

プログラムの二つ目のコンセプトは、世代内交流であり、高齢者ボランティア同士のグループ活動を意味するものである。世代内交流のねらいは、ボランティア活動で知り合う仲間による、社会的サポートとネットワークの拡大により、高齢者ボランティアの心身の健康に良い影響を与えることである。さらに三つ目のコンセプトを、高齢者の知的能動性を活発にするために、生涯学習としている。すなわち、子どものために絵本を吟味し、準備を行うこと等を高度な知的活動と位置づけている²²。

このプログラムの1年間の短期的効果として、読み聞かせを行う高齢者のボランティア群の健康自己評価において、改善が見られた。また、身体機能においては、ボランティア群の握力において低下の抑制が見られた。社会的ネットワークにおいては、孫や近隣以外の子どもとの交流頻度が増加し、友人・知人の数も増加した。また、世代内のネットワークも拡大され、友人・近隣の人への提供サポートが増加し、友人・近隣の人からの受領サポートが減少したと報告している²³。

前述のプログラムに参加する高齢者ボランティアは、プログラムのための養成講座の受講を条件とし、60歳代から80歳代までのメンバーで構成され、各地でグループ活動を展開している。実際の活動におけるポイントとして、1. 優れた絵本を選び、読んで伝える、2. 良い姿勢を保ち、体づくりに留意する、3. 後ろの子どもにも届くような心地良い声づくり、4. 仲間との意思の疎通・円滑な活動、5. 学校以外の地域にも出向き、読み聞かせを世代間交流の場として根づかせる、が挙げられている²⁴。

プログラムに参加する高齢者ボランティアは、読み聞かせボランティア養成講座を受講し終わってもすぐに活動デビューはしない。まず、先輩ボランティアの実践を見学し、子どもや施設へのマナーを学び、信用を得る準備を行う。そして、グループ間で読み聞かせの練習を行い、子どもたちの反応や絵本の選書に関する反省点を把握し、質の担保が保証されてからようやく活動デビューとなる。また、体調不良で読み聞かせに穴を開けないように、ボランティア間での体制づくりを必須としている²⁵。

プログラムに参加する高齢者ボランティア5人への調査から、読み聞かせを行う日は1日当たりの歩数の平均が10,955歩に達していることが報告されている。読み聞かせが無い日の平均が7,860歩であり、読み聞かせがある日は約3,000歩多いことが分かった。これだけの歩数を稼ぐ理由は、学校へ行き読み聞かせを行う、チームで反省会を行う、図書館へ通って絵本を選ぶ、次の読み聞かせに関する議論をチームで行う等の活動を、日々繰り返し行っているからである²⁶。

世代間交流のねらいの一つである、子どもへのボランティアを通じて親世代との信頼関係を回復することに関しては、2年間の高齢者のボランティア活動により、保護者の絵本の

読み聞かせに対する認知度や評価の一部が高まったことが検証された。保護者の高齢者一般に対するイメージの改善までには至らなかったものの、高齢者ボランティアが行うプログラムへの関心は高く、肯定的・好意的であることを示唆している²⁷。

また、高齢者ボランティアを受け入れている学校の先生へのインタビュー調査において、受け入れる側は、高齢者ボランティアとの継続的な交流が、子どもの老いへの理解につながることを期待していた。すなわち、高齢者との日常的な交流が少ない現状において、元気な高齢者以外の多様な高齢者と交流し、その高齢者が衰えていく自然な過程を子どもたちに知って貰い、さらに障害を持ちつつ努力して活動する様子を子どもが見ることが重要と考えていた²⁸。

一方、加齢にともなう身体・認知機能の衰えや健康問題を持ちつつボランティア活動を継続する高齢者ボランティアへのインタビューでは、自身の老いを子どもたちに見せることにとまどいを覚えるものもいた。あるボランティアは、読み聞かせの活動は夢があるので、高齢者の老いた姿を見せるのは別の機会が良いのではと述べている。また、若い人と一緒に行動できる間は活動するために外出するが、杖をついてまでは外出したくないという者もいた²⁹。

高齢者ボランティアのプログラムへの継続においては、体力や能力の低下が活動の引き際と考える者と、できる範囲で活動を行えば良いと考える者がいた。高齢者ボランティアのプログラムへの継続意向は、ボランティア感、老いへの受容度にかかわらず、ボランティア仲間からの理解と支援を得られれば、継続が可能であった。例えば、活動を簡易にする、できないことを補ってもらう等の調整を、ボランティア仲間が支援する場合は、継続が可能である。一方、ボランティア仲間の理解と支援が得られない場合は、継続が困難になる可能性が示されている³⁰。

また、受け入れる学校側の課題は、高齢者ボランティアの怪我の心配と、子どもの反応が高齢者の自尊心を傷つけること、認知症高齢者の対応への不安であった。例えば、認知症症状がみられる高齢者ボランティアの言動に対する子どものネガティブな発言や態度が、高齢者ボランティアを傷つける可能性を危惧していた。加えて、教職員からは、スケジュール管理や受け入れ側の対応の限界から、認知症の高齢者ボランティアを受け入れることに関して不安が挙げられている³¹。

主に学校現場で2004年から継続して組織的に行われている世代間交流プログラムは、学校支援の一環として位置づけられており、読み聞かせ以外の授業にも積極的に協力と支援を行っている³²。また、高齢者ボランティアには絵本の知識、読み聞かせの技術において一定以上の水準が要求され³³、活動全般に団体の規律や、団体が標準とする絵本の読み方・持ち方の質が求められる³⁴。このように、教育現場での絵本の読み聞かせは、責任と緊張がともなう高度な社会参加活動と考えられる。

一方で、生きがいや楽しみを主目的とする高齢者ボランティアは、読み聞かせの標準にこだわることなく、子どもに本を読み聞かせるといふ本来の趣旨が達成されれば良いのでは

ないかと考えていた³⁵。長期間の活動過程において、高齢者の老化が進むことは自然なことである。しかし、教育現場でのグループ活動というプログラムゆえに、高齢者ボランティアが個々の現状に合わせた柔軟な活動を希望する際に、継続が困難となる場合が見てとれる。

また、高齢者ボランティアの年齢は60歳代～80歳代で構成され、例えばボランティア間に20歳ほどの年齢差がある場合、老化の状態に相違があることが想定される。80歳代のボランティアへのインタビューにおいて、年齢差のあるボランティアに対して疎外感を抱く発言が見られた³⁶。高齢者ボランティアが活動をシームレスに継続するためには、ボランティア間における若いへの受容と想像力を紐帯として、ボランティア同士が互いをケアし合う姿勢が必要だと考えられる。

以上、高齢者の世代間交流プログラムの実際から、プログラムに参加することが、セルフケアを中心とした自助と地域における社会的ネットワークをつくる互助に貢献していることが示されている。また、教育現場で子どもたちのために、質の高い社会貢献を行うというやりがい、高齢者の活動へのモチベーションであることがうかがえる。一方、プログラムが学校の教育課程であり、活動はグループ単位で行うため、心身の衰えからグループの基準を満たせなくなると、活動の継続が困難になる可能性が示唆された。社会参加活動の長期の継続には、高齢者ボランティア同士の年齢や健康度の相違といった、若いへの理解を醸成する関係の構築が必要だと考えられる。

3.2 高齢者ケアとしての紙芝居の活用に関する現状

本節では、2000年前後から、主に介護施設のレクリエーションの一環として始まった高齢者ケアとしての紙芝居上演活動の現状と、高齢者を対象に出版された高齢者向け紙芝居の現状と課題を明らかにする。初めに、高齢者を対象にした紙芝居上演の背景と現状を述べる。次に、高齢者向け紙芝居の出版に際し目標とされた「人生紙芝居」の実際を明らかにする。また、2009年に高齢者を対象に構想された「高齢者向け紙芝居」の出版に至る経緯を述べる。そして、高齢者向け紙芝居の前史として、現在の紙芝居の形式が誕生した1930年以降の紙芝居の歴史を概観し、コミュニケーションメディアとしての紙芝居の特性について言及する。

3.2.1 高齢者ケアとしての紙芝居上演の現状

前節で述べた、ふれあい・いきいきサロンは、地域を拠点に住民である当事者とボランティアが協働で運営する高齢者の居場所となっている。2章で述べた、高齢者の健康度に応じた社会参加活動のステージにおいて、5つ目のステージとして要介護期の通所サービス（デイサービス）を挙げた。通所サービス（デイサービス）が提供される介護施設は、介護度に個人差はあるが、通所サービス（デイサービス）も含め介護が必要と認定された高齢者が集団で過ごす場である。

2000年の介護保険制度施行前後から、高齢者ケアとして紙芝居を活用する流れが起き始めている³⁷。紙芝居は長らく子どもの文化として定着し、主に幼稚園・保育園・公共図書館

等で演じられてきたが、高齢者に対象を広げて上演されている。高齢者に向けた紙芝居上演は、主に介護施設のレクリエーションとして始まった。当初は、子ども向けに出版された作品の中から高齢者にも楽しめる作品を選び上演していた³⁸。2009年に介護現場からの要望に応じて初めて高齢者向けに構想された紙芝居が出版され、「高齢者向け紙芝居」として2020年現在までに31点刊行されている³⁹。

少子高齢化にともない、地域で活躍する紙芝居の上演サークルや個人の上演場所が、紙芝居上演の対象であった子どもから、高齢者へと活動の領域が広がっている。高齢者を対象に上演する場所は、特別養護老人ホームや介護老人保健施設、介護保険制度施行後から地域に根付いたデイサービス、グループホーム、宅老所といった介護施設である⁴⁰。2005年に開催された「第9回全国紙芝居まつり」のテーマは「少子高齢化社会で紙芝居の役割」であり、のべ2,230余人が参加した活発な交流の様子が報告されている⁴¹。

三好春樹によると、介護現場においては、「遊ビリテーション」という「遊び」の自発性と「リハビリテーション」の専門性が結びついた実践がある。医療行為としてのリハビリテーションには医師の処方が必要であるが、遊ビリテーションは特別な資格を持った専門家がいなくてもできるため、高齢者介護に広がり定着している。認知症介護においても、遊びが引き出す自発性が、認知症の高齢者が落ち着くための武器となっていると述べている⁴²。

高齢者介護の現場では、日々の楽しみとして、レクリエーションのニーズが高まっているが、病気や障害のある高齢者はレクリエーションとリハビリテーションの狭間で取り残されがちである。遊ビリテーションはルールや道具等を工夫すれば、病気や障害がある人でも参加でき、現場ですぐに始められることが特徴である。紙芝居は、場の雰囲気や参加者に合わせて、演じ手が自在に演出できる遊ビリテーションとして紹介されている⁴³。

高齢者ケアとしての紙芝居上演の実践として、紙芝居が持つ共感のコミュニケーションメディアとしての特性に着目した活動の報告がみられる。堺は、高齢者に紙芝居上演を行うボランティアの立場から、高齢者に紙芝居を上演する目的は、娯楽に徹し、観客である高齢者と対面し、コミュニケーションを通じて共感することだと述べている。また、介護施設での上演は、観客の関心を舞台に向けるために、高齢者が歩んだ時代背景を踏まえた作品選ぴと、作品から派生する観客との会話のやりとりが重要である。そのために、紙芝居の演じ手が観客のニーズをくみ取り、実演の周到な準備を行うことが重要だと述べている⁴⁴。

遠山は、介護職として介護施設で紙芝居上演を行う実践から、集団のためのメディアである紙芝居は、観客同士の共感を呼び、共感とは「共にある感覚」であると述べている⁴⁵。また、常に不安の中にいる認知症の人にとって、集団の中に自分の居場所があることは大きな安心感をもたらすため、紙芝居の力は認知症ケアの構造と重なりと指摘している⁴⁶。さらに、観客である高齢者同士の共感の中で、介護職としての演じ手は、アドリブや掛け合いを用いた演劇空間を通して介護職としての役割から抜け出し、自らも高齢者と共にある感覚を味わおうと述べている⁴⁷。

このような共感を生むメディアとしての紙芝居の特性について、鈴木常勝は、「紙芝居は

絵と筋書きだけでは半製品であり、演者の語りと観客の反応によって完成品となる。演者のアドリブ、演者と観客の掛け合いが演劇としての紙芝居を生む。」と示している⁴⁸。このような紙芝居の特性を活かして、高齢者と介護職のコミュニケーションが広がり、高齢者の記憶や心の琴線に触れるテーマが作品に求められていた。そこで、介護現場で紙芝居を活用したレクリエーションとして始められたのが、高齢者の人生を10枚ほどの手づくり紙芝居に凝縮した「人生紙芝居」である^{49, 50}。

紙芝居は手づくり分野に関して、活動の著しい伸長が報告されている。石山は、デジタル化に反旗を翻すかのようなウェブは、伝承やハウツウものの制作を離れ、社会や人間のあり方を問う段階にさしかかっていると述べている⁵¹。ときわひろみは、人が手づくり紙芝居をつくる動機として、物ごとをわかりやすく伝える紙芝居の特性を利用し、具体的に伝えたい思いを持ってつくと示している。さらに、つくった紙芝居を演じて観る人と心を通わすことを挙げている⁵²。

3.2.2 高齢者ケアとしての人生紙芝居の実際

本項では、介護現場で高齢者に紙芝居を活用する取り組みとして、2005年頃より西伊豆の宅老所の取り組みから始まった、「人生紙芝居」の実際を述べる。

人生紙芝居とは、介護施設を利用する高齢者一人一人を主人公にした手づくり紙芝居であり、その制作過程が「回想レクリエーション」であると示されている。制作過程は、まず、担当の介護職が主人公となる高齢者や介護家族から聴き取りをして、高齢者の人生をもとにテーマを絞る。そして、介護施設の利用者や他の職員たちと共に紙芝居を制作し、完成した紙芝居は主人公の誕生日会で演じられ、会に参加した皆で祝い鑑賞する。10年ほどの取り組みにおいて、制作した人生紙芝居は80作品にのぼると報告されている⁵³。

人生紙芝居の取り組みにおいては、高齢者の人生を聴き取る過程が重要である。人生紙芝居の制作過程が、主人公の高齢者と周り的高齢者、介護職と家族の心に深く作用し、その人への見方が変化する、周囲との関係が改善される等の効果が示されている。昔の暮らしのような一般的な回想ではなく、高齢者自身の人生を回想することで、認知症を含む要介護高齢者の自己肯定感が高まり、問題行動が改善されたケースも報告されている⁵⁴。

人生紙芝居づくりは、集団の認め合う力を引き出し、介護職と高齢者の世代間ギャップを埋める一助となり、その人らしいケアに気づくことが可能である。なぜなら、聴き取った人生を文章ではなく紙芝居の絵にするためには、高齢者が語った内容を深く理解する必要があり、その過程で高齢者が介護職に寄せる信頼が深まるからである。さらに、他の利用者である高齢者と聴き取った介護職以外の職員も含めて、全員で紙芝居の色塗り等を行うことによって、主人公である高齢者に対する周囲の理解と共感が深まることになる⁵⁵。

集団の中で自分の生き方や存在が認められることは、その人の自己肯定感を高め生きる力となる。奥田が考えるケアとは、高齢者をもっと知り続けようとするかかわりであり、相手の心に作用するものだと述べている。つまり、高齢者をケアするということは、昭和を生

き抜いてきた 80 代 90 代の高齢者の人生を、大きく様変わりした現代社会を生きてきた介護職が、共に過ごししながら、どこまでも理解し続けようとする営みだと指摘している⁵⁶。

人生紙芝居は、上演する場にいる人や地域の子どもや住民が、主人公の人生を共有し共感できるメディアである可能性が示されている。また、人生紙芝居を学校等の地域で活用することで、高齢者の社会参加活動や社会貢献に寄与することが示唆されている。人生紙芝居に描かれる地場産業、郷土の歴史、戦争体験等のテーマは、地域の子どもたちが地域や日本の歴史を学ぶ貴重な資料となるからである⁵⁷。また、人生紙芝居の取り組みは、ナラティブ・アプローチ⁵⁸、人生史を再構成する方法として研究に活用されている^{59, 60, 61}。

人生紙芝居の取り組みの実際から、人生紙芝居は、回想法の手法を用いた紙芝居づくりを通じた、高齢者理解の試みであることが明らかとなった。回想法とは、「高齢者の過去の人生の歴史に焦点をあて、過去、現在、未来へと連なるライフヒストリーを傾聴することを通じ、その心を支えることを目的とする技法」と示されている⁶²。さらに、人生紙芝居を地域の学校で活用することで、地域の歴史や日本の歴史を子どもたちが学ぶ機会となり、世代間交流や地域貢献としての社会参加活動につながることを示唆された。

3.2.3 高齢者向け紙芝居の出版に至る経緯

本項では、2000 年前後から介護施設のレクリエーションとして始まった高齢者に向けた紙芝居上演から、紙芝居のボランティアが介護施設等で活動の領域を広げるようになり、2009 年に紙芝居の新たなジャンルとして誕生した高齢者向け紙芝居の出版の背景と現状を概観する。

高齢者向け紙芝居が、初めて出版されたのは 2009 年である。1980 年頃から手づくり紙芝居の活動が盛んになり、2000 年の介護保険制度施行前後から、介護施設・子育てサークルや文庫等で紙芝居の活用が広がり、紙芝居研究や上演活動が活発となった⁶³。高齢者向け紙芝居が出版されるまでは、介護職やボランティアの人々の間では、子ども向けに出版された教育紙芝居の中から高齢者も楽しめる作品を選択し、演じられていた^{64, 65}。

しかし、子ども向けの紙芝居の中から、高齢者が喜んで観ることができる作品の選択は困難な作業であることから、高齢者向けの作品の必要性が介護現場から求められ、高齢者向け紙芝居の出版に至ることになった⁶⁶。一方、子ども向けの紙芝居の中でも、特に「参加型」と呼ばれる観客も作品に参加して演じ手とやり取りをする紙芝居は、高齢者も楽しめる作品として上演されている。参加型の紙芝居が喜ばれることは、高齢者も上演に自ら参加したいというあらわれと思われる⁶⁷。

堀田によると、高齢者向け紙芝居の出版に展望を与えたのは、前項で述べた宅老所における人生紙芝居の取り組みであった⁶⁸。遠山は、介護現場ならではの紙芝居活用の発想と方法は、高齢者向け紙芝居の方向性を、紙芝居で介護をするという試みに変えたと述べている。また、人生紙芝居の試みによって、紙芝居のつくり手たちによって、身近な人たちの人生紙芝居をつくる動きが始まったことが報告している⁶⁹。

以上、高齢者向け紙芝居の出版の背景と現状を概観した。高齢者向け紙芝居は、介護現場の要望からボトムアップに生まれたジャンルだということがうかがえた。高齢者紙芝居の出版は介護現場の実践から誕生したという過程において、教育を目的とした既存の教育紙芝居のありようとは異なるといえる。また、堀田は、紙芝居の歴史において、子ども向けでない新分野の紙芝居が刊行されて商業的に成り立ったのは、戦時中の国策紙芝居以来のでき事だと報告している⁷⁰。

3.2.4 高齢者向け紙芝居の前史

本項では、高齢者と紙芝居の関係と、高齢者向け紙芝居の特性を明らかにする補完として、高齢者向け紙芝居の前史である、紙芝居の歴史的な背景を概観する。

現在のような、裏面の脚本を読み、絵が描かれた紙を抜いて物語が展開する形式の紙芝居は、日本固有の文化財と言われる手書き1点ものの「平絵紙芝居」から始まり、1930年『魔法の御殿』（脚本後藤時蔵、画永松武雄）が第一作とされている。同年、『黄金バット』がつくられ「街頭紙芝居」として大人気を得て、その面白さを子どもたちに植え付けた^{71, 72}。当時、東京だけで1日に100万人を超える子どもを集めていたと言われている⁷³。一方、街頭紙芝居は低俗・荒唐無稽な内容が多く、子どもたちへの教育上問題があるとの指摘があり、新聞紙上でも取り上げられるようになった^{74, 75, 76}。

街頭紙芝居は手づくりの1点ものであったが、1932年にキリスト教伝道者が紙芝居の人気と機能に着目し、布教に活用するためカラー版の宗教紙芝居を印刷紙芝居として刊行している。また、幼児や児童の教育関係者もメディアとしての紙芝居の影響力に着目し、本格的な「教育紙芝居」が現れ、紙芝居の教育への活用が始まった⁷⁷。第2次世界大戦中は、日本政府によって戦意高揚を目的とした「国策紙芝居」が1000点ほど制作され、対象は大人向けといってもよく、全国で上演が行われた^{78, 79}。

街頭紙芝居は1945年の終戦後から復活・隆盛期を迎えた。加太こうじは、1946年から翌年にかけての紙芝居の人気は想像を絶するものだったと述べている。また、「戦後版の黄金バット」が復活して人気を得ると、多様な黄金バットが随所で横行し、子どもから中学生、大人までもが観ていたと報告している^{80, 81}。しかし、1953年にテレビが出現したことによって街頭紙芝居は衰退し、1960年には東京での制作は皆無となった^{82, 83}。

戦後は国策紙芝居の反省にたった平和を訴える紙芝居の制作や、学校教育において紙芝居が役立つ教材であるという視点に立った教育紙芝居の制作が行われ⁸⁴、小学校に販路を拡大した。1967年になると、文部省は小学校の教材基準であった紙芝居を消耗品に移行した結果、販売数が激変し小学校での活用が減少することになった⁸⁵。また、公共図書館における紙芝居の貸出しは、1959年に初めて東京品川図書館大崎分館において、子ども会等への団体貸出しが始まった。また、翌年には同図書館と小田原市立児童文化館において、個人貸出しが始まった⁸⁶。

1980年頃からは、手づくり紙芝居の活動が盛んになり、「手づくり紙芝居コンクール」や

「全国紙芝居まつり」が開始され、継続されている。また、1991年よりベトナム、1993年からはラオスに、日本の紙芝居作家が出向いて紙芝居の制作と上演の普及を行っている。さらに1998年からはアメリカ、オランダ、中国、イタリアに海外に紙芝居の普及が進められている^{87, 88}。また、紙芝居は学校教育だけでなく、対象を幼児や高齢者に広げ、精神医療方面での活用も始まっている^{89, 90}。

紙芝居の歴史を概観すると、メディアとしての紙芝居は、娯楽、教育、思想や文化の普及に有用であると考えられる。また、コミュニケーションメディアとしての発展は、1930年の街頭紙芝居から始まり、1945年の終戦後に第2の隆盛期を迎えたことが分かった。つまり、2020年現在の高齢者において、団塊の世代以上が子どもの頃に街頭紙芝居に親しんでいる可能性が高く、今日の高齢者と紙芝居における親和性は、街頭紙芝居の隆盛と高齢者の子ども時代が重なるためであることが考えられる。また、近年は、紙芝居は演じる対象を幼児や高齢者に広げ、さらにグローバルなメディアとして海外にも普及し、紙芝居上演が実施されていることが明らかとなった。

3.2.5 コミュニケーションメディアとしての紙芝居の特性

本項では、高齢者向け紙芝居の特性を明らかにする補完として、コミュニケーションメディアとしての紙芝居の特性を述べる。

まず、紙芝居の形式は、演じ手が1枚ずつ画面を抜き、抜いた画面を後ろにさしこみ、画面の裏に文章があるため、演じ手と観客が向かい合って上演される。また、紙芝居の上演には、専用の紙芝居舞台が使われることが多く、この舞台があることで作品世界と現実空間が分けられ、場面への集中を強めることになる。また、演じる際に紙芝居の画面を「抜く」という動作の連続性によって、次の場面への集中がおきる^{91, 92}。

このような紙芝居独自の臨場感の中で、演じ手と観客はコミュニケーションを始め、演じ手と観客・観客相互の作品への「共感」をつくりだしていく。つまり、紙芝居の特性とは、作品世界への強い集中と作品世界を通してのコミュニケーションによって、演じ手と観客・観客相互の間に共感が生まれると報告されている^{93, 94}。紙芝居実演の第一人者であった右手和子は、紙芝居の魅力として、一方通行ではなく観客の反応に速やかに対応でき、語りの速度等を微妙に変化させながら、心をかよわせあい感動を共にすることを可能にすると紹介している⁹⁵。

紙芝居は、絵と演じ手と観客の三者によって成立するコミュニケーションメディアである。鈴木は、メディアとしての双方向性を支える条件として、「1. 演者の読み替え、2. 観客の読み込み（声に出れば、ませ返し、突っ込みとなる）、3. 作品批判の自由な発言」という3点を挙げている。つまり、紙芝居が演じられる空間は、作品の伝達だけでなく、演じ手と観客によって作品を再創造する場だと論じている⁹⁶。

また、紙芝居の形態は簡易で持ち運びが便利であり、いつでもどこでも誰でも上演することができる。さらに、紙芝居は、手づくり紙芝居の活動が社会における庶民の文化活動とし

て存続しているように、人が生まれながらに持つ純粋な創作意欲や、自らのニーズに合わせた作品を創作することが可能である⁹⁷。加古里子は、子ども会での紙芝居活動を紹介し、子どもの演じ手がアドリブで紙芝居の登場人物を仲間の名前に変える等、身近で自分たちのことが紙芝居と一体化すると、面白く楽しくなることに気がつくと言っている。また、紙芝居を演じる、つくり出す際に、紙芝居の形式や約束にこだわらず、柔軟で適応力の広い試みを勧めている⁹⁸。

本章では、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の実態を明らかにした。

第3章の1節では、本研究における地域包括ケアシステムの自助・互助の捉え方について、高齢者が主体的にセルフケアを行い、他者をケアすることで相互にケアし合い、自分自身と他者との関係を構築することであると述べた。

次に、高齢者の通いの場として全国に展開されている「ふれあい・いきいきサロン」の実態と課題を明らかにし、「ふれあい・いきいきサロン」が人間関係を豊かにしていく地域づくりとして機能している現状を述べた。また、地域の担い手として高齢者ボランティアが学校で子どもに読み聞かせを行う世代間交流プログラムの実態と課題を述べた。世代間交流プログラムは、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動として、高齢者ボランティアのセルフケアと地域のネットワークの構築に貢献していた。さらに、健康課題を持つ高齢者ボランティアの活動の継続について、高齢者ボランティア自身のボランティア観・老いへの受容度・ボランティア仲間の支援に影響を受けていることが示された。

2節では、高齢者ケアとして主に介護現場でレクリエーションの一環として紙芝居上演が広がり、利活用されている現状を述べた。そして、高齢者ケアとして始まった、紙芝居を活用した介護施設の取り組みとして人生紙芝居の実態を述べた。人生紙芝居の制作は、制作の過程で高齢者理解が進むことにより、高齢者の自己肯定感が向上し、介護職と高齢者の信頼関係が構築されていた。また、人生紙芝居の取り組みを目標として、2009年に初めて出版された高齢者向け紙芝居は、介護現場のニーズに応じて高齢者ケアのために出版されていた。そして、高齢者紙芝居の前史では、現在の紙芝居に含まれる要素として、街頭紙芝居と教育紙芝居が示された。コミュニケーションメディアとしての紙芝居の特性は、紙芝居の臨場感の中で作品世界へ集中することにより、演じ手と観客・観客相互に共感が生まれることであった。

¹ 地域包括ケア研究会。“地域包括ケア研究会 地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点”。地域包括ケア研究会三菱UFJ リサーチ&コンサルティング。2013-3。https://www.murc.jp/report/rc/public_report/public_report_detail/koukai_130423, (参照2020-08-08)。

-
- ² 三好春樹. 関係障害論: 老人を縛らないために. 雲母書房, 2018, p.146-176, (シリーズ考える杖).
- ³ 藤原成一. 特集, ケア: ケアの原初景、連句型共創時空へ. 生存科学. 2015, 26(1), p.41-53.
- ⁴ 藤原成一. “ケア—他者とともに生きる作法”. 「よりよい生存」ウェルビーイング学入門: 場所・関係・時間がつくる生. 日本評論社, 2020, p.24-47, (生存科学叢書).
- ⁵ 一般介護予防事業等の 推進方策に関する検討会 (第 3 回). “一般介護予防事業等の推進方策について: 資料 2-1”. 厚生労働省. 2019-7-19. <https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000529367.pdf>, (参照 2020-08-08).
- ⁶ 社会福祉法人全国社会福祉協議会地域福祉部. “社会福祉協議会における 助け合い活動の推進”. 生活支援コーディネータースキルアップ等支援事例説明会. 2010-10-26. <https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/houkatsu/documents/zensyakyou.pdf>, (参照 2020-08-08).
- ⁷ 社会福祉法人全国社会福祉協議会地域福祉部. “社会福祉協議会における 助け合い活動の推進”. 生活支援コーディネータースキルアップ等支援事例説明会. 2010-10-26. <https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/houkatsu/documents/zensyakyou.pdf>, (参照 2020-08-08).
- ⁸ 全国社会福祉協議会, 地域福祉推進委員会, 全国ボランティア・市民活動振興センター. “社会福祉協議会活動実態調査等報告書 2018”. 地域福祉・ボランティア情報ネットワーク. 2020-5. <https://www.zcwvc.net/app/download/13668826189/社会福祉協議会活動実態調査等報告書2018.pdf?t=1592877241>, (参照 2020-08-08).
- ⁹ 認知症施策推進関係閣僚会議. “認知症施策推進大綱”. 厚生労働省. 2019-6-18. <https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf>, (参照 2020-08-08).
- ¹⁰ 上條秀元. 高齢者の居場所づくりについての一考察: 「ふれあいサロン」の活動に即して. 生涯学習研究: 宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要. 2007, (12), p.1-20.
- ¹¹ 上條秀元. 高齢者の居場所づくりについての一考察: 「ふれあいサロン」の活動に即して. 生涯学習研究: 宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要. 2007, (12), p.1-20.
- ¹² 豊田保. 参加者の視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義. 新潟医療福祉学会誌. 2008, 8(2), p.16-20.
- ¹³ 中村久美. 地域コミュニティとしての「ふれあい・いきいきサロン」の持続性と包括性に関する研究. 日本家政学会誌. 2019, 70(7), p.403-415.
- ¹⁴ 中村久美. 地域コミュニティとしての「ふれあい・いきいきサロン」の持続性と包括性に関する研究. 日本家政学会誌. 2019, 70(7), p.403-415.
- ¹⁵ 森常人. 「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察. 関西外国語大学研究論集. 2014, (100), p.257-270.

-
- ¹⁶ 高野和良, 坂本俊彦, 大倉福恵. 高齢者の社会参加と住民組織: ふれあい・いきいきサロン活動に注目して. 山口県立大学大学院論集. 2007, (8), p.129-137.
- ¹⁷ 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. 藤原佳典監修. 地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉: 現役シニアボランティアが選んだ子どもたちに何度でも読んであげたい絵本続々101選. ライフ出版社, 2015, p.226-263.
- ¹⁸ Sakurai, Ryota; Yasunaga, Masashi; Murayama, Yoh; Ohba, Hiromi; Nonaka, Kumiko; Suzuki, Hiroyuki; Sakuma, Naoko; Nishi, Mariko; Uchida, Hayato; Shinkai, Shoji; Rebok, George W; Fujiwara, Yoshinori. Long-term effects of an intergenerational program on functional capacity in older adults: Results from a seven-year follow-up of the REPRINTS study. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 2016, 64, p.13-20.
- ¹⁹ Murayama, Yoh; Ohba, Hiromi; Yasunaga, Masashi; Nonaka, Kumiko; Takeuchi, Rumi; Nishi, Mariko; Sakuma, Naoko; Uchida, Hayato; Sinkai, Shoji; Fujiwara, Yoshinori. The effect of intergenerational programs on the mental health of elderly adults. *Aging&Mental Health*. 2015, 19(4), p.306-314.
- ²⁰ Sakurai, Ryota; Ishii, Kenji; Sakuma, Naoko; Yasunaga, Masashi; Suzuki, Hiroyuki; Murayama, Yoh; Nishi, Mariko; Uchida, Hayato; Shinkai, Shoji; Fujiwara, Yoshinori. Preventive effects of an intergenerational program on age-related hippocampal atrophy in older adults: The REPRINTS study. *International Journal of Geriatric Psychiatry*. 2018, 33(2), p.264-272.
- ²¹ 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 李相侖, 井上かず子, 吉田裕人, 佐久間尚子, 呉田陽一, 石井賢二, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム: "REPRINTS"の1年間の歩みと短期的効果. *日本公衛誌*. 2006, 53(9), p.702-714.
- ²² 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 李相侖, 井上かず子, 吉田裕人, 佐久間尚子, 呉田陽一, 石井賢二, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム: "REPRINTS"の1年間の歩みと短期的効果. *日本公衛誌*. 2006, 53(9), p.702-714.
- ²³ 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 李相侖, 井上かず子, 吉田裕人, 佐久間尚子, 呉田陽一, 石井賢二, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム: "REPRINTS"の1年間の歩みと短期的効果. *日本公衛誌*. 2006, 53(9), p.702-714.
- ²⁴ 植田たい子. “「りぷりんと」が行う読み聞かせ—地域デビューするその前に”. 地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉. 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. ライフ出版社, 2015, p.27-36.

-
- 25 植田たい子.“「りぷりんと」が行う読み聞かせー地域デビューするその前に”. 地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉. 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. ライフ出版社, 2015, p.27-36.
- 26 大場宏美, 植田たい子.“「りぷりんと」十年の軌跡と奇跡”. 地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉. 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. ライフ出版社, 2015, p.104-120.
- 27 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 大場宏美, 李相侖, 小宇佐陽子, 矢島さとる, 吉田裕人, 深谷太郎, 佐久間尚子, 内田勇人, 新開省二. 高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果: 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム”REPRINTS”から. 日本公衆衛生雑誌. 2010, 57(6), p.458-466.
- 28 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 29 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 30 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 31 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 32 植田たい子.“「シニアが読み聞かせをする際に知っておくべきことー子どもたちを取り巻く生活環境、社会環境、学校支援の今: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉. 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. ライフ出版社, 2015, p.37-50.
- 33 植田たい子.“「りぷりんと」が行う読み聞かせー地域デビューするその前に”. 地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉. 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. ライフ出版社, 2015, p.27-36.

-
- 34 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 35 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 36 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 37 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.174.
- 38 遠山昭雄. 特集, 紙芝居はウケるぞ!: いまなぜ紙芝居なのか, 演じることはケアだ. 月刊ブリコラージュ増刊. 2005, p.2-5.
- 39 遠山昭雄. 「介護紙芝居」とは何か (四十九). 絵芝居. 2020, (317), p.9-10.
- 40 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.8.
- 41 木口まり子. 特集, 広がる紙芝居の世界: つどえば発見! 和・輪・話-紙芝居, 第九回全国紙芝居まつりあしがら大会二二三〇人余の参加. テーマは「少子高齢化社会」で紙芝居の役割. 子どもの文化. 2005, 37(12), p.24-29.
- 42 三好春樹. “はじめに”. 完全図解 遊びリレーション大全集. 土居新幸編著, 三好春樹監修. 講談社, 2017, p.2.
- 43 土居新幸編著. 三好春樹監修. 完全図解 遊びリレーション大全集. 講談社, 2017, p.16-17, 296-299.
- 44 堺正一. 高齢者と紙芝居: 紙芝居の歴史とともに歩んだ人たち. 人間の福祉. 2014, (28), p.1-20.
- 45 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.23-27.
- 46 遠山昭雄. 2つの「変革」がシンクロする介護紙芝居!. 月刊ブリコラージュ. 2014, 26(2), p.42-45.
- 47 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.23-27.
- 48 鈴木常勝. メディアとしての紙芝居. 久山社, 2005, p.40-41, (日本児童文化史叢書, 38).

-
- 49 奥田真美. “宅老所「みんなの家」(西伊豆町)における創作紙芝居の取り組み”. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 遠山昭雄監修. 雲母書房, 2006, p.141-161.
- 50 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, 111p.
- 51 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.174.
- 52 ときわひろみ. 手づくり紙芝居講座. 日本図書館協会, 2009, p.16-24, (JLA 図書館実践シリーズ, 11).
- 53 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, p2-3.
- 54 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, p2.
- 55 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, p3-37.
- 56 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, p15-37.
- 57 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, p12-13, 87-97.
- 58 ナラティブ・アプローチ: ナラティブ(語り・物語)という形式を手がかりにしてなんらかの現実に接近していく方法を指す。(野口裕二. ナラティブの臨床社会学. 勁草書房, 2005, p.5-8.)
- 59 倉原宗孝. 終末期にむかう高齢者のナラティブケアに向けた紙芝居創作に関する考察: 特別養護老人ホームの入居者を対象にした「人生劇場紙芝居」の取り組みから. 日本建築学会技術報告集. 2018, 24(56), p.379-384.
- 60 糟谷知香江. ナラティブ・アプローチによる経験の振り返り: 「人生紙芝居」を用いた試行的実践. 応用障害心理学研究. 2014, (13), p.37-46.
- 61 宮坂道夫. 対話と承認のケア: ナラティブが生み出す世界. 医学書院, 2020, p.150-157.
- 62 黒川由紀子. 認知症と回想法. 金剛出版, 2008, p.76-77.
- 63 文民教育協会子どもの文化研究所. 新・紙芝居全科: 小さな紙芝居の大きな世界, 文民教育協会子どもの文化研究所編, 2007, p.189.
- 64 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, p.18-47.
- 65 堀田穰. 紙芝居研究をめぐる現況について: 展望と課題. 人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要. 2014, (33), p.136(1)-119(18)
- 66 遠山昭雄. 特集, もっと広がれ! 介護紙芝居: 紙芝居今昔ものがたりもっとひろがれ! 介護の紙芝居. 月刊ブリコラージュ. 2019, 31(5), p.6-7.
- 67 遠山昭雄. 特集, 紙芝居はウケるぞ!: いまなぜ紙芝居なのか, 演じることはケアだ. 月刊ブリコラージュ増刊. 2005, p.2-5.
- 68 堀田穰. 紙芝居研究をめぐる現況について: 展望と課題. 人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要. 2014, (33), p.136(1)-119(18)

-
- 69 遠山昭雄. 特集, もっと広がれ! 介護紙芝居: 紙芝居今昔ものがたりもっとひろがれ! 介護の紙芝居. 月刊ブリコラージュ. 2019, 31(5), p.6-7.
- 70 堀田穰. 紙芝居研究をめぐる現況について: 展望と課題. 人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要. 2014, (33), p.136(1)-119(18)
- 71 上地ちづ子. 紙芝居の歴史. 久山社, 1997, p.28-43. (日本児童文化史叢書, 15).
- 72 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.39-67.
- 73 山本武利. 紙芝居: 街角のメディア. 吉川弘文館, 2000, p.28-29., (歴史文化ライブラリー, 103).
- 74 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.39-67.
- 75 上地ちづ子. 紙芝居の歴史. 久山社, 1997, p.28-43. (日本児童文化史叢書, 15).
- 76 加太こうじ. 紙芝居昭和史. 岩波書店, 2004, p.90-93.
- 77 上地ちづ子. 紙芝居の歴史. 久山社, 1997, p.28-43. (日本児童文化史叢書, 15).
- 78 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.68-113.
- 79 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班 代表安田常雄編著. 国策紙芝居からみる日本の戦争. 勉誠出版, 2018, p.407-425., (非文字資料研究叢書, 1).
- 80 加太こうじ. 紙芝居昭和史. 岩波書店, 2004, p.222-224.
- 81 上地ちづ子. 紙芝居の歴史. 久山社, 1997, p.86-90. (日本児童文化史叢書, 15).
- 82 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.137-171.
- 83 加太こうじ. 紙芝居昭和史. 岩波書店, 2004, p.295-303.
- 84 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.137-142.
- 85 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.172-176.
- 86 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.168-170.
- 87 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.172-174.
- 88 紙芝居文化の会. 紙芝居百科. 童心社, 2017, p.52-60.
- 89 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.172-174.
- 90 片岡輝, “紙芝居の魅力と可能性 おもしろさの復権”. 新・紙芝居全科: 小さな紙芝居の大きな世界. 文民教育協会子どもの文化研究所編. 文民教育協会子どもの文化研究所, 2007, p.190-199.
- 91 まついのりこ. 紙芝居: 共感のよろこび. 童心社, 1998, p.1-31.
- 92 清水美智子. 紙芝居「演じることと語ること」: 紙芝居のもつ特徴と効果を探る. 名古屋柳城短期大学研究紀要. 2007, (29), p.39-48.
- 93 まついのりこ. 紙芝居: 共感のよろこび. 童心社, 1998, p.1-31.

-
- ⁹⁴ まついのりこ, 日下部茂子. “紙芝居研究－紙芝居とは”. 新・紙芝居全科: 小さな紙芝居の大きな世界. 文民教育協会子どもの文化研究所編. 文民教育協会子どもの文化研究所, 2007, p.59-68.
- ⁹⁵ 右手和子. 紙芝居のはじまりはじまり. 童心社, 1986, p.10-17.
- ⁹⁶ 鈴木常勝. メディアとしての紙芝居. 久山社, 2005, p.88-93, (日本児童文化史叢書, 38).
- ⁹⁷ ときわひろみ. 手づくり紙芝居講座. 日本図書館協会, 2009, p.17-24, (JLA 図書館実践シリーズ, 11).
- ⁹⁸ 加古里子. “児童文化のなかの紙芝居”. 紙芝居: 創造と教育性. 堀尾青史, 稲庭桂子, こどもの文化研究所編. 童心社, 1972, p.262-271.

4.高齢者向け紙芝居の出版に関する現状と意義および展望

本章では、本研究で着目する紙芝居を活用した高齢者ケアとしての社会参加活動への理解を深めるために、介護現場の要望から出版に至った、高齢者向け紙芝居の出版に関する現状と意義、課題と展望等を明らかにする。そのため、高齢者向け紙芝居の編集者と監修者にインタビュー調査を行った。また、調査結果を通して、高齢者ケアの観点から考察を行う。第1節では、高齢者向け紙芝居の編集者と監修者へのインタビュー調査の概要を述べる。第2節では分析方法と調査結果、第3節では調査結果の考察を述べる。

4.1 高齢者向け紙芝居の出版に関する調査の概要

本項では、高齢者向け紙芝居の出版に関する調査の概要を述べる。本調査においては、高齢者向け紙芝居の現状、出版の意義と展望等を明らかにすることを目的として、高齢者向け紙芝居の編集者と監修者を対象に半構造化インタビュー調査を行った。

調査対象者は、高齢者向け紙芝居の編集者と監修者各1名の計2名である。インタビュー調査の概要は表4-1の通りであり、表の内容は調査時期、調査対象者、調査目的、調査場所、調査方法である。調査対象者には、高齢者向け紙芝居として出版された全31作品の編集に携わってきた編集者を選定した。また、高齢者向け紙芝居として出版された31作品のうち19作品を監修し、その他の作品に関してはオブザーバーのような立場でかかわっている監修者を選定した。調査方法としては、各人の回答に応じてさらに質問を行うことが可能な半構造化インタビュー調査が適していると考え実施した。

表4-2のインタビュー調査対象者の内訳には、インタビュー調査対象者の属性と年齢、各自の調査場所とインタビュー日時・所要時間を示した。詳細は表4-2の通りである。表4-3は、インタビュー調査の項目、内容について記述した。インタビュー調査の内容は調査対象者の年代と高齢者向け紙芝居の出版にかかわる経緯、高齢者向け紙芝居の出版・編集・監修の現状、高齢者紙芝居のジャンル、特性等、高齢者向け紙芝居の意義として出版の目的、役割等、高齢者向け紙芝居の出版の課題、今後の目標、可能性等である。

なお、本調査は、筑波大学図書館情報メディア系研究倫理審査委員会に倫理審査の申請を行い、承認を得て実施した(通知番号第19-104号)。編集者と監修者におけるインタビューの調査時期は2020年3月から2020年5月で、時間は監修者が145分、編集者が74分を行った。場所は調査対象者の自宅とオンラインで行った。まず、インタビューを行う前に研究の趣旨とインタビューの進め方、中断の自由や個人情報の取扱いについての説明を行い、調査内容に理解を得たうえで調査対象者に同意書への署名をお願いして実施した。また、調査対象者の了承を得て、ICレコーダーでインタビューの録音を行った。

インタビュー調査にあたり、インタビュー対象者にはあらかじめ研究の趣旨とインタビュー調査の目的を伝え、インタビュー実施時にはできるだけ対象者に自由に話をしてもらえるように留意した。インタビュー対象者の話の流れに合わせて質問をしていく形をとり、

最終的にインタビュー調査の内容が網羅されているかを確認し、インタビュー調査を終えた。また、インタビュー後に、実施したインタビュー調査の内容に関する確認や新たな質問が発生した際には、随時、インタビュー対象者の了承を得て、メールや手紙を利用して追加調査を実施した。

表4-1 インタビュー調査の概要

項目	内容
調査時期	2020年3月1日~2020年5月31日
調査対象者	高齢者向け紙芝居の出版・編集に携わる編集者・監修者（各1名）
調査目的	高齢者向け紙芝居の出版・編集に携わる編集者・監修者にインタビュー調査を行い、高齢者向け紙芝居の出版・編集の現状、特性、出版の目的、意義、展望等を明らかにすること
調査場所	調査対象者の自宅およびオンライン
調査方法	半構造化インタビュー調査 半構造化インタビュー調査終了後、随時、メールと手紙による追加調査

表4-2 インタビュー調査対象者の内訳

調査対象者	仕事	性別	年齢	場所	日付	所要時間 (分)
A	監修者	男性	69歳	調査対象者の自宅	2020年 3月10日	138
B	編集者	男性	49歳	オンライン	2020年 5月22日	74

表4-3 編集者・監修者へのインタビュー調査項目と内容

項目	内容
調査対象者について	年齢、高齢者向け紙芝居の出版にかかわる経緯
高齢者向け紙芝居の出版・編集・監修	高齢者向け紙芝居の出版・編集・監修の現状
高齢者向け紙芝居について	高齢者紙芝居のジャンル、ニーズ、テーマ、特性、主な購入者
高齢者向け紙芝居の意義	出版の目的、役割、功績、有用性
高齢者紙芝居出版の展望	出版を考えている作品、課題、目標、地域における高齢者向け紙芝居の可能性

4.2 高齢者向け紙芝居の出版に関する調査結果

本節では、高齢者向け紙芝居の編集者と監修者に行ったインタビューの調査の分析方法と調査結果について述べる。

4.2.1 分析方法

本調査では、インタビュー調査をICレコーダーに録音した音声ファイルから、逐語録を作成した。分析手法は、KJ法^{1,2}を参考に行った。本調査は半構造化インタビューを採用しており、調査対象者には自由に話してもらっているため、設問に対して一問一答形式の回答は得られていない。したがって、インタビュー調査の分析においては、調査対象者別の逐語録を発話のまともりごとにカード化し、分析用カードを作成した。全カードを対応する調査項目に振り分けた後、項目別に該当カードを通覧し、類似するカードでグループを編成し、カテゴリー化を行った。

調査結果は、次項よりインタビュー調査の項目と内容にまとめて述べる。

4.2.2 調査対象者について

監修者Aは、58歳で退職するまで33年間介護職として働いていた。1997年頃から、働いていた介護老人保険施設でレクリエーションを任せられ、自分の担当で紙芝居上演を始めた。既存の子ども向け紙芝居からでは高齢者に適した紙芝居が足りないことから、高齢者向け紙芝居を構想し出版社に企画を持ち掛け、2009年の高齢者向け紙芝居の出版に監修者として携った。同時期に親の介護のため退職し、以来、高齢者向け紙芝居の出版に監修者として携わっている。

編集者Bは、2009年から高齢者向け紙芝居の編集業務に携わっている。紙芝居以外には介護系の書籍編集の経験がある。子ども向け紙芝居の編集経験はない。また、高齢者向け紙芝居の販売も兼ねて、介護職に向けた紙芝居上演のセミナーを行っている。

なお、監修者Aと編集者Bのプロフィールに関しては、両名から本研究において公表の同意を得て記述している。

4.2.3 高齢者向け紙芝居の出版・編集・監修における現状

編集者Bによると、インタビュー調査を行った2020年5月時点で、高齢者向けとして紙芝居を出版している出版社は1社のみであった。作品数は2009年から2020年現在の間に、全部で31点を出版している。また、一般的に紙芝居は、書籍や絵本のように書店の店頭では販売されないとのことであった。監修者Aから、「監修者の仕事は作品と出版社の橋渡しと、どんな作品や話題が高齢者の反応を引き出せるか模索すること」との発話があった。監修者として直接携わった作品は、高齢者向け紙芝居31点中の19点とのことであった。また、高齢者向け紙芝居は、手づくり紙芝居から出版することが多いことが特徴であった。監修者が、手づくり紙芝居のコンクールに出品されていた作品や介護現場で演じられていた作品等から高齢者に喜ばれるテーマを掘り起こし、出版されている。監修の実際として、「手づくり紙芝居をカラーコピーさせてもらって、自分でも演じてみて、出版社に紙芝居を持ち込んで出版という話になることもある」（監修者A）という発話があった。また、高齢者向け紙芝居の出版に必要な視点として、「感覚として、これがお年寄りにうけるとか分かっていることが大事」（編集者B）とのことであった。

作品の構想について、「既存の子どもを対象とした紙芝居の作品からヒントを得て、高齢者向け紙芝居の構想を行うこともある」（監修者A）という発話があった。加えて、「手づくり紙芝居のコンクールで子ども向け紙芝居の作品を観ることで、編集者としての視野が広がった」（編集者B）といったように、高齢者向け紙芝居の監修・編集における子ども向け紙芝居との関係に関する発話もあった。

編集者Bは、「紙芝居は人に楽しんでもらうためにつくるもので、良い作品でも演じられるとは限らない」と、紙芝居は作品の質だけではなく、演じられるかが出版の選択基準になると考えていた。紙芝居編集の難しさについて、「例えば、手づくり紙芝居で20枚ある場合、出版紙芝居では12枚に減らさないとならない。その時、どの言葉を減らすか、作品のどこに焦点をあてるかが編集のツボ」と、手づくり紙芝居と出版紙芝居の違いについて説明した。また、「紙芝居は、抜く、という動作が独自の面白さ。絵と裏書きのセリフがちょっとずれていくことで、絵が動いていく。この画面のずれが大事で、作家に教わったり勉強しながら出版していた」と、紙芝居編集の特徴についても言及した。

4.2.4 高齢者向け紙芝居の現状

(1) 高齢者向け紙芝居のジャンル

高齢者向け紙芝居のジャンルに関しては、大きく分けて「参加型・物語完結型・大衆演劇型・人生紙芝居」という4つが挙げられた。参加型とは観客も作品に参加して、クイズに答える、歌をうたう等あそびの要素の強い作品、物語完結型は、高齢者の感情や懐かしさを呼

ぶ物語を楽しむ作品、大衆演劇型は、若い頃に見た演劇や映画の話、人生紙芝居は1人の高齢者を主人公にした、手づくり紙芝居をもとにした作品、とのことであった。また、「高齢者向け紙芝居はナンセンスから文芸作品までふり幅が広い」（編集者B）といったように、多様な作品が高齢者向けに出版されたことが示された。

(2)高齢者向け紙芝居のニーズ・テーマ

高齢者向け紙芝居のベストセラーは、『お茶にしましょ』（菅野博子脚本・絵）という作品と『金色夜叉』（サワジロウ脚本・絵）であった。『お茶にしましょ』は紙芝居未経験者でも演じやすく、シンプルで分かりやすく昔を思い出せる参加型の作品であることがベストセラーの要因であることが示された。また、『お茶にしましょ』は「介護現場で水分補給でお茶を飲んでもらいたいときや、食事の前に演じられているという報告を聞いた」（編集者B）といったように、介護施設における高齢者向け紙芝居の活用に関する発話があった。また、『みいちゃんの春』（ピーマンみもと脚本・絵）という作品も、懐かしい歌やクイズがあり紙芝居未経験者が演じやすい参加型の紙芝居であり、介護現場からの要望に応え、シリーズ化されて出版されたとのことであった。

『金色夜叉』の人気に関しては、「高齢者は、作品に出てくる決め台詞のような身体に染みついた言葉に反応する」（編集者B）という発話があった。編集者Bは当初、「金色夜叉は演技力があるので初心者にはハードルが高いのでは」と不安を抱いたが、「介護職同士で役割を決めて演じたら、お年寄りに大うけだったという現場の報告を聞いた」（編集者B）といったように『金色夜叉』が好評だったことから、介護現場から「高齢者に馴染みの深い、昔のドラマや映画を紙芝居にして出版してほしいという要望を多くもらった」（編集者B）とのことであった。

また、高齢者向け紙芝居のテーマについては、「極私的なテーマがベスト、普遍的ではないが個人の体験にせまるような」（監修者A）という発話があった。極私的とはどういうことか問うと、「高齢者が関心を持てるような卑近なエピソード、プライベートな領域の素材がいい」（監修者A）という発話があった。監修者Aは、例えば、「桜は高齢者にとって特別な想いがある」と考えていた。桜を題材に据えて戦争をテーマにした手づくり紙芝居から、高齢者向け紙芝居として出版した作品があるということであった。

(3)高齢者向け紙芝居の特性

高齢者向け紙芝居の特性については、編集者Bは、高齢者向け紙芝居の『お茶にしましょ』を演じた介護職の感想として、作品の中に出てくる「ちゃぶ台」の話で場が盛り上がるという事例を紹介し、高齢者向け紙芝居の回想的な要素があることを示した。「紙芝居の内容が、お年寄りが昔を思い出してくれるものもいい」（監修者A）という発話も、高齢者向け紙芝居の要素として回想を示していた。一方、監修者Aと編集者B両者とも、高齢者向け紙芝居に回想は必要な要素だが、回想法や回想療法といった療法的な効果を示すことには抵抗

感を持ち、高齢者向け紙芝居は、高齢者が単純な回想として懐かしみ楽しんでもらえるツールとして捉えていた。

また、「他の紙芝居は作品主義が多いが、高齢者向け紙芝居は現場主義」（編集者B）という発話があった。現場主義の意味を質問すると、「高齢者向け紙芝居は出版社主導ではなくて、介護現場で紙芝居を演じている人たちの要望に押されて出版した」「高齢者向け紙芝居は現場から出てくる面白いものから作品が生まれる」（編集者B）という発話があった。

さらに、高齢者向け紙芝居と赤ちゃん紙芝居は似ているということであった。共通点を質問すると、「赤ちゃんは感じたものに反応する。高齢者も感覚で楽しむところがあり、そこが共通している」（編集者B）と回答した。また、子ども向けの紙芝居には教育的な要素が多いが、高齢者向け紙芝居に教育は馴染まないということであった（監修者A）（編集者B）。

(4)紙芝居の主な購入者

「紙芝居は人に面白いと思ってもらえそうだから買う。絵本や書籍のように自分が楽しむためには買わない」「紙芝居のエンドユーザーは、紙芝居の演じ手」（編集者B）、「紙芝居は演じないと作品の良さが伝わらない」（監修者A）というように、個人で紙芝居を買う人というのはイコール演じる人であるという説明があった。また、「紙芝居の演じ手は高齢者が多い」という発話があった（監修者A）（編集者B）。紙芝居の主な購入者は、介護職、紙芝居・読み聞かせボランティア、介護施設、公共図書館、とのことであった（編集者B）。また、介護職のための紙芝居の活用を教えるセミナーでは、紙芝居が未経験の介護職が購入していくという事例が挙げられた（編集者B）。

4.2.5 高齢者向け紙芝居の意義

(1)高齢者向け紙芝居出版の目的・役割

高齢者向け紙芝居出版の目的については、高齢者が楽しめる紙芝居づくり、介護現場で紙芝居を活用して介護をすること、高齢者に向けた上演を行う際の作品選択の目印にすることという発話があった（監修者A）。また、「紙芝居は良い意味で道具」「紙芝居を通じて高齢者の予期せぬ答えが返ってきたりライブ感があるのが面白い」「演じる側も演じられる側もその場を共有していくのが面白い」（編集者B）、「紙芝居は会話のだしに使われれば良いので、演じた後にどれだけ話が盛り上がるかが大事」（監修者A）というように、高齢者とコミュニケーションを広げ、関係性を構築するために有用なツールとしての役割があるとのことであった。

さらに、編集者Bは、「認知症の人に届く紙芝居は昔の歌や回想の要素がある作品」「紙芝居のあらすじが分かるより、皆とわいわいして場を共有していることが大事」「人が落ち着くというときは、場の力が作用する」（編集者B）というように、認知症の人に高齢者向け紙芝居を演じる可能性に関して言及した。

また、退職後の男性の社会参加活動のきっかけとして高齢者向け紙芝居を活用してもら

いたいという目的が見られた。「自分のために生きてきた人間が、今度は他人に喜んでもらいたいと考えるのが退職後」「男性は地域に入りづらいと思うが、定年後の男性が社会参加として紙芝居上演に入ってくるためにも出版したかった」(編集者B)という発話があった。実際に、定年後に紙芝居上演を始める男性もいるとのことであった。

(2)高年齢者向け紙芝居の出版における効果と課題

高年齢者向け紙芝居の出版の効果として、紙芝居で介護ができる、高年齢者が楽しめる紙芝居として、紙芝居の出版全体において、また介護現場、紙芝居のボランティア等に定着したことを挙げる発話があった(監修者A)(編集者B)。また、公共図書館の中には、利用者の高年齢者向け紙芝居に対するニーズを認識して、「リストの作成や高年齢者を対象に紙芝居を演じるボランティアの養成講座を開く図書館も現れた」(監修者A)という発話もあった。社会福祉協議会でもボランティア講座が開かれる等、高年齢者に向けた紙芝居上演の活性化につながったとのことであった。

一方、高年齢者向け紙芝居として出版された『おっばい山』(中村ルミ子脚本・絵)という作品は、公共図書館の選書から外されることが最も多かった高年齢者向け紙芝居であり、「おっばい山と安珍清姫物語は図書館からの返品率が高かった」「安珍清姫物語が閉架になっている図書館があると聞いた」(監修者A)といった発話があった。いずれの作品も、高年齢者が楽しめるように構想されて出版された紙芝居であるが、子ども向けには相応しくないと考えられる場面が含まれていたため、「今までになかった紙芝居に図書館が戸惑っているのではないか」(監修者A)と推察していた。

(3)高年齢者向け紙芝居の発展的な活用

高年齢者向け紙芝居の発展的な活用として、「介護現場の新人教育に活用されている」(編集者B)という事例が挙げられた。その理由として、「新人介護職は介護する、されるという関係で真面目に介護をするので、お年寄りが心を開いてくれず、うまく関係が築けない」(編集者B)という発話があった。そこで若い介護職が高年齢者に紙芝居を演じてみたところ、介護職と高年齢者の間の壁が無くなり関係が良くなったということであった。「介護職は普段は介護職としての一面しか見せないが、紙芝居を演じると失敗したりして、いろいろな部分を見せることで高年齢者が安心する」「演じ手が人格をさらけ出すと、介護職も高年齢者も気が楽になる」「演じることは自分を解放して、自分を見せること」(編集者B)といった演じることと介護の関連性についての発話があった。

4.2.6 高年齢者向け紙芝居の展望

地域における高年齢者向け紙芝居の展望として、「地域と人と介護をつなげる、町に介護を開いていく一つのツールとして高年齢者向け紙芝居が活用されてほしい」(編集者B)という発話があった。「ボランティアが介護施設で演じるだけでは少し閉ざされた感じがするので、

地域のさまざまな場所で高齢者や子どもに演じられる場が増えて、演技手も増えると良い」(編集者B)という発話も見られた。高齢者向け紙芝居は大人紙芝居として、世代を超えて楽しめるバリアフリーな紙芝居にしていきたいと考えられていた。

今後の高齢者向け紙芝居の出版としては、戦争に関連した作品を増やす、認知症の人に届く紙芝居をつくることなどが挙げられた。「高齢者向け紙芝居の最終目標は、認知症の人に観てもらえる作品」(監修者A)という発話があった。また、「観客の高齢者が作品に参加できる、参加型の高齢者向け紙芝居がもっと必要だ」(監修者A)という発話もあった。さらに、高齢者向け紙芝居の今後の課題として、高齢者の世代が替わると回想する内容や流行っていたものも変化するので、「次の世代の高齢者に合った紙芝居づくりが必要になってくる」(監修者A)とのことであった。

4.3 高齢者向け紙芝居に関する調査結果の考察

本調査では、介護現場の要望に応じて出版された高齢者向け紙芝居における現状、意義、展望等を明らかにするため、高齢者向け紙芝居の監修者・編集者へのインタビュー調査を行った。インタビュー調査の結果から得られた高齢者向け紙芝居に関してのまとめと、考察を行う。

4.3.1 高齢者を介護する紙芝居

高齢者向け紙芝居の監修者と編集者を対象とするインタビュー調査の結果から、高齢者向け紙芝居は、介護現場で高齢者ケアとして有用なコミュニケーションメディアとして活用され、紙芝居で介護ができるという介護現場の実感をベースに、介護現場からの要望に応えたボトムアップ式で出版されたことが明らかとなった。高齢者向け紙芝居は介護現場で介護職と高齢者のコミュニケーションツールとして活用され、介護現場のレクリエーションとして定着しているとのことであった。また、紙芝居を高齢者ケアとして活用する動きが広がる中で、子どもを対象に紙芝居を演じていたボランティアが、少子高齢化の現状にともない、介護施設や高齢者への上演に参入していったことがうかがえる。また、高齢者向け紙芝居は演技経験のない人でも演じやすい作品があることから、介護職をはじめ、未経験者が紙芝居上演に参入することに貢献していた。

高齢者が楽しめるテーマを内包した、高齢者向け紙芝居は、大きく分けて4つのジャンル、すなわち、観客も作品に参加する遊びの要素がある参加型、高齢者の懐かしさを呼ぶ物語完結型、若い頃に観た演劇や映画等の大衆演劇型、1人の高齢者を主人公にした人生紙芝居があるとのことであった。いずれも、作品性の追求よりも高齢者がいかに楽しめるか、高齢者の懐かしさを喚起するかという視点から構想され、高齢者が生きてきた暮らしや価値観を作品化したといえる。また、参加型と呼ばれる高齢者向け紙芝居は、紙芝居が未経験の初心者でも演じやすく、演技手も観客の高齢者も楽しめることが示された。

一方、演技力を必要とするような紙芝居でも、演じる場の臨場感の中で、高齢者をいかに

喜ばせるかという観点から自由に演じることで、双方向のコミュニケーションが構築され、演じ手も観客も楽しめることが明らかとなった。このことから、高齢者向け紙芝居は、介護現場において、レクリエーションから始まった高齢者ケアの方法論として捉えられていることが示唆された。

高齢者が喜び、懐かしさを感じ、生きる力となるような高齢者向け紙芝居のテーマを探することは、高齢者の生きてきた時代の文化や価値観を通じて高齢者を理解する試みであり、この過程が高齢者ケアと考えられる。また、高齢者向け紙芝居は手づくり紙芝居から出版された作品が多いことが示された。高齢者向け紙芝居の目標とされた人生紙芝居は、1人の高齢者の人生をいきいきと切り取った紙芝居である。同様に、手づくり紙芝居の臨場感が、高齢者がかつて暮らしていた日々を想起させるテーマと重なったときに、高齢者向け紙芝居の出版につながる可能性がある。

4.3.2 高齢者との関係を構築する紙芝居

高齢者向け紙芝居の特性は、紙芝居の持つ双方向のコミュニケーションツールとしての特性に、高齢者の生きてきた時代や生活、価値観を肯定するような、高齢者が喜ぶテーマを内包した点である。そのため、高齢者に向けた上演においては、演じている途中や上演後に、作品の内容やテーマを通じて話が弾むことに重きがおかれていた。介護職と高齢者、もしくはボランティアと高齢者が、紙芝居を通じて高齢者が分かる世界を共有し楽しむことで、相互に良い関係を構築すると考えられる。

また、紙芝居は演じることで初めて作品の良さが分かるメディアであり、絵本や書籍のように自分だけで読んで楽しむメディアではないという特徴が示された。したがって、個人が紙芝居を購入する場合は、演じて人を楽しませたいという目的で購入すると考えるのが妥当である。まついによると、絵本は個の感性を育み、紙芝居は共感の感性を育むと論じている。絵本の読み聞かせは集団に対して行うが、絵本は読者が絵本の世界に入っていく、自分という個の存在を感じるものだと述べている。一方、紙芝居は演じられる場における集団のコミュニケーションによって、作品に共感していくことになる³。つまり、紙芝居の場合は、演じ手が作品と観客をつなぎ、作品を楽しむ共感の場をつくる媒介者であるといえる。

さらに、高齢者向け紙芝居は、回想する紙芝居というメディアであることが示された。高齢者向け紙芝居の特性として、作品に内包されたテーマに高齢者の回想を喚起する要素があることが明らかとなった。回想する紙芝居とは、高齢者がかつての生活や親しんでいたものを想起させるような身近な物や話題、その時代を生きた人に分かる価値観、身体の中に染みついた言葉を誘い出すような懐かしいテーマがあることが示されている。また、演じ手も高齢者で観客と世代が同じ場合は、回想する思い出を一緒に臨場感を持って共有できるメリットがあると考えられる。一方、高齢者向け紙芝居は、回想療法とは一線を画した回想を呼び起こすコミュニケーションツールであることが示された。療法となると、治す人、治される人のような上下の関係を構築する可能性が考えられる。高齢者向け紙芝居は、治す・効

くという効果を期待するものではなく、集団の場で回想することを通じて人と人との双方向の関係をつくっていくツールであることが示唆された。

4.3.3 高齢者向け紙芝居の出版による波及効果

高齢者向け紙芝居の発展的な活用法として、介護現場の新人教育で若い介護職が高齢者に紙芝居を演じることの効果が示された。介護職が「演じる」という行為を通して素の自分を見せていくことで、若い介護職と高齢者との壁が無くなっていき関係が良好となることが明らかとなった。介護職は演じるという行為を通じて自分を解放することで、介護する側とされる側という関係からも解放される可能性がある。

さらに、高齢者向け紙芝居の出版によってもたらされた効果として、公共図書館での高齢者向け紙芝居コーナーの設置、ボランティア活動を想定した高齢者に向けた上演リストの作成等の事例が報告されている。また、公共図書館や社会福祉協議会の主催で高齢者に向けた紙芝居上演のボランティア講座が開催されるという社会参加活動の推進が行われるようになった。公共図書館は、書店に流通していない紙芝居を実際に手に取って見られる場所として、最も身近であると考えられる。高齢者向け紙芝居が出版されたことで、公共図書館が資料として収集し、貸出しを行えるようになり、高齢者に向けた上演と、高齢者のための作品選びが容易になったと考えられる。このことから、公共図書館の役割の重要性が明らかとなった。

一方、公共図書館における紙芝居の選書において、特定の高齢者向け紙芝居を購入しない、または、閉架にしている事例が紹介された。理由として、公共図書館が高齢者向け紙芝居の利活用の実態と有用性を理解していない、紙芝居は子どもの文化と認識している可能性が示唆された。その場合、高齢者向け紙芝居の配架場所が子ども向けの紙芝居と同じ場所であることが考えられ、子どもに相応しくない紙芝居として選書から外す、子どもが手に取らないように閉架にする、といった対応になった可能性がある。高齢者を対象とする紙芝居上演を行うボランティアにとって、公共図書館で実際に高齢者向け紙芝居を手に取って見ることや借りることができないことは、上演活動の促進に支障をきたす懸念がある。また、紙芝居は子どもの文化であるという認識は、高齢者をはじめとした大人の観客が紙芝居を鑑賞する際に、鑑賞を楽しむ弊害になると考えられる。地域に開放された公共図書館が、住民の社会参加活動を促進する場として、高齢者向け紙芝居の資料としての意義を理解し、普及と活用法の周知に貢献することが必要である。

4.3.4 地域包括ケアシステムにおける高齢者向け紙芝居の可能性

高齢者向け紙芝居の出版は、高齢者の社会参加活動の観点から、定年後の男性が社会参加活動を行うきっかけとなる可能性が示唆された。地域包括ケアシステムにおいては、地域の担い手として、高齢者の多様な社会参加活動が期待されている。紙芝居を活用した社会参加活動の場合、つくる、演じる、鑑賞するという3つの社会参加活動が想定される。今後は、

紙芝居に関する活動に、高齢者の社会参加活動という視点を加えて、紙芝居・介護・高齢者の親和性ととも、地域包括ケアシステムにおける、高齢者の社会参加活動の選択肢として周知していく必要がある。

また、紙芝居上演は、認知症の人も楽しみ、上演の場を共有することで安心感をもたらすメディアである可能性が示唆された。高齢化が進む日本にとって、認知症の増加は地域における重要な課題である。認知症の人にとって、紙芝居は内容を理解することより、その場を共有して自分の居場所があることの安心感が重要であるとの見解が示された。メディアとしての紙芝居の可能性をあらわす事例として、堺は、視覚障害者を対象として紙芝居上演を行った経験から、臨場感を高める等の配慮を行うことで、視覚障害者も紙芝居鑑賞を楽しめると述べている。視覚障害者に配慮された紙芝居上演は、高齢者や子どもにも分かりやすく、紙芝居上演はユニバーサルデザインの理念と合致すると報告している⁴。このような紙芝居の特性から考えて、介護現場と高齢者向け紙芝居における現場主義の観点から認知症の人が楽しめる紙芝居が構想され、出版されることには大きな意義があると考えられる。

さらに、高齢者向け紙芝居は、紙芝居上演を通じて地域に介護を広げていくツールとして活用が広がる展望が示された。地域と人と介護がつながることは、地域包括ケアシステムの理念にも重なり、人口減少・高齢化社会において重要な視点である。また、紙芝居の世界と介護の世界が会うことで、子どもの文化として定着していた紙芝居の文化に、新たな文化が加わったことが示された。今後、子どもの文化と高齢者の文化が融合し、普遍的なコミュニケーションメディアとして機能する可能性が示唆された。高齢者ボランティアによる、紙芝居を活用した活動が、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の一つとして認識され、地域におけるコミュニケーションの場が増えることが望まれる。

第4章では、高齢者向け紙芝居の出版に関する現状と意義および展望等を明らかにすることを目的としたインタビュー調査の結果と考察を述べた。インタビュー調査からは、高齢者向け紙芝居が、紙芝居で介護できるという介護現場の実感に基づき、高齢者ケアのコミュニケーションメディアとして、介護職やボランティアによって活用されていることが明らかとなった。また、高齢者ケアとは高齢者を理解する試みであり、このような観点から、高齢者向け紙芝居が「紙芝居で介護ができる」と言われる要因になっていることが示された。

さらに、高齢者向け紙芝居は回想するメディアであり、高齢者が楽しみ、懐かしさを喚起するテーマが内包され、紙芝居をきっかけにコミュニケーションを広げ、人と人との関係を構築するメディアであることが明らかとなった。また、紙芝居を個人で購入する目的は、自分が楽しむためではなく、観客を楽しませるために求めるメディアであるという特徴が挙げられた。加えて、紙芝居の演じ手が作品と観客をつなげる媒介者であることが示された。

高齢者向け紙芝居の出版による波及効果としては、公共図書館の変化が挙げられ、地域における公共図書館の役割が明らかとなった。また、紙芝居の特性が活かされ、介護現場において紙芝居を演じることが介護職の新人教育に有用であることが明らかとなった。さらに、

高齢者向け紙芝居の出版の目的として、定年後の男性が社会参加活動を行うきっかけとして活用されることが想定されていた。地域包括ケアシステムにおける高齢者向け紙芝居の活用の展望としては、地域に介護を開いていくツールとして活用される希望が示された。高齢者向け紙芝居は、地域・人・介護をつなげる有用なツールとなることが求められていた。

次章では、実際に高齢者に向けた紙芝居上演を行う、高齢者ボランティアのインタビュー調査を行い、調査の結果と考察を述べる。

¹ 川喜田二郎. 発想法：創造性開発のために. 改版, 中央公論新社, 2017, 230p.

² 上野千鶴子. 情報生産者になる. 筑摩書房, 2018, 381p.

³ まついのりこ. 紙芝居: 共感のよろこび. 童心社, 1998, p.1-31.

⁴ 堺正一. 高齢者と紙芝居: 紙芝居の歴史とともに歩んだ人たち. 人間の福祉. 2014, (28), p.1-20.

5.紙芝居を活用した社会参加活動を行う高齢者ボランティアの現状と課題

本章では、高齢者ボランティアによる紙芝居を活用した社会参加活動に着目し、2000年の介護保険制度施行前後から始まった高齢者に向けた上演活動に焦点をあて、活動の現状と課題、高齢者ボランティアの意識や行動を明らかにする。そのため、高齢者を対象にした紙芝居上演を行う高齢者ボランティア6名に半構造化インタビュー調査を行い、その調査結果と考察を述べる。第1節では、高齢者ボランティアへのインタビュー調査の概要を述べる。第2節では、インタビュー調査の結果を述べる。第3節では、調査結果の考察を述べる。

5.1 高齢者ボランティアへのインタビュー調査の概要

5.1.1 調査目的と調査方法

本研究の目的は、紙芝居を活用して高齢者ケアを行う社会参加活動に着目し、紙芝居の演じ手である高齢者に焦点を当て、社会参加活動の現状と課題を明らかにし、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討することである。そのため、本調査では、2000年の介護保険制度施行前後から始まった、高齢者ボランティアによる紙芝居を活用した社会参加活動に着目し、特に高齢者に向けた上演活動に焦点をあて、活動の現状と課題、高齢者ボランティアの意識や行動を明らかにする。

調査の概要は表5-1の通りである。調査対象者は60歳代から70歳代で、高齢者に紙芝居上演を行うボランティア経験のある6名である。調査方法は、半構造化インタビュー調査である。なお、本調査は、筑波大学図書館情報メディア系研究倫理審査委員会に倫理審査の申請を行い、承認を得て実施した（通知番号第19-104号）。

インタビュー調査の実施時期は2020年2月から2020年6月で、時間はそれぞれ2時間から3時間前後であった。場所は調査対象者が指定した場所で行い、インタビューを行う前に研究の趣旨とインタビューの進め方、中断の自由や個人情報の取扱いについての説明を行い、調査内容に理解を得たうえで調査対象者に同意書への署名をお願いして実施した。なお、調査対象者の了承を得た上で、全員にICレコーダーでインタビューの録音を行った。

また、インタビュー対象者にはあらかじめ研究の趣旨とインタビュー調査の目的を伝え、インタビュー実施時にはできるだけ対象者に自由に話をしてもらえるように留意した。インタビュー対象者の話の流れに合わせて質問をしていき、最終的にインタビュー調査の内容が網羅されているかを確認し、インタビュー調査を終えた。さらに、一部の調査対象者の経験に関する語りで、他の調査対象者にも同じような経験があったかを確認する必要がある場合、メールで追加の質問を実施した。

表 5 - 1 インタビュー調査の概要

項目	内容
調査時期	2020年2月1日~2020年6月30日
調査対象者	高齢者を対象にした紙芝居上演を含む紙芝居を活用した社会参加活動を行う60歳以上のボランティア(6名)
調査目的	地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討するため、紙芝居を活用して高齢者ケアを行う高齢者ボランティアにインタビュー調査を行う。インタビュー調査から、紙芝居上演活動の現状と課題、目的と意義、高齢者ボランティアの意識と行動等を明らかにし、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の役割と意義、可能性を考察する。
調査場所	調査対象者の自宅、仕事場、オープンカフェ
調査方法	半構造化インタビュー調査 また、半構造化インタビュー調査終了後、随時、メールによる追加調査

5.1.2 調査項目

次に、高齢者ボランティアへのインタビュー調査の質問項目と内容に関して述べる。調査項目は、表 5-2 の通りである。本調査では、調査対象者である高齢者ボランティアの紙芝居を活用した社会参加活動のうち、高齢者を対象にした紙芝居上演に焦点をあて、活動の現状と課題、目的と意義、展望、活動に対する意識や行動、観客や上演先、地域社会との関係等を明らかにする。また、高齢者を対象にした紙芝居上演の意義等をより明らかにするための補完として、高齢者ボランティアの紙芝居全般の活動における概況も明らかにする。そのため、基本情報を含む下記の項目を設定した。

表 5-2 インタビュー調査項目

項目	内容
基本情報	年齢、居住地域、居住年数、活動前の職業
高齢者を対象にした紙芝居上演の活動状況	紙芝居上演の上演場所・上演回数・上演頻度・上演の対象者、上演対象の人数、上演するボランティアの人数
高齢者を対象とした紙芝居上演の現状と課題	上演活動の目的・意義・やりがい、観客と上演先との関係、上演準備の現状、上演活動の課題、今後の展望

高齢者以外を対象にした紙芝居上演について	上演活動の現状（上演場所、上演の対象者、上演の目的・意義・やりがい）
上演する作品について	紙芝居の入手方法、作品選定の現状と課題
高齢者向け紙芝居について	特性、意義、有用性
紙芝居全般について	特性、意義、有用性
手づくり紙芝居と出版紙芝居について	制作の現状、制作の目的、作品の役割
高齢者と紙芝居について	高齢者と紙芝居の親和性に関して、自身の幼少期から学童期の紙芝居体験
高齢者ボランティアと地域との関係	地域とボランティア活動の関係、地域と高齢者ボランティアの関係

5.1.3 調査対象者の選定方法

調査対象者である高齢者ボランティアの内訳は、表 5-3 の通りである。調査対象は、筆者の勤務先である公共図書館と協働する紙芝居サークルのメンバーと、近隣の自治体を中心に活動する高齢者ボランティアの中から以下の基準で候補者を立てた。各候補者に連絡を取り、研究の趣旨と調査の説明等をあらかじめ行い、インタビュー調査の許諾を得られた高齢者ボランティアを調査対象者に選定した。調査対象者である高齢者ボランティアの選定基準は以下の通りである。

まず、高齢者を対象にした紙芝居上演の経験が豊富で、調査時に継続して上演活動を行っていることと、高齢者への上演経験が 10 年から 15 年間であることを条件とした。この期間を設定した理由は、介護保険制度が始まった 2000 年前後から紙芝居を高齢者ケアに活用し始めていたことから¹、当初は、2000 年から 2020 年現在までの約 20 年間、高齢者への上演経験がある高齢者ボランティアを調査対象者として想定した。しかし、高齢者ボランティア全てにその条件を課して探すことが困難であったため、高齢者への上演経験が 10 年から 15 年間を目安に選定することとした。

高齢者ボランティアの居住地域は、関東近郊とした。男女の比率に関しては、バランスを考慮して人数の半々となるように選定した。年齢に関しては、厚生労働省によると、2016 年時点での健康寿命が男性 72.14 歳女性 74.79 歳²であることから、安定した上演活動を行うことが可能と考えられる 60 代と 70 代とした。なお、本調査には 65 歳未満のボランティアが 2 名含まれている。両名とも、高齢者への紙芝居上演も含めた紙芝居の経験が豊富であることや、高齢者の社会参加活動の統計調査³によっては 60 歳以上を高齢者とみなして

いることから、本調査の趣旨において65歳未満のボランティアを含めても問題はないと判断した。

また、高齢者を対象にした紙芝居上演は主に介護現場から始まったことから、調査対象者に前職が介護職である人（高齢者ボランティアB）を含めた。さらに、限られた調査対象者にできるだけ多様性を持たせるため、上演に関する活動のみ行っている者（高齢者ボランティアA）、上演活動と紙芝居の舞台づくりの経験がある者（高齢者ボランティアB）、上演活動と手づくり紙芝居の経験がある者（高齢者ボランティアE）、上演活動と手づくり紙芝居・出版紙芝居の経験がある者（高齢者ボランティアC,D,F）、という4つの対象がボランティアに含まれるように選定した。

表 5-3 インタビュー調査対象者の内訳

調査対象者	日付	所要時間(分)	性別	年齢	地域の居住年数	紙芝居の上演経験	高齢者への上演経験
A	2020年 2月12日	121	女性	77歳	49年	16年	16年
B	2020年 3月10日	145	男性	69歳	36年	21年	21年
C	2020年 4月6日	115	女性	64歳	39年	25年	15年
D	2020年 6月1日	165	女性	63歳	26年	40年	10年
E	2020年 6月9日	185	男性	76歳	35年	40年	15年
F	2020年 6月16日	150	男性	77歳	42年	42年	15年

5.1.4 分析方法

本調査では、インタビュー調査をICレコーダーに録音した音声ファイルから、逐語録を作成した。分析手法は、KJ法^{4,5}を参考に行った。本調査は半構造化インタビューを採用しており、調査対象者には自由に話してもらっているため、設問に対して一問一答形式の回答は得られていない。したがって、インタビュー調査の分析においては、調査対象者別の逐語録を発話のまとまりごとにカード化し、分析用カードを作成した。全カードを対応する調査項目に振り分けた後、項目別に該当カードを通覧し、類似するカードでグループを編成し、カテゴリー化を行った。

調査結果は、次節において、インタビュー調査項目の内容ごとにまとめ、それぞれのカテゴリーに対応する発話とともに述べる。

5.2 高齢者ボランティアへのインタビュー調査結果

本節では、紙芝居を活用した社会参加活動を行う高齢者ボランティアへのインタビュー調査を実施し、上演活動の現状と課題、目的と意義、やりがい、観客との関係、上演先との関係、地域社会との関係、上演活動の課題、今後の展望等に関する調査結果を述べる。

5.2.1 紙芝居上演の活動状況

(1) 高齢者を対象にした紙芝居上演を行う場所・人数・期間・回数・頻度

高齢者ボランティアが紙芝居上演を行う場所は、多様な上演場所に関する発話があった。高齢者を対象とした上演の場所は、介護施設（デイサービスを含む）、ふれあい・いきいきサロン、認知症カフェ、都営住宅の集会所、老人会、公園、病院であった。デイサービスは、高齢者ボランティア6人全員に上演経験があった。

また、高齢者ボランティアAは、「高齢者のおひとりさまのための居場所をつくりたかった」という動機で、所属する紙芝居サークルの高齢者有志5人で大人向け紙芝居を楽しむ会を立ち上げ、活動を行っている。大人向け紙芝居を楽しむ会は、特に演じる対象は限定せず、自治体の公民館で月に1回、第4火曜日の1時半～3時に開催され、事前に地域の公共図書館等にちらしを配布している。上演活動は、2年7カ月ほど継続していた。予約は必要なく自由に誰でも鑑賞できるが、「デイサービスに行けない人、自宅で生活している人が来てくれるかなど、高齢者の居場所づくりがしたかった」（高齢者ボランティアA）という発話の通り、実際に集まる観客は「平均20～30人でほとんどが高齢者」とのことであった。その他は、「介護施設で演じることを考えている介護職が観に来た」「ボランティア志願の母親が子どもを連れてきたこともあった」（高齢者ボランティアA）という発話があった。また、高齢者ボランティアAが所属する紙芝居サークルは、年に1回、大人を対象にした紙芝居の催しを、地域の公共図書館と協働で開催している。

高齢者ボランティアのデイサービスでの上演活動は、月に1カ所から4カ所を訪問しており、単発と定期的に約30分から1時間半、歌やおしゃべりを入れながら演じているということであった（高齢者ボランティアA,B,C,D,E,F）。定期的に上演するデイサービスは、1カ所（高齢者ボランティアD）、2カ所（高齢者ボランティアC）、3カ所（高齢者ボランティアB,E）、4カ所（高齢者ボランティアA）であった。デイサービスを訪問する頻度は、一つの施設に対して月1回が最も多かった（高齢者ボランティアA,B,C,D,E）。一つの施設に月3回という発話もあり、その場合は「デイサービスは曜日ごとに利用者が違うので、訪問の曜日を変えて多くの利用者を楽しんでもらっている」（高齢者ボランティアE）という説明があった。

デイサービスに定期的に通っている期間は、2年から最長で16年で、演じる対象人数は、10人以下の小規模な人数から30人くらいまでであった(高齢者ボランティアA,B,C,D,E)。デイサービスに行く際のボランティアの人数は、1人の場合と紙芝居サークルやボランティアサークルのメンバー複数人(2から5人)で訪問しているとのことであった。「小規模なデイサービスは3人でチームを組み5年ほど、大規模な介護施設は紙芝居サークルのメンバー数人で2,3年演じている」(高齢者ボランティアC)、といった発話があった。

加えて、「自分たち以外にもゲストを呼んで演じてもらう」「ゲストの演じ手も、ほぼ高齢者」という発話もあった(高齢者ボランティアB,D)。「一つのデイサービスに、サークルのメンバーが交代で上演している」というように、メンバー同士でスケジュールを調整し、活動を継続する工夫も見られた(高齢者ボランティアA,C)。また、「自分の母親がお世話になっていた介護施設で、母に会う目的も兼ねて紙芝居を演じさせてもらった」(高齢者ボランティアF)という発話があった。

その他の高齢者を対象にした単発の上演では「ボランティアとして登録している社会福祉協議会から依頼を受けてふれあい・いきいきサロンに出向くことがある。ポツポツ来ることになれば、月に4カ所重なったこともある」(高齢者ボランティアB)という発話があった。認知症カフェは、認知症の当事者をはじめとして誰でも参加可能であるが、複数のボランティアから、主に高齢者を対象とした単発の上演先として挙げられていた。「認知症カフェからもたまに依頼が来て、出向いている。スタッフを除いた参加者は全て高齢者だった」(高齢者ボランティアB)、「自分の散歩コースに認知症カフェが3つあり、そこに紙芝居を持って出かけて行って、頼まれればその場で演じる」(高齢者ボランティアE)、「病院の認知症カフェから、回想法として高齢者向け紙芝居を頼まれて演じた」(高齢者ボランティアD)とのことであった。

その他の高齢者を対象にした単発の上演は、「昔の同級生に頼まれて老人会で演じたことがあった」「散歩に行くときに自前の携帯紙芝居セットを持参して、神社の境内や公園で1人時間をつぶしている高齢者に会ったときに演じることもある」「自分の母親が年老いて寝たきりになったときに、楽しませたくて演じた」(高齢者ボランティアE)といった発話があった。

高齢者を対象にしたその他の定期的な上演として、「都営住宅の集会所で5年半、紙芝居を演じている」という発話があった(高齢者ボランティアF)。都営住宅の集会所の集まりは、月に2回、平日の午後に団地の自治会活動の一環でお茶会として開催され、昼食と自由なおしゃべり・簡単なゲーム・歌等と一緒に高齢者ボランティアによる紙芝居上演が行われていた。対象はデイサービス等介護施設の利用がない高齢者を想定しており、自由にお茶会に参加して交流を楽しんでいた。「団地には旦那さんに先立たれて、1人暮らしになった女性が多くて、気晴らしにおしゃべりがしたい」「元気な高齢者は気ままに暮らしたいからデイサービスのように時間にしばられたくない」(高齢者ボランティアF)「デイサービスに行かない元気な高齢者の1人住まいは1日中テレビになってしまう」(高齢者ボランティアE)

といった発話にみられるように、お茶会での紙芝居上演は、都営住宅に暮らす 1 人暮らしの女性高齢者の、コミュニケーションを兼ねた催しとなっていた。

(2) 高齢者以外を対象にした紙芝居上演を行う場所・対象・回数・頻度

高齢者ボランティアによる高齢者以外を対象とした紙芝居上演において、特に対象を限定しない上演と対象を限定した上演について、場所と対象者を挙げる。特に対象を限定しない上演場所として、博物館のイベント、街頭で演じる街頭紙芝居、公園、美術館の前、野外のイベント、本屋のイベントが挙げられた。対象を限定した上演場所としては、日本の保育園、小学校、中学校、高校、子ども会、学童保育、子育て支援センター、海外の小学校、難民キャンプ、盲人演劇祭、近所の人の自宅であった。対象は、乳幼児、小学生、中学生、高校生、視覚障害者等が挙げられた。紙芝居上演の実際に関する発話は、「博物館で年 3 回開催する街頭紙芝居のイベントは 12 年続いていて、自分と博物館の高齢者ボランティアが紙芝居を演じている」(高齢者ボランティア D)、「街頭紙芝居は月 1 回、地元の街角で 10 時から 15 時半まで 1 人でやっている。休憩無しなので、真夏や真冬は身体がきついが(演じるスキルの)修行になる」(高齢者ボランティア E)、「保育園で 7, 8 年園児相手に紙芝居をやっている」「外国人の子どもが増えているので、金子みすずの詩を紙芝居にして演じた」(高齢者ボランティア E)、「所属している紙芝居サークルは、小中学校で平和と人権教育を目的に 16 年くらい演じている」「2019 年度は小中学校、高校から実演の依頼があって、サークルの 60 代メンバーが中心となって 17 校で実演した。自分も今は回数は少ないが参加することもある」(高齢者ボランティア A)、「住んでいる団地の文庫活動で芋ほりをしたとき、畑で自作の紙芝居を演じたことがある」(高齢者ボランティア C)、「盲老人ホームで開催された演劇祭で視覚障害者を対象に紙芝居を演じた。視覚障害者は心の目で観ると言っていた」(高齢者ボランティア E)、「博物館でやった単発の紙芝居イベントは、作品展示と実演を行って大好評だった。11 日間で約 800 人お客さんが来てくれて、ニーズを実感した」(高齢者ボランティア D) 等といった多様な上演場所と対象、上演目的に関する発話があった。

5.2.2 介護施設における紙芝居上演の現状

高齢者ボランティア全員が上演しているデイサービスと、観客である利用者に関しては、「高齢者に演じるのは、皆優しくて気楽でいられる。子どもに演じる方が緊張する」(高齢者ボランティア D)、「高齢者同士だと気を遣わなくて良いし、観てくれる人も優しい。学校現場で紙芝居を演じるのは、授業の一環でハードルが高く制約も多い」「デイサービスは安心な場所、コミュニケーションが取りやすいから演じやすい」(高齢者ボランティア A)、「デイサービスは安心して演じられる場所」(高齢者ボランティア D)、「観客は人生の先輩なので気持ち良い緊張感がある」「自分が演じに行っているデイサービスは、要支援の人が来るので反応も良く盛り上がる」(高齢者ボランティア C) といった発話があった。

また、「介護施設の人は紙芝居が来るのを大歓迎してくれて、関係は良好」(高齢者ボラン

ティアA)、「職員の人も観客の人もウェルカムで喜んで待っていてくれて、反応が良い」(高齢者ボランティアD)、「どの介護施設もボランティアの実演はウェルカム」(高齢者ボランティアB)、といったスタッフがボランティアを歓迎している発話があった。「紙芝居がある日は、介護施設に来る高齢者が休む人が少ない」(高齢者ボランティアE)、「デイサービスの利用者や自由に動けない高齢者は施設で紙芝居を待っていてくれる。利用者にとってかなり楽しい時間で、だから自分は絶対休みたくない。もしいつも来ていたボランティアが来なくなったら利用者は寂しがらる」(高齢者ボランティアA) というように、上演が介護施設の利用者にとって楽しみとなっており、ボランティアにとってはやりがいとなっている発話があった。

定期的に長期間上演を行っているデイサービスについて、観客である利用者と介護施設のスタッフとの関係に関する発話もあった。「一つの施設に継続して行けると、スタッフが自分の考えを理解してくれて(自分の言葉や説明の)足りないところを補ってフォローしてくれる」「社会福祉協議会から来る依頼は単発で、施設とのやり取りも直接できないから、社協を通すのはやめた」「高齢者の自己肯定感や生きる喜びを考えたとき、単発で施設で演じるのは難しい」(高齢者ボランティアE)、「長い間、同じ施設に通っているうちにお互いに慣れてくる」「紙芝居を演じている時間は介護スタッフに自由な時間を提供できる。介護スタッフの人が感謝の会を開いてくれるのが喜び」「自分の地元にある介護施設で演じると地域の利用者が多いから、顔見知りと交流できる楽しみもある」(高齢者ボランティアA)、「小規模なデイサービスは、喜んでくれる人と顔見知りになれる」(高齢者ボランティアC) といったように、継続的に演じているデイサービスにおいて構築される関係についての発話が見られた。また、デイサービスではないが、「都営住宅の集会所で継続して演じるのは、人間関係ができる」(高齢者ボランティアF) という発話もあった。

長期間通うデイサービスの上演では、観客である男性の利用者と構築した関係についての発話もあった。「男性利用者は、最初の頃は演じててもニコリともせずムツとしていた。自分のスキルを上げて男性も楽しませて笑わせようと燃えた」「7, 8年通って演じ続けていたら、男性利用者から感謝の色紙をもらった」(高齢者ボランティアA) とのことであった。

5.2.3 紙芝居上演の現状と課題

(1) 高齢者に向けた上演の課題

高齢者に紙芝居を演じる際の課題として、観客の居眠りに関する発話が多く見られた。また、認知症の人に演じる課題も挙げられた。「居眠りにどう付き合うかが仲間うちの課題で、居眠りさせない演じ方が最大の課題だ」「居眠りする人が多いと、内心くじけそうになる」(高齢者ボランティアB)、「寝られてしまうとちょっとつらい」(高齢者ボランティアF)、「介護施設で午後の部に演じるのは、観客が眠くなりそうでできれば避けたい」(高齢者ボランティアD)、「デイサービスのレクリエーションはだいたい午後だから、面白くないと寝てしまう」(高齢者ボランティアA)、「居眠りするの演じ手の責任。高齢者の場合は寝て

いるようで聞いていることもある」「生理的に眠くなる歳だが、演じ手はボランティアであるほど工夫はする」（高齢者ボランティアE）といった、観客が寝ないようにすることを紙芝居上演の課題とする発話があった。

一方、紙芝居上演において観客である高齢者の居眠りを受け入れる発話もあった。「紙芝居は寝ちゃおうが楽しもうがどちらでも良い」「寝ている人がいても良い。それでも居場所があれば良いし、紙芝居の時間を共有できれば良い」「高齢者は今日のことは忘れてしまう」（高齢者ボランティアA）、「演じているとき、寝られてしまってもいいとも思う」（高齢者ボランティアF）、「紙芝居の途中で寝てしまう人もいるけど、顔が子どもに戻っているからいいかな」（高齢者ボランティアD）とのことであった。

また、デイサービスで認知症の人に演じることが課題に挙げられていた。「認知症の人に紙芝居が届かないとくじけそうになる」「認知症の人に観てもらえる紙芝居が目標」（高齢者ボランティアB）、「認知症の人に演じることがごまかしがきかない」（高齢者ボランティアE）、「認知症が進んでも自分の名前が分かれば、参加型の紙芝居で（観客の）名前を呼ぶとつながることができる」（高齢者ボランティアF）といったように、認知症の人に紙芝居を演じる難しさや工夫に関する発話があった。さらに、「初めて紙芝居を観る高齢者は、紙芝居なんて子どもだましと思って抵抗感を持つけれど、2回くらい観るとこれは違うなど、これなら楽しめると思ってくれる」（高齢者ボランティアA）といった発話もあった。

(2) 高齢者に向けた紙芝居上演を行う場所とネットワーク

デイサービス等の介護施設を利用しない高齢者の居場所とネットワークの課題に関する発話があった。「元気な高齢者に紙芝居を演じる場を設定するネットワークが地域にない」「デイサービスを利用しない高齢者の場をつくる人がいない」「高齢者だけではお茶会の準備をすることがしんどくなってきて、会そのものと紙芝居の継続も難しくなった」「誰かがおぜん立てして高齢者が興味を持てるようなきっかけをつくってほしい」（高齢者ボランティアF）、「スーパーの片隅で1人ポツンと座っている高齢者によく話しかけられたのが、大人向け紙芝居を楽しむ会を立ち上げたきっかけ」「高齢者を集めて紙芝居をするのは良いが、その先の方向性と発展性、高齢者がそれ以外にも何か求めているのかニーズを考えて悩んでしまう」（高齢者ボランティアA）、「デイサービスに行けない高齢者がオレンジカフェ（認知症カフェ）に集まってくる」（高齢者ボランティアE）といった課題が挙げられた。

また、「紙芝居を楽しむ会は、会場を確保するのが一番大変」「無料で誰でも利用できる場を求めている」「車いすの人も対象に考えているので、階段があると演じられない」「バリアフリーの公共の場所があったら演じてみたい（が実際にはない）」（高齢者ボランティアA）、「演じる場所がないと紙芝居は活かせない」（高齢者ボランティアD）といった上演場所に対する要望も挙げられた。

(3)高年齢者ボランティア自身の老いとの折り合い

高年齢者ボランティア個人の課題として、自身の老いに関する発話が多く見られた。「所属している紙芝居サークルは小中学生相手に学校で演じるが、学校の階段を上がるのが辛くなってきた」「音訳の会のボランティアと並行して活動していたメンバーが多かったが、高年齢になると声が衰えてきて（音訳を）続けられなくなった」「小中学生向けの活動も続けているがあちこち移動するのも大変で。やめたら今までのスキルと表現力がもったいないから、だんだん高年齢者に演じることが増えてきた」（高年齢者ボランティアA）、「月に演じる回数が多いと身体がしんどい」（高年齢者ボランティアB）、「歳を取ってくると、市販の紙芝居の舞台は高年齢者には重くて持って歩くのが大変」（高年齢者ボランティアE）、「年齢とともに事務手続きなんかはしんどくなってくる」（高年齢者ボランティアF）といった発話があった。

また、「今はまだ大丈夫だけど、これからボランティアたちの年齢がもっと高くなったとき活動がどうなるのかが問題」「いつか（ボランティアの）定年を自分で決めなければならぬ。これが一番難しい」（高年齢者ボランティアA）、「今は元気でもいつか体力が落ちると思っているので、紙芝居以外の活動は断捨離していこうと思っている」（高年齢者ボランティアC）のように、自身の老いの状態によって今後の活動を検討する発話もあった。さらに、「介護施設で演じるボランティアは、自分のサークルには今は後継者がいない。今、学校現場の実演に行っている60代のボランティアたちが、自分たちの（高年齢者への）活動をいずれ引き継いでくれることを期待している」（高年齢者ボランティアA）といった活動の後継問題についての発話があった。

(4)紙芝居の出版に関する問題

高年齢者ボランティアが演じる紙芝居全般の出版に関して、「紙芝居はなかなか良い作品が出版されない。紙芝居の出版社に新しい作品づくりを頼んでも、望む作品はつくってくれないのが不満」「大人の鑑賞に堪える紙芝居を探すのは大変」（高年齢者ボランティアA）、「もっと参加型の紙芝居を増やしてほしいが、定番の子ども向け作品がずっと演じられていて（新しい作品が出版されない）」（高年齢者ボランティアB）、「もうちょっと単純で高年齢者も演じられてなごむという、そんな紙芝居が考えられるのではないかなと」「紙芝居はもう少しパーソナルな、例えば祭りだとか地域性のあるものをつくって、地域の図書館や学校に置いて演じられるのが理想だと思う」（高年齢者ボランティアF）といった出版紙芝居への要望についての発話があった。

(5)高年齢者ボランティアと地域の公共図書館の関係

高年齢者ボランティアの公共図書館に対する発話は、ボランティア活動における図書館の意義と図書館への要望が見られた。まず、高年齢者ボランティアの活動における公共図書館の意義は、「紙芝居は書店に並ばないので、公共図書館で中身をチェックする。演じる人にとって図書館は貴重な存在。公共図書館の蔵書が頼りなので、役割は他の刊行物より重い」「図

書館の紙芝居コーナーに高齢者向けを置いたり、カウンターで（高齢者向けの）紙芝居の案内をする図書館が出てきた」（高齢者ボランティアB）、「上演ボランティアの活動に貢献しているのは公共図書館の存在」（高齢者ボランティアD）、「紙芝居は所有もしているが、ほぼ公共図書館で調達している。活動に公共図書館は欠かせないので感謝している」（高齢者ボランティアA）といった発話があった。

資料の貸出し以外についても、公共図書館に関する発話があった。「図書館が主催した回想法の取り組みに、高齢者向け紙芝居を演じてほしいと頼まれて驚いた。図書館と認知症が初めて結びついて図書館の意義に気がついた」（高齢者ボランティアD）、「公共図書館で介護施設での紙芝居ボランティアを養成する講座が開かれて、講師に呼ばれた」（高齢者ボランティアB）、「図書館職員から、地元の昔話が本だとなかなか読まれないので紙芝居にしたらと提案があり、手づくり紙芝居をつくって地域の図書館で貸出ししされている」（高齢者ボランティアC）、「自分の住む自治体では図書館が中心になって読み聞かせの活動が盛んなので、ボランティアが育った」「紙芝居サークルは図書館の講座からできたサークルで、勉強会は図書館の集会室で行っている」（高齢者ボランティアA）といったように、高齢者ボランティアは資料の貸出し以外にも、上演活動等における公共図書館の意義を表していた。

一方、公共図書館への要望についても複数の発話があった。「公共図書館には安定した紙芝居の所蔵を望んでいる」（高齢者ボランティアA）、「紙芝居を未所蔵や閉架にされると手に取って見れない」「もっと紙芝居について理解している司書が増えて、相談できたらありがたい。紙芝居の収納場所の工夫と、中身を見る紙芝居の台があればいいと思う」（高齢者ボランティアB）、「公共図書館は読み聞かせはよくやっているが、紙芝居の存在もアピールしてほしい」（高齢者ボランティアD）、「オリジナルの手づくり紙芝居を地域の図書館が所蔵して貸出しすると良い」（高齢者ボランティアF）といった図書館資料としての紙芝居への理解と活用を求める発話があった。また、「公共図書館の階段が高齢者にとっては負担で、場所としての弱点」という発話もあった。

さらに、図書館の可能性に言及した発話もあった。「資料の貸し借りという関係を越えたものが図書館を軸にできあがっていったら面白いと思う」（高齢者ボランティアB）、「図書館にある紙芝居を高齢者にもっと活用するような、一人暮らしの高齢者の場をつくる一步を公共図書館に踏み出してほしい」（高齢者ボランティアF）、「超高齢社会では、図書館も高齢者向きの催しをやらざるをえないのでは」（高齢者ボランティアA）といった公共図書館の役割への期待に関する発話があった。

5.2.4 紙芝居上演の目的・意義・やりがい

本項では、主に高齢者を対象にした紙芝居上演において、高齢者ボランティアの活動における目的・意義・やりがいに関して、インタビュー調査から抽出した10のカテゴリー、すなわち、(1)高齢者の居場所づくり、(2)相互に喜びを共有、(3)高齢者の介護に有用、

(4)双方向のコミュニケーション、(5)歌とおしゃべりの相乗効果、(6)高齢者同士のコミュニケーション、(7)セルフケアとしての紙芝居上演、(8)自己を表現するメディア、(9)社会との接点、(10)演じ手のメッセージ、それぞれについて、結果を述べる。

(1)高齢者の居場所づくり

高齢者ボランティアが紙芝居上演を行う目的の一つは、デイサービス等を利用していない高齢者の居場所をつくることであった。「1人である知らない高齢者によく声を掛けられたのが、大人向け紙芝居を楽しむ会を立ち上げたきっかけ。この会のターゲット、一番来てほしい人は(介護)施設には行ってなくて自宅で生活している人」(高齢者ボランティアA)、「一人暮らしの高齢女性は団地の主流、これが現実。紙芝居を演じているお茶会は、デイサービスを利用していない高齢女性の交流の場」(高齢者ボランティアF)とのことであった。

(2)相互に喜びを共有

「介護施設で演じる時は、できれば喜んでもらって大笑いをしてもらいたい」(高齢者ボランティアB)といった高齢者を喜ばせたいという目的が挙げられた。また、高齢者を喜ばせることが同時に自分の喜びとなっており、活動のモチベーションにつながる傾向が見られた。「喜んでいる顔が見られて、また待っていますと言われるのが嬉しい」(高齢者ボランティアD)、「演じに行くのは、高齢者が喜んでくれるから」(高齢者ボランティアE)、「人に喜んでもらえるのは自分も嬉しいし、喜べる。自己満足じゃ続かない」(高齢者ボランティアC)、「心待ちにしてくれる利用者があるデイサービスは、自分にはとても大事な場所」(高齢者ボランティアA)といった発話があった。

(3)高齢者の介護に有用

「高齢者のレクリエーションの装置としては、紙芝居はノスタルジックで昔を思い出してくれるのではないか」(高齢者ボランティアB)、「紙芝居は画面が大きく、刺激もあって介護に良い」「高齢になると手の機能が弱って本を持ってないこともある。機能が弱っても紙芝居は共感してみんなで聞いて楽しめる」(高齢者ボランティアD)、「高齢者は体力が衰える分、紙芝居の絵で観せたり懐かしさで観せる」「紙芝居は文学作品でもダイジェストで深すぎないから高齢者に届きやすい」「介護施設で読み聞かせは難しいんじゃないかな」(高齢者ボランティアA)、「最初は、紙芝居と高齢者がつながるのは予想外でピンと来なかったけれど、介護現場の取り組みを見て紙芝居が介護の本質と重なると感じた」(高齢者ボランティアF)といったように、紙芝居が高齢者の介護に有用であるという指摘があった。

さらに、介護施設のスタッフを紙芝居の演じ手にすることを目的にしていた発話もあった。「デイサービスで紙芝居をやる目標は、介護現場の職員に演じてもらうこと」(高齢者ボランティアD)、「デイサービスの職員2,3人に演じてもらうようになった」(高齢者ボランティアB)。「紙芝居が高齢者にうけるので、自分から積極的に始めたスタッフがいて、地元

の図書館で借りてきて熱心に演じている」(高齢者ボランティアA)といった事例が挙げられた。

また、認知症の人に演じるやりがいや意義を挙げる高齢者ボランティアも複数いた。「昔の暮らしを回想する高齢者向け紙芝居を演じたら、認知症の人が涙を流してくれた」(高齢者ボランティアD)、「演じると、認知症の人も回想の力があるのは確かだと感じる」(高齢者ボランティアE)、「認知症の人に演じるのは難しいけれど、認知症の人に届くと嬉しい」(高齢者ボランティアC)、「認知症の人に届く紙芝居をつくりたい」(高齢者ボランティアB)、「認知症の人は、帰りには(紙芝居のことは)全部忘れてしまっていたが、演じている場ではとても楽しんでいた」「認知症の人や高齢者の場合は、自分が参加している、その場に認められているというのが大事」(高齢者ボランティアF)といった発話があった。

(4)双方向のコミュニケーション

高齢者ボランティア全員が、紙芝居上演の特性である双方向的なコミュニケーションと目の前で観客の反応を味わえる現前性を、目的とやりがいに挙げていた。「紙芝居ははずしたりすべったりしても、目の前で反応を見れるのが嬉しい」(高齢者ボランティアC)、「紙芝居はライブだから面白い。なぜこんなに盛り上がるのかというときもあれば、そうでないときもある。観客との高揚した一体感を味わう経験は忘れられない」「お客さんに助けられるのが紙芝居」(高齢者ボランティアB)、「結局(紙芝居は)コミュニケーションと一緒に。演じに行くのは人に直に会えるから」(高齢者ボランティアF)、「高齢者にとってはライブを味わえる、一緒に歌えることも人気」(高齢者ボランティアA)、「お客さんの反応に演じる側が反応するのが紙芝居」「演じる人が楽しくないと観ている人は楽しくない」(高齢者ボランティアE)とのことであった。

(5)歌とおしゃべりの相乗効果

高齢者に紙芝居を演じるときは、紙芝居上演とともにおしゃべりをするので、コミュニケーションを広げるといった目的が複数見られた。「1人で演じるときは3分の1はトーク、我々が体験した苦労は高齢者の財産。若い人、若い介護スタッフに伝えられるのは高齢者。だから自信を持ってほしいと直接伝える」(高齢者ボランティアE)、「紙芝居はツールなのでそこから話が広がる」(高齢者ボランティアD)、「自分の失敗談が喜んでもらえる」「演じる前に両親の介護の話もよくした」(高齢者ボランティアB)、「(高齢者向き紙芝居の)昭和の窓は、思い出をいっぱい話したがる人がいる」「他人ごとではなくて自分の生きた時間の話をする」(高齢者ボランティアF)、「作品の背景や作者について事前に調べて、演じた後などで話を広げる」(高齢者ボランティアA)といったように、上演とともに高齢者との会話を通してコミュニケーションを深めることを目的にしていた。

さらに、高齢者とのコミュニケーションに歌の効果を挙げる発話もあった。歌が組み込まれた紙芝居を上演することもあれば、紙芝居をきっかけにして歌も楽しむということであ

った。「昔の歌は絶対にうける。寝ていても起きて歌いだす」(高齢者ボランティアC)、「テレビがない、ラジオの時代に育っているから歌が好き」「歌を共有することで意思の疎通がうまくいく」(高齢者ボランティアA)、「70歳くらいに金色夜叉はなじみがないけど、80歳から90歳の人みんな歌える」(高齢者ボランティアB)とのことであった。

(6) 高齢者同士のコミュニケーション

「自分が高齢者に演じるのは、年代が合っているから」「大人向き紙芝居を楽しむ会のメンバーは高齢者ばかり」「演じ手が(デイサービスの)利用者と同世代だと、歌にしても介護スタッフとは違う年代にあった選曲ができる」(高齢者ボランティアA)、「自分の年齢とともに高齢者や高齢社会に目が行くようになった」(高齢者ボランティアC)、「若い演じ手にも出てきてほしいが、演じ手が高齢者じゃないと、分からないニュアンスも多い」(高齢者ボランティアB)といった、上演における同世代同士の意義についての発話があった。

一方、複数の高齢者ボランティアが、高齢者の中での世代間ギャップについて言及した。「自分も高齢者だけど90歳の高齢者とは20歳の差があって、ジェネレーションギャップは想像力で埋め合わせている」「90歳の演じ手は、同年代のお年寄りに演じるのにぴったりはまる」(高齢者ボランティアB)、「88歳が演じる姿を見て、デイサービスの60、70代の利用者が励まされている」(高齢者ボランティアE)、「演じる相手は70代以降なので、(60代の)自分とはジェネレーションが違う」(高齢者ボランティアC)、「ボランティアで60代といえば若いという感覚」(高齢者ボランティアA,B)といった発話があった。

また、「高齢者に演じるときは、今が楽しいという気持ちで演じている」「高齢者は大変な時代を生きてきたから、自分を大事にもう少し生きていこうという気持ちを込めて演じる」(高齢者ボランティアA)、という高齢者に演じるときの意識についての説明があった。

(7) セルフケアとしての紙芝居上演

「紙芝居は楽しみながら肺活量も上がるし、健康に良い」「高齢者が演じるのは元気が出る。声も出せるし、上手い下手は関係ない」(高齢者ボランティアE)、「紙芝居は根本的に楽しみたくてやっている」(高齢者ボランティアD)、「ボランティアを支えるのは健康。活発に動くことが呆け防止になる」「自分が楽しく演じるのが座右の銘」(高齢者ボランティアA)、「今の健康状態は良好。作品づくりも演じるのも楽しいから続けたい」(高齢者ボランティアC)、「紙芝居を演じるのは楽しみたいため。人生を楽しむ、楽しみ方の一つが紙芝居」(高齢者ボランティアF)といったように、自身の健康、ウェルビーイングと上演活動の関係についての発話があった。

(8) 自己表現が可能なメディア

紙芝居の特性である演じるという行為が、紙芝居上演における目的、やりがいと意義として挙げられていた。「演じるということが、他のメディアにはない紙芝居の魅力」「地味な私

生活からは想像もできないほどのエンターテイナーになれる」(高齢者ボランティアB)、「どうやったら作者の想いが伝わるのか、芝居を追求する楽しみ、深みにはまるというのかな」(高齢者ボランティアA)、「紙芝居は観てもらうのも楽しいが、自分を表現していくというのが自分を表せて元気になれる」「人間は表現したい生きものだと思う。表現できる、演じる、それにつきる」(高齢者ボランティアC)、「演じるのは上手くいくと気持ち良いが、上手くいかない、納得できないときは大変」(高齢者ボランティアE)、「思いのたけ、非日常の最たるものが紙芝居を演じること」(高齢者ボランティアD)とのことであった。

また、紙芝居は同じ作品でも演じ手によって違ってくるのが面白さだという発話があった(高齢者ボランティアC,D,F)。「演じ方は個性が前提。演じ手はもう高齢なので、それぞれやりたい演じ方で自由にやっている」(高齢者ボランティアA)とのことであった。また、自由に演じるということについて「紙芝居は上手じゃなくても脱線してもいい。楽しんで演じたい」(高齢者ボランティアF)、「紙芝居は、厳格なルールでちゃんと演じないといけないと言われることある」「歳を取ると良い加減で演じる。間違えてもOK」(高齢者ボランティアE)といった発話があった。

一方、個性を活かし自由に演じることを是とするが、「紙芝居は読んでも伝わらない、演じないと伝わらない」(高齢者ボランティアA,E)といったように、高齢者ボランティアは演じることに真剣に向き合っている様子が見られた。「一生懸命練習して準備をして演じる」(高齢者ボランティアA)、「演じる際は徹底して練習する。作品のテーマは何かを考えながら練習する」(高齢者ボランティアE)といった発話に代表されるように、高齢者ボランティアは、演じる練習を欠かさず行き、上演に臨んでいる。また、紙芝居サークルで練習をする、他のベテランの演じ手の上演を観に行く、介護セミナーの紙芝居講座に参加する、街頭で紙芝居を演じて修行する等、演じることの学習方法に関する発話があった。

(9)社会との接点

紙芝居のボランティア活動は「自分にとって社会と他者につながる唯一の窓」(高齢者ボランティアB)、「現役時代は忙しくて、高齢者に向けて紙芝居のボランティアを始めたのは退職後」「自分が高齢になったから紙芝居の活動に専念できた」(高齢者ボランティアE)といった発話があった。また、「街頭紙芝居はいろんな人と出会えて人間関係が広がった」「紙芝居を観ていた人にまた別の実演を頼まれる」「介護施設で演じたら、88歳の女性から弟子志願されて、意図せず教えている」(高齢者ボランティアE)といったように上演活動から新たな活動につながる事例が挙げられた。

その他にも、「介護セミナーや公共図書館で、高齢者に紙芝居を演じたい人向けの講座の講師を頼まれる」(高齢者ボランティアB)、「地域の小学校で毎年手づくり紙芝居を子どもに教えている」(高齢者ボランティアF)、「紙芝居創作工房を開いて教えてみようと思っている」「高校生に紙芝居を子どもの文化として伝えている」(高齢者ボランティアC)、「地域の中学校で紙芝居を使って郷土の話を教えている」(高齢者ボランティアD)といったよう

に、高齢者ボランティアは、紙芝居を活用した上演活動の一環として、教えるという活動を行っていた。

(10) 演じ手のメッセージ

紙芝居を演じることの目的として、高齢者の体験やメッセージを若い世代に伝えていく意義が挙げられていた。「戦後を生きてきた人として、伝えられることを実体験から伝えたい」「紙芝居を演じるやりがいとしては、学校で若い人に戦争のことを伝えることが一番大きい」（高齢者ボランティアA）、「自分の紙芝居の原点は平和紙芝居、戦争だけでなくいじめや差別も含めて」（高齢者ボランティアE）、「自作のいじめをテーマにした紙芝居を小学生に演じると本当に良く聞いてくれる。高校生にも演じたら本当に感動してくれた」（高齢者ボランティアC）とのことであった。

5.2.5 紙芝居上演における作品選定の現状

高齢者ボランティアが高齢者に向けた紙芝居上演で演じる作品は、出版紙芝居と手づくり紙芝居であった。出版紙芝居の入手方法は、個人で購入する、サークルや文庫活動の所属団体に購入する、公共図書館で借りるとのことであった。出版紙芝居については、高齢者向け紙芝居だけでなく、各自が市販の子ども向けの中から高齢者が観ても楽しめる作品を選定し、上演を行っている。手づくり紙芝居は高齢者ボランティアC,D,E,Fが制作の経験があり、上演に活用した経験もある。また、高齢者ボランティアC,D,Fは出版紙芝居としての自身の作品があることから、作品を楽しむだけでなく、作品に対する観客の反応を見るためにも演じていた。高齢者ボランティアの作品選定にかかわる基準は、次に挙げる2つのカテゴリー、すなわち、(1)演じ手の個性と観客の視点、(2)高齢者向け紙芝居の活用と紙芝居の普遍的なテーマであり、それぞれについて述べる。

(1) 演じ手の個性と観客の視点

高齢者ボランティアの上演における作品選定においては、演じ手が自分自身の価値観や感性を通して作品のテーマを理解し、自分が納得して演じられる作品を選ぶ過程が見られた。「作品を選ぶには時間を掛けて、自分が納得して楽しめる作品を高齢者に持っていくことを心掛けている」（高齢者ボランティアA）、「（紙芝居の）笠地蔵を読み込むことで、年越しの物語というより夫婦愛、おばあさんの優しさに気づいて全く違う視点で楽しめるようになった」（高齢者ボランティアB）といった発話があった。また、「演じ手によって（作品の）好みや演じやすさが違う」（高齢者ボランティアB）、「紙芝居は演じ手の声にあった作品を選ぶので、観る人の好き嫌いに影響が少ないと思う」（高齢者ボランティアA）とのことであった。

また、演じる対象である高齢者の視点に立った作品選定に関する発話があった。「作品選びに年代は大きく影響する。季節感のある作品選びも効果的」（高齢者ボランティアA）、「観

客と場に応じて、作品のバランスを調整して演じている」(高齢者ボランティアE)、「紙芝居は観客に合わせてセレクトする。その場に合わせるのが重要」(高齢者ボランティアC)、「子ども向けや高齢者向けの作品から自分なりに選んだお年寄りの心に届ける作品リストがある」(高齢者ボランティアB)といったように、目の前の観客である高齢者、場所、季節に合った作品を選ぶことを重要視していた。

(2) 高齢者向け紙芝居の活用と紙芝居の普遍的なテーマ

高齢者向け紙芝居について、高齢者ボランティア全員が出版の必要性和意義について言及していた。「実際に演じてみて、高齢者の人たちの反応を見ると必要なものと実感した」(高齢者ボランティアC)、「高齢者向け紙芝居は文化のたまものとしても必要だと思っている」(高齢者ボランティアD)「紙芝居で介護ができるので、介護紙芝居とも呼ばれている」(高齢者ボランティアB)といった発話があった。

また、高齢者向け紙芝居の有用性については、「昔の恋愛ものは今の若い人には全く分からないだろう」(高齢者ボランティアA)といった発話に代表されるように、高齢者の持つ価値観と回想の要素を含んだ高齢者向け紙芝居の中から、高齢者の観客に演じて喜んでもらっているとのことであった。また、「介護施設に行くと利用者にやくぎもの、色っぽいものなどをリクエストされるので、(高齢者向け紙芝居の) 瞼の母と安珍清姫物語で対応できる」「(高齢者向け紙芝居の) おっばい山は高齢者にも街頭で演じたときも好評だった」(高齢者ボランティアE)といった高齢者を対象にした上演での使いやすさに関する発話があった。

また、戦争の物語である紙芝居に関しては、「戦争の話なんて聞きたくもないという気持ちを踏み越えるのに、子ども向けもある平和紙芝居の役割が大きい。(高齢者向け紙芝居の) 父のかお母のかおや、峠の老い桜は高齢者のトラウマを取るきっかけになる紙芝居なので大切」(高齢者ボランティアE)とのことであった。

一方、必ずしも高齢者向けとして出版された紙芝居でなくても、「作者が意図していない作品のテーマが高齢者に刺さることがある」「良い作品には子どもも大人もない」(高齢者ボランティアD)、「人間の真実みたいなもの、普遍性のあるものは大人も子どもも一緒」(高齢者ボランティアF)、「子どもに向けたメッセージを込めた作品が高齢者によく演じられることもある」(高齢者ボランティアC)、「子どもがのってくれる作品は高齢者ものことが多い」(高齢者ボランティアE)という発話があった。しかし、例えば「桃太郎みたいのが続くと高齢者は喜ばない」(高齢者ボランティアE)、「自分が演じてもらおうとしたら、桃太郎を観せられるのは嫌だなあ」(高齢者ボランティアA)といったように、高齢者を子ども扱いすることとは違うということであった。

また、「昭和を回想する高齢者向け紙芝居を小学生に演じると、祖父母の世代の話になって盛り上がる」(高齢者ボランティアF)といった、世代間の高齢者理解に有用という事例もあった。

5.2.6 手づくり紙芝居と出版紙芝居の位置づけ

高齢者ボランティアのうちの4名は、手づくり紙芝居を制作して高齢者に向けた上演に利活用していた。手づくり紙芝居は、基本的に脚本と絵の両方を自分で制作していた。手づくり紙芝居を制作する目的には、(1)演じる対象を喜ばせたい。(2)伝えたいテーマを形にする。(3)自己を表現するという3点が見られた。以下それぞれについて述べる。

(1)演じる対象を喜ばせたい

「人に喜んでもらえる紙芝居しかつくりたくない」と誓っている」「人に喜ばれることが創作意欲」(高齢者ボランティアC)、「お世話になった先生のために、初めてつくった紙芝居が自分の手づくり紙芝居の原点」(高齢者ボランティアF)、「喜ばせたいという思いの一つが手づくり紙芝居」「目の前のお客さんに合わせて、一期一会の紙芝居をつくる」(高齢者ボランティアE)、「紙芝居を観てくれる人たちのためにつくりたい」(高齢者ボランティアD)といったように、演じる対象のためにつくりたいという動機が見られた。

(2)伝えたいテーマを形にする

「子どもにも高齢者の心にも届く紙芝居がつくりたい」「形のないテーマを見つけるのは難しい。制作に必要な豊かな感性を持ち続けるのが最も難しい」(高齢者ボランティアD)、「紙芝居は伝えたいメッセージを込めてつくるのが大事」(高齢者ボランティアF)、「家族の病気を経験して人生紙芝居をつくった」(高齢者ボランティアC)、「教えている(高齢者の)紙芝居サロンのメンバーが選んできた老いをテーマにしたお話から、サロンのみんなで紙芝居をつくった」(高齢者ボランティアE)といったように、伝えたいテーマを紙芝居として作品にしている発話があった。

(3)自己を表現する

高齢者ボランティアは紙芝居制作と自作を演じることを通じて、自己を表現している様子が見られた。「自分が演じてもらいたい作品をつくっている」「市販で売っていないような、クイズや俳句、いろはかるたなどの紙芝居もどきをつくっている。正統派の紙芝居ではないが、高齢者にうけるし半端な時間でもできる」(高齢者ボランティアE)、「高齢者自身が紙芝居をつくるのがもっと進めば良いなと思っている」「自己表現というのは、好きなことを見つけるっていうか、好きなことに近いんじゃないかな」(高齢者ボランティアF)、「小中学生の表現活動にもとても向いていると思う」「紙芝居は自分でつくれるというのが大きな特徴」(高齢者ボランティアC)といった発話があった。

また、高齢者ボランティアBは、手づくり紙芝居は制作しないが、紙芝居の舞台を手づくりしており、その目的として、自分の制作意欲と、舞台を使って紙芝居を演じれば高齢者が喜ぶのではと考えたことを挙げていた。

出版紙芝居に関しては、「手づくり紙芝居で満足していたが、出版されると作品が独り歩

きして活用と人間関係が広がる喜びを知った」(高齢者ボランティアD)、「高齢者向けの紙芝居は自由なのではじめて描いた」「子ども向けの紙芝居は当然制約がたくさんある」(高齢者ボランティアC)、「出版紙芝居はいろんな人が演じるから、誰もがほどほどに演じたいと思えなくては出版する意味がないと思う」(高齢者ボランティアF)といった発話があった。

また、最近、手づくり紙芝居と出版紙芝居の垣根がなくなってきており、制作方法と概念が変化しているとのことであった。「通常、手づくり紙芝居はカラーコピーで制作するが、オンデマンド印刷で10部や100部から制作可能な業者が出てきたので、自分で安くきれいに出版紙芝居に近い仕上がりで制作ができるようになった」(高齢者ボランティアC)。また、「昔は、手づくり紙芝居は自分だけで演じたいという演じ手も多かったが、今は手づくり紙芝居もいろんな人に演じてもらえると嬉しいと変わってきている」(高齢者ボランティアF)といった発話もあった。

5.2.7 高齢者と紙芝居の現状と今後の展望

高齢者ボランティアを対象とするインタビュー調査結果から、高齢者と紙芝居の親和性に関する発話を挙げる。このインタビュー調査では、高齢者ボランティアが子ども時代に街頭紙芝居を経験したか、その有無を質問した。その結果、69歳～77歳の高齢者ボランティアA,B,E,Fは街頭紙芝居を子どもの頃に夢中になって観たという回答があった。「町に原っぱのある時代だったから、子ども時代は毎日お金を払って紙芝居を観ていた」(高齢者ボランティアA)、「76歳の自分は街頭紙芝居世代。真っ只中で育って生きてきた人間」(高齢者ボランティアE)、「1950年生まれの自分は街頭紙芝居を観た最後の世代だと思う」(高齢者ボランティアB)、「第2の街頭紙芝居の黄金期に子ども時代を過ごしている」(高齢者ボランティアF)といった発話があった。一方、64歳と63歳の高齢者ボランティアC,Dは街頭紙芝居を観た経験がなかった。「東京に住んでいたが子どもの頃に紙芝居に触れたことはなかった」(高齢者ボランティアC)、「自分は幼稚園で紙芝居を観た記憶くらいしかない」(高齢者ボランティアD)とのことであった。「博物館の高齢者ボランティアさんたちは80代の男性が中心で、楽しく好きな作品を演じて生きがいになっている」(高齢者ボランティアD)といった発話にあるように、概ね70代以降の高齢者にとって紙芝居は懐かしさをおぼえるものといった傾向が見られた。

また、今後、高齢者の世代が替わっても紙芝居は対応できると考える発話があった。「昭和の次は平成を懐古するなど、次世代への対応は十分考えられる」(高齢者ボランティアE)、「自分たちの世代なら紙芝居にフォークソングとか、世代に合った歌を使えば良いかな」(高齢者ボランティアC)。さらに、メディアとしての紙芝居の展望を示す発話もあった。「紙芝居が今後どうなるかと言えば、人間はよくばりだから、デジタルもアナログもどちらのコミュニケーションも求めると思う」(高齢者ボランティアF)、「直に人の声でやり取りして、感動を共有できるアナログさが良い」(高齢者ボランティアC)、「博物館の紙芝居展に来た人たちを見ると、(人は)アナログを求めているものが絶対あると思うし、ITが進ん

でも手づくりを求めているんじゃないかな」(高齢者ボランティアD)とのことであった。

その他、紙芝居全般の特性として、「手軽で誰でもどこでもできる」(高齢者ボランティアE)、「舞台があればどこでも劇場」(高齢者ボランティアC)、「目の前の人とどうつながるかというツール。簡単に伝わりやすい」(高齢者ボランティアF)とのことであった。また、紙芝居は絵本と違って場の雰囲気でも多少アレンジしてセリフにないことを言っても良く、型通りに演じなくても良いといったことが挙げられた。

一方で、「紙芝居で何でもできるわけではないので、過剰な期待はしちゃいけないと思う」「たかが紙芝居を常に考えている」(高齢者ボランティアF)、「紙芝居は表現方法の、One of them. たかが紙芝居、やっぱり紙芝居」(高齢者ボランティアE)といった、紙芝居は多様な表現とコミュニケーションツールの一つであるという発話もあった。

さらに、絵本の読み聞かせと紙芝居上演の比較については、「絵本は基本的に個を育てるもの。紙芝居はみんなで楽しむもの」(高齢者ボランティアF)、「絵本は自己に対峙するもの」(高齢者ボランティアD)といったように、紙芝居と絵本の特性の違いが挙げられていた。

5.3 高齢者ボランティアへのインタビュー調査結果の考察

前節では、高齢者ボランティアの紙芝居を活用した社会参加活動において、特に高齢者に向けた上演活動に焦点をあて、活動の現状と課題、高齢者ボランティアの意識や行動を明らかにすることを目的とし、インタビュー調査の結果を述べた。本項では、高齢者ボランティアへのインタビュー調査結果について、地域包括ケアと高齢者ケアの観点から考察を行う。

5.3.1 地域の担い手としての高齢者の紙芝居上演

本研究でインタビュー調査を行った高齢者ボランティア6名は、高齢者に向けた紙芝居上演は単発、定期的を含めてデイサービスを中心に精力的に活動を行っており、地域の担い手として高齢者の社会参加活動が機能していると考えられる。また、高齢者ボランティアが紙芝居上演の対象としている高齢者とは、大きく分けて介護施設を利用する高齢者と、利用していない高齢者であった。

介護施設を利用する高齢者とは、主に地域のデイサービスを利用するものと介護施設に居住するものであった。高齢者ボランティアのデイサービスにおける紙芝居上演は、単独で訪問することもあれば、ボランティア仲間と協力して訪問することもあり、介護施設のレクリエーションとして高齢者ボランティアの紙芝居上演が定着していた。

一方、介護施設を利用しない高齢者とは、自立した生活をおくる身体機能を保持しており、自宅に暮らしていることが想定される高齢者である。介護施設を利用しない高齢者を対象にした定期的な紙芝居上演は、高齢者ボランティアAが紙芝居サークルの仲間と自主的に行っている上演と、高齢者ボランティアFが行っている都営住宅の集会所で開く自主的なお茶会であった。いずれも、高齢者が自分たちで場所の確保、会場の準備等を行っているた

め、運営に制約はなく自由な活動を行っていた。一方、高齢者だけの自主的な運営のため、高齢者の老いとともに運営が難しくなる、運営の持続性が保てないといった課題を抱えていた。

インタビュー対象者である高齢者ボランティアが定期的に通うデイサービスの数は1カ所から4カ所で、1回の訪問で30分から1時間半の上演を行い、1人の高齢者ボランティアで1回の上演を行うこともある。一つの介護施設に月3回通う高齢者ボランティアもあり、曜日によってデイサービスの利用者が異なることから、多くの利用者に上演を行うために異なる曜日に訪問していた。また、定期的に通っているデイサービスの期間は、2年から最長16年であった。このことから、60代から70代の高齢者は安定したボランティア活動を継続することが可能であり、高齢者ボランティアは介護施設にとって有用な社会資源であることが示唆された。

また、インタビュー調査の結果から、高齢者ボランティアの上演活動において、演じる対象や国、上演目的の多様が見られ、双方向のコミュニケーションメディアとしての利活用が報告された。紙芝居上演は、高齢者のボランティア活動として、また、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動として機能していることが示された。

5.3.2 介護現場との関係をつくる高齢者の紙芝居上演

インタビュー調査対象者である高齢者ボランティア6名全員が、単発と定期的にデイサービスで紙芝居上演を行っていた。高齢者ボランティアA,B,C,D,Eは定期的に複数のデイサービスに訪問しており、介護施設のスタッフと観客である高齢者たちと、長期間に渡り関係を構築していた。

高齢者ボランティアAは、学校現場で授業の一環として生徒に紙芝居を演じる経験と比較して、デイサービスで高齢者に演じることは、気を遣わずに安心してコミュニケーションを取ることができると述べていた。そのような意識は、高齢者同士という仲間意識からくると考えられ、教育現場での上演とは活動に対する意識が異なることがうかがえる。紙芝居上演の特性である集団の一体感や双方向性のコミュニケーションが、関係の構築にプラスの作用をもたらしたかどうかは、本調査では判断ができないが、コミュニケーションを活性化させた可能性は考えられる。

また、「職員の人も観客の人でもウェルカムで喜んで待っていてくれて、反応が良い」（高齢者ボランティアD）といった発言があるように、定期的と同じデイサービスを訪問することで、高齢者ボランティアと利用者の関係が構築され、紙芝居上演を行うボランティア活動を通じて相互に信頼関係が生まれていることが示唆された。高齢者ボランティアが紙芝居上演を行うことで、利用者と介護スタッフに喜ばれ、自身の喜びにつながる関係がうかがえる。このように、高齢者ボランティアにとって介護施設の紙芝居上演は、自助・互助の要素を含んだ高齢者ケアと考えられる。

さらに、介護施設のスタッフからも、高齢者ボランティアの活動は歓迎され、介護施設に

におけるレクリエーションの資源として評価されていることが明らかとなった。また、介護施設のスタッフが、高齢者ボランティアの活動の目的や意義を理解して活動を支援している様子も示された。このことから、単発の紙芝居上演もボランティア活動としての意義はあるが、介護施設との関係という観点においては、定期的に訪問することで関係が構築され、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動として有用性が高まることが示唆された。

5.3.3 高齢者ボランティアの紙芝居上演をめぐる課題、公共図書館との関係

高齢者ボランティアへのインタビュー調査の結果から、デイサービス等の介護施設を利用しない高齢者の居場所と、高齢者と地域をつなぐネットワークの不足が指摘されていた。高齢者ボランティアAは、居住地域において、自宅に暮らす独居の高齢者の居場所が不足しているという実感を持ち、介護施設を利用しない高齢者をターゲットに紙芝居上演の会を立ち上げていた。さらに、高齢者ボランティアAは、上演に集まる高齢者が紙芝居を楽しむだけでなく、より関係を深める希望を持って集まるのではないかと考えていた。しかし、自分たちの力だけで高齢者の要望を理解し活動を広げることは、ボランティアの高齢化と活動の維持を考えると、容易に実行できない現状である。高齢者ボランティアEも、居住地域に居場所のない高齢者がいることに問題意識を持っており、単独で紙芝居をツールにして1人で戸外にいる高齢者とコミュニケーションを取っていた。これらのインタビュー調査の結果から、介護施設の利用がない高齢者は、地域に定期的に集う居場所が不足している、もしくは持っていない可能性が示唆された。

また、高齢者ボランティアFによると、居住地域に近い都営住宅では独居の高齢女性が多く存在しており、自由な行動を好みながら他者との交流も求めており、定期的なお茶会を開いていた。お茶会で行う高齢者ボランティアFの紙芝居上演は、近所の高齢者同士のコミュニケーションの場におけるレクリエーションとして機能しており、地域包括ケアシステムにおける自発的な自助と互助の役割を果たしている。しかし、会の参加者の高齢化により、定期的な交流の場を存続することが困難となっていた。参加者は、地域の高齢者をつなぐネットワークを求めているが、情報が不足しており実際の行動には至らない現状である。今後、高齢者の自発的な居場所づくりが、高齢者の身体機能が低下しても持続していけるように、自宅で暮らす高齢者と地域をつなぐコーディネーターの役割と、高齢者が地域の必要な情報にアクセスできる方法を構築し、住民に周知していく必要がある。

さらに、ボランティア活動の場所に関して、高齢者ボランティアAはバリアフリーで無料の活動の場を求めているが、現実には見つかっておらず、そのため、今後の体力の低下によっては活動の継続を断念することも考えていた。このことから、高齢者の居場所づくりやボランティア活動の意欲があっても、高齢者の老いに対応した活動をシームレスに継続するための場所と、場所を提供するネットワークも構築されていない現状がうかがえる。地域の担い手としての高齢者の社会参加活動を活かすためには、元気な高齢者の自主的な互助の活動だけではなく、体力が落ちていったときに活動を後押しする多様なネットワークと場

所が必要であると考える。

高齢者に向けた上演の課題として、複数の高齢者ボランティアから観客である高齢者の居眠りであることが示された。演技手が、高齢の観客が眠らないような演技方を課題とするのか、観客のありのままの状況を受け入れるのか、インタビュー調査の結果では両方の意見があった。居眠りさせない工夫を演技手が行う場合、演技手と観客による双方向のコミュニケーションが生まれ、演技手と高齢者が作品の楽しさを共有することが可能になる。一方、高齢者の居眠りを受け入れることは、双方向のコミュニケーションを通じて作品を共有する楽しさは薄まるが、上演の場を共有することは可能である。

また、認知症の人や紙芝居に抵抗感を持つ人に対して演じる工夫や困難さの発話もあった。集団で場を共有する紙芝居上演の一体感は、認知症の人に集団の安心感をもたらす認知症ケアの可能性を含んでおり、認知症の人にも上演の場と紙芝居を楽しめることが示唆された。また、紙芝居を演じられることに抵抗感を持つ高齢者は、子ども扱いされているという思いから、拒絶反応を示していると考えられる。しかし、高齢者ボランティアは、演じる対象である高齢者に配慮と気遣いをもって、観客である高齢者の視点に立って、作品選定を行い、高齢者に紙芝居を演じていた。その結果、観客である高齢者に受け入れられ喜んでもらうことで、高齢者ボランティアのやりがいと喜びも増していた。

さらに、インタビュー調査の結果から、紙芝居全般の出版に対する要望と、紙芝居を所蔵し貸出しを行う公共図書館との関係が明らかとなった。また、高齢者ボランティアによると、紙芝居は演技手が望むような作品がなかなか出版されないということであった。紙芝居の出版に関しては、出版社の意識と紙芝居の演技手である高齢者ボランティアの間に、出版を望む作品に齟齬があることが示唆された。紙芝居は演技手の上演によってはじめて作品として完成することから、出版社はより紙芝居の演技手の声を踏まえた出版を検討する必要がある。

また、高齢者ボランティアの活動にとって公共図書館の重要性が明らかとなった。一般的に絵本のように書店に並ばない紙芝居において、公共図書館の存在は、高齢者ボランティアが実際に手に取って作品の内容を確認できる有用な場として認識されていた。そのため、公共図書館が資料の利活用の実際を理解し、利用者が活用しやすい配架を行う必要がある。さらに、利用者のニーズを把握できるような取り組みを行い、司書の専門的な知識を加味したバランスの良い選書が求められる。また、インタビュー調査から、公共図書館には資料の貸出しだけでなく、認知症への理解や地域社会の文化の発信、高齢者を含む住民の活力を生み出す場としての期待が示された。このように、公共図書館は地域包括ケアシステムのネットワークとしての役割と可能性があると考えられる。

5.3.4 高齢者ケアとしての紙芝居上演の役割

本項では、高齢者ボランティアのインタビュー調査の結果から、高齢者ボランティアにおける紙芝居上演の目的と意義、やりがいに関するまとめと考察を述べる。高齢者を対象にし

た高齢者ボランティアの上演活動の目的と意義、やりがいに関する内容から、互助としての社会貢献、自助としてのセルフケア、といった高齢者ボランティアにおける紙芝居上演の役割が示された。

まず、互助としての社会貢献の役割は、介護施設の利用がない高齢者の居場所づくりである。自宅で暮らすデイサービス等の利用がない高齢者が、日中に居場所がないという問題意識が複数のボランティアの発話にあった。2025年には団塊の世代が全て後期高齢者となることから、高齢者の一人暮らしや高齢者のみ世帯が一層増加することが予測される。特に近所付き合いが少ない都市部では、高齢者が地域の担い手として主体的に高齢者の居場所づくりを行うことが重要となってくる。

次に、高齢者が地域の介護現場に参入して、介護施設のレクリエーションの資源となって上演活動を行うことである。高齢者ボランティアが、紙芝居を演じることで高齢者を喜ばせ、自分も喜びを感じて活動を行うことは、互いにケアしあう関係を構築する高齢者ケアと考えられる。また、高齢者ボランティアが高齢者に演じることは、高齢者同士で理解できる価値観を共有し、上演を通じて一体感を共有することで、互いの自己肯定感を高めることが示唆された。

さらに、介護現場の上演活動において、高齢者ボランティアは、高齢者ボランティアより年長の高齢者と生じる世代間ギャップを、想像力で埋める努力を行っていた。この行為は、高齢者に配慮、関心、気遣いをもって接する高齢者ケアと考えられる。例えば高齢者と言っても、70歳と90歳の間には20歳という年齢差があることを考えると、幅広い年代の高齢者ボランティアが演じることで、多様な高齢者と意思の疎通が取りやすくなると思われる。そして、60代、70代の高齢者ボランティアが、現役世代に多様な高齢者の背景や価値観を伝えていく必要があると考えられる。

「演じに行くのは、高齢者が喜んでくれるから」（高齢者ボランティアE）、「人に喜んでもらえるのは自分も嬉しいし、喜べる。自己満足じゃ続かない」（高齢者ボランティアC）といった発話にあるように、高齢者ボランティアがセルフケアの主体として、紙芝居上演を行うことは、自己のウェルビーイングの維持・向上につながることを示唆された。紙芝居を演じるという行為は、自己表現の一つの方法であり、高齢者ボランティアは熱心に練習しつつ、自己に合った頻度や方法を選択し、上演活動に取り組んでいた。そして、紙芝居を演じることで観客と場を共有し一体感を得て、他者につながることを高齢者ボランティアのウェルビーイングに良い影響を与えていると考えられる。

また、自助としてのセルフケアの役割として、「紙芝居のボランティア活動が自分にとって社会と他者につながる唯一の窓」（高齢者ボランティアB）といった発話からみられるように、紙芝居上演をはじめとした活動と人間関係の広がり、特に退職後の高齢者ボランティアにとって重要な社会との接点である。さらに、上演活動は、演じ手のメッセージを伝える場を提供していた。このように、高齢者が社会参加活動を行うことは、活動を媒介として自己を表現し、他者に認められることで、社会とつながる実感を得ることがうかがえる。

5.3.5 紙芝居上演の作品選定における自己の納得感

高齢者ボランティアは、作品選定を行う過程において、作品の中に込められたメッセージを理解することと、作品をどのように利活用して観客に届けるかを考える中で、自己の納得感を得ていた。作品選定は、演じ手の価値観と個性が反映されていることから、作品のテーマを通じて自分の内面と向き合うことで自己理解が進んでいくと思われる。このように、作品選定を通して自己の納得感を獲得していく過程には、セルフケアとしての自助の役割があると考えられる。

また、高齢者に向けた紙芝居上演においては、第4章で高齢者への有用性を示した高齢者向け紙芝居が利活用されていた。高齢者ボランティアEからは、戦争をテーマにした高齢者向け紙芝居の有用性が報告された。高齢者ボランティアへのインタビュー調査の結果から、高齢者の長い人生の中には、高齢期を迎えても消化しきれない感情があり、高齢者向け紙芝居の上演によってそのような感情にアプローチする可能性があることがうかがえた。人間の複雑な感情は、人と人の直接的なコミュニケーションよりも、紙芝居という共感のメディアを挟むことで、人の内面に作用する可能性が示唆された。

高齢者に向けた紙芝居上演の作品選定においては、必ずしも高齢者向けだけが有用ではなく、既存の子ども向けと言われる作品にも高齢者に向けて演じられる作品もあり、人の心に届くメッセージには普遍性があると考えられる。紙芝居の作品においても、子どもも大人も楽しめる世代間交流が可能な作品が必要であり、共生という視点が求められる。

5.3.6 自己表現としての紙芝居制作

高齢者ボランティアの内の4名は、手づくり紙芝居を制作する過程を通して、人を喜ばせることと自己表現、すなわち互助と自助を同時に行っていた。既存の出版紙芝居から作品のテーマを理解し、自己の納得感を得る作品を演じることに比べて、目の前の人に活用できる作品、自己の伝えたいテーマを込めた作品を直接、観客に演じることが可能である。また、出版紙芝居とは異なり、自由で制約の無い自己表現が可能となる。さらに、高齢者ボランティアの創作意欲を満たし、演じる対象にダイレクトに自身の想いを届けられることから、上演活動の達成感が高まることがうかがえる。

一方、出版紙芝居には作者の想定を超えた活用や人間関係の広がりが期待できる。つまり、どちらも高齢者の自己表現として有用な取り組みである。また、今後は、印刷技術と方法の向上により、出版紙芝居と手づくり紙芝居を別の媒体と明確に分けずに制作に取り組むことが可能であると考えられる。高齢者の表現活動としての紙芝居制作は、従来の取り組みに新たな方法を加えながら、活動の可能性を広げる取り組みが期待される。

5.3.7 高齢者と紙芝居の親和性と展望

インタビュー調査の結果から、高齢者と紙芝居の親和性を考える際に、街頭紙芝居の思い出が影響することが明らかとなった。69歳から77歳の高齢者ボランティア4名は、街頭紙

芝居体験が子どもの頃の郷愁を誘い、自身の楽しかった思い出として強く脳裏に植え付けられていることがうかがえる。高齢者ボランティアにとって、子どもの頃の街頭紙芝居の思い出が、現在の紙芝居上演と紙芝居の制作等の原動力の一部となっていることが示唆された。

一方、63歳と64歳の高齢者ボランティアD, Cは街頭紙芝居を観た経験はない。両名とも地域活動や子どもを対象にした絵本と紙芝居の制作から、活動の対象を広げていき、高齢者に向けた紙芝居のボランティア活動を行うようになった。高齢者ボランティアDより、70代以降の高齢者が紙芝居に掛ける熱意について驚きを持ったという発話があった。インタビュー調査の結果から、街頭紙芝居を観た高齢者の世代と紙芝居の親和性は指摘されている。では、次の世代の高齢者に対しての有用性はあるのだろうか。複数の高齢者ボランティアの発話から、次の世代の高齢者も含め、普遍的なメディアとしての可能性があるという見解が示された。

また、たかが紙芝居という趣旨の高齢者ボランティアE, Fの発話からは、メディアの力を過信しない謙虚さがうかがえる。演じることで他者にメッセージを伝えることが可能な紙芝居が、目の前の人とつながるコミュニケーションメディアとして、どのように利活用されていくかは、扱う人間次第ということである。

第5章では、高齢者ボランティアによる紙芝居を活用した社会参加活動に着目し、2000年の介護保険制度施行前後から始まった高齢者に向けた紙芝居上演に焦点をあて、活動の現状と課題、高齢者ボランティアの意識や行動を明らかにした。高齢者を対象にした紙芝居上演を行う高齢者ボランティア6名に半構造化インタビュー調査を行い、その調査結果と考察を述べた。第1節では、高齢者ボランティアへのインタビュー調査の概要を述べた。第2節では、インタビュー調査の結果を述べ、第3節で結果の考察を述べた。インタビュー調査の結果から、高齢者ボランティアの紙芝居上演は、介護施設を中心に持続的なレクリエーションの資源として機能していた。また、高齢者ボランティアの紙芝居上演は、地域の介護施設や高齢者と関係を構築し、高齢者ボランティア自身のやりがいやウェルビーイングの維持・向上に貢献していることが示唆された。また、高齢者ボランティアにとって、公共図書館は資料の提供を通して活動の継続を支える、重要な役割を担っていることが明らかとなった。

¹ 石山幸弘. 紙芝居文化史：資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, p.174.

² 厚生労働省. “第一章高齢化の状況：第二節高齢期の暮らしの動向(2)2 健康・福祉”. 平成30年版高齢社会白書. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2018/html/gaiyou/s1_2_2.html, (参照 2020-04-15).

-
- ³ 内閣府. “令和元年度 高齢者の経済生活に関する調査結果”. 内閣府. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/kenkyu.html>, (参照 2020-08-09).
- ⁴ 川喜田二郎. 発想法：創造性開発のために. 改版, 中央公論新社, 2017, 230p.
- ⁵ 上野千鶴子. 情報生産者になる. 筑摩書房, 2018, 381p.

6.地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動

本章では、第2章から第5章までの内容を踏まえ、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性を論考する。そのうえで、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の検討を行う。

6.1 地域の担い手としての高齢者の役割と可能性

第5章において、紙芝居を活用した社会参加活動を行う高齢者のインタビュー調査の結果と考察を述べた。本章では、第2章から第5章の内容を踏まえ、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性を論考する。本研究における高齢者ボランティアへのインタビュー調査結果から得たカテゴリーをもとにKJ法^{1,2}を参考に分析を行った結果、社会参加活動を通じた高齢者ボランティアの役割と可能性は、「居場所づくり」「関係づくり」「自己表現」という結果となった。本節では、第5章の知見に2章から4章の内容も踏まえ、居場所づくり、関係づくり、自己表現、それぞれの内容について述べる。

(1)持続可能な高齢者ケアとしての居場所づくり

高齢者ボランティアは、居住地域において、介護施設の利用がない自宅で暮らす高齢者の居場所づくりを行っていた。高齢者ボランティアAの行っている紙芝居上演は、高齢者が自由に参加して場の一体感を味わえる、地域における高齢者の持続的な居場所となっていた。また、高齢者ボランティアは、介護施設における紙芝居上演において、双方向のコミュニケーションを通して、高齢者が一体感を味わう場づくりを行っていた。

高齢者ボランティアの中には、介護施設の利用がない自宅で暮らす高齢者のための、日中を過ごす居場所が少ないという問題意識を持つものがいた（高齢者ボランティアA,E,F）。高齢化により生じる問題として、高齢者の一人暮らしの増加による高齢者の社会的孤立がある。平成26年度の高齢社会白書によると、60歳以上の一人暮らし世帯では、会話の頻度（電話やEメールを含む）が「2～3日に1回」以下の者も多く、男性で28.8%、女性で22.0%を占めている³。高齢者ボランティアの問題意識は、日本における高齢者の社会的孤立の現状を反映している。また、元気な高齢者は自立した生活を送っていると想定されるが、自立した生活が孤立と無関係かどうかは判断できない。

また、高齢者ボランティアの中には、より居住地に近く小規模なコミュニティによる、自由な高齢者の居場所が必要だとする考えがあった（高齢者ボランティアA,F）。第3章で地域における高齢者の居場所として挙げたふれあい・いきいきサロンは、気軽で無理なく通うことができ、体操やレクリエーション、趣味活動等の多様なプログラムが行われ、高齢者のつながりづくりの場として機能している⁴。しかし、高齢者ボランティアのインタビュー調査から、多様な高齢者が全て既存の居場所に通える環境と意向を持つとは限らない可能性が示唆された。

さらに、居住地に近い自由な高齢者の居場所づくりにおいて、参加する高齢者による互助だけでは、参加者の老いにより居場所の維持が困難になるという指摘があった（高齢者ボランティア F）。インタビュー調査の結果から、複数の高齢者ボランティアが、老いと折り合いながらどのように活動を維持していくかを、高齢者の社会参加活動の課題として挙げていた。この結果は、高齢者の読み聞かせを行う世代間プログラムの先行研究において、健康問題が高齢者のボランティア活動の継続に影響を与えるという点で同じ傾向が見られた⁵。

本研究におけるインタビュー調査の結果から、地域における多様で自由な高齢者の居場所へのニーズと、居場所を維持していくことへの課題を示した。この結果は、以下に挙げる先行研究で指摘された、高齢者の志向性の個人化、ふれあい・いきいきサロンの担い手の後継不足という知見と一致する。ふれあい・いきいきサロンには、参加者に何らかの利用制限があることが報告され⁶、運営の課題として、担い手の後継不足と運営に関する義務感・負担感が指摘されている⁷。さらに、都市部の高齢者においては、1人で楽しむ志向性の個人化をはじめとする複合的な背景から、高齢者の社会参加活動が活発とは言いがたい現状にある⁸。また、高齢者の社会参加活動において、個人で余暇を楽しむ選択肢が増えた可能性が示唆されている⁹。

地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動による居場所づくりは、より身近なコミュニティの単位で形成される、多様な居場所の選択肢が求められている。高齢者が自身の状況に合った居場所づくりを行い、高齢者同士が緩くつながることで、互いをケアし合う場が増える可能性がある。本研究で着目した紙芝居上演は、演じ手と観客が揃ってはじめて作品が完成されるため、演じ手だけでなく観客も高齢者ケアとしての社会参加活動を行っていると考えられる。このように高齢者の役割を固定しない社会参加活動の捉え方は、高齢化社会において重要な視点である。そして、さまざまな理由により高齢者の居場所の維持が困難となったときのために、高齢者同士の活動をサポートする仕組みづくりが必要になると考えられる。

(2)社会参加活動を通して構築する関係づくり

高齢者ケアとしての紙芝居上演は、高齢者の自発性を引き出し、コミュニケーションを生み、他者と自分自身との関係を構築する、地域包括ケアシステムにおける有用な社会参加活動である。高齢者ボランティアにおける高齢者ケアとしての紙芝居上演は、遊びの自発性とリハビリテーションが結びついた遊びリテーションとして機能している。また、遊びの原動力である自発性が、高齢者の笑顔と生きる意欲を生む¹⁰と考えられる。

また、高齢者ボランティアは、紙芝居を活用した社会参加活動を通して、短期的長期的に人と人との関係づくりを行っていた。本研究における高齢者ケアは、高齢者に対して配慮、関心、気遣いをもって接し、ケアする者とケアされる者との間に構築される関係である、と定義している。高齢者ボランティアによる紙芝居上演は、介護現場を中心に、レクリエーションとしての社会資源としてだけでなく、高齢者ケアとしての関係づくりを行う役割を

担っていると考えられる。

さらに、高齢者ボランティアは、地域において自分らしく、可能な限り自由に社会参加活動を行うことで、自助の主体となっている。高齢者ケアとしての紙芝居上演において、演技手である高齢者ボランティアは、観客の高齢者に喜んでもらうことで自分も喜びを感じ、自己有用感と社会貢献意識を得ると考えられる。つまり、高齢者ボランティアは、紙芝居上演の場と上演活動の準備や学習を通して、自分自身との関係を構築し、セルフケアとしての自助を行っていると考えられる。

そして、高齢者ボランティアは、高齢者を対象にした紙芝居上演において、作品と観客である高齢者をつなぐ媒介者の役割を担っている。演技手が目の前の観客である高齢者に対して、配慮、関心、気遣いを持って接することは作品を通じたコミュニケーションであり、演技手と観客、観客同士の共感を生む。紙芝居を読んで聞かせるのではなく、演じることによって演技手も共感の中で集団の場の一体感を共有することになる。

また、高齢者ボランティアが高齢者に紙芝居上演を行うことは、高齢者のウェルビーイングの維持・向上に貢献する可能性が示唆された。高齢者ボランティアのインタビュー調査から、高齢者同士のコミュニケーションにおける自己肯定感の向上がうかがえる。高齢者には一人一人生きてきた長い道程があり、高齢者同士のコミュニケーションは、その重みに対して実感および共感を持って受け入れることが可能であると思われる。

さらに、高齢者ボランティアは、自分より年長の高齢者と現役世代をつなぎ、多様な高齢者理解の促進に貢献する可能性が示唆された。高齢者ボランティアは、介護現場のレクリエーションとしての紙芝居上演を通して、高齢者ボランティアより年長の高齢者との間に生じる世代間ギャップを、想像力をもって埋めていた。特に 60 代、70 代の高齢者ボランティアは、現役世代に多様な高齢者の背景や価値観を伝達するという役割があると考えられる。

(3)自己表現としての社会参加活動

紙芝居上演を行う高齢者ボランティアにとって、演じるという行為は、日常を生きる自分から解放され、異なる自分になる自己表現の一つである。演技手である高齢者ボランティアによって、作品のテーマへの理解と納得感が異なることから、作品の演技方、表現の仕方も多様である。手づくり紙芝居においては、自分の伝えたいメッセージを直接、他者に表現することが可能である。

また、高齢者が社会参加活動を通して自分の体験を伝えていくことは、自身の体験と向き合うセルフケアとしての自己表現であり、高齢者理解の促進にもつながる、高齢者の重要な役割である。さらに、高齢者ボランティアはそれぞれのボランティア活動で得た知識と経験から、人に教えるという行為を行っていた。上演活動を継続するために自身で学習を続けスキルを磨き、教える相手と共に学ぶことは、互助と自助の役割を担っていると考えられる。

紙芝居は、絵本や書籍のように 1 人で読んでも楽しさや喜びは味わえず、目の前の人のために演じて喜んでもらうことで、演技手の喜びと生きがいづくりに寄与することができ

る。斎藤は、高齢者のボランティア活動の意味とは、ボランティア活動を通じて役に立つ自分を実感し、自分の存在感を感じることで自己実現が可能になると示している¹¹。新崎は、高齢者のボランティア活動は、生きがいを生む自己実現の装置としての働きがあると指摘している¹²。これらの先行研究の知見は、本研究における高齢者ボランティアが、社会参加活動を通して自己理解を深め、自己を表現することと、他者に認められることを生きがいとしている現状と一致する。

高齢者が自分の関心と状況において可能な社会参加活動を選択し、社会参加活動が自身のウェルビーイングの維持・向上につながることを実感し、一人一人がよりよく生きるための社会参加活動を行っていく必要がある。本研究における高齢者ボランティアのインタビュー調査において、自己表現とは好きなことを見つけることという発話があった(高齢者ボランティアF)。また、社会的孤立を防ぐためには、自分が生きる地域社会においてネットワークを構築する社会参加活動が効果的であることが示されている¹³。

本研究における高齢者ボランティアの紙芝居を活用した社会参加活動は、高齢者ボランティアにとって社会とつながる窓であり、地域の学校や介護施設、公共図書館等とつながり、地域住民とつながり、自分自身とつながる、他者と自分との関係を構築する高齢者の営みであると考えられる。

6.2 よりよく生きるための高齢者の社会参加活動

第2節では、本研究におけるこれまでの調査結果の考察から、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動のあり方を検討する。地域包括ケアシステムの概念である、住み慣れた地域で可能な限り自分らしい暮らしを続けるために、高齢者の社会参加活動のあり方を3つのポイントにまとめた。まず、1. 老いと折り合いながらシームレスに社会参加活動を継続することである。高齢者の身体・認知機能は、平均寿命の延伸によりその時どきでそれぞれに変化すると考えられる。そのため、高齢者が各自の老いの過程において身体・認知機能に合わせた活動を行い、支える側・支えられる側という関係を固定しない考えを持つことが必要である。

次に、2. 自分の好きなことで他者を喜ばせる社会参加活動を行うことである。高齢者自身の生きがいとなるような活動を行いながら、他者を喜ばせることによって、高齢者のウェルビーイングの維持・向上が考えられ、よりよく生きられる可能性がある。本研究で着目した高齢者の紙芝居上演の演じ手は、観客と作品を通して共感し、観客に喜んでもらうことで生きがいを得ている。そして、紙芝居上演においては、演じ手も観客も、互いを喜ばせ合う高齢者ケアとしての社会参加活動であるという捉え方は重要な視点である。

最後に、3. 可能な限り、自分のペースで自由に社会参加活動を行うということである。これは、個別に行動するという意味ではなく、社会参加活動の内容と個人の志向に合わせて、1人、複数、グループを選択できるような地域のネットワークを利用して、社会参加活動を行うということである。そして、個人の自発性にもとづき活動のスタイルを選択し、他者と

支え合うことによって、高齢者が住み慣れた地域でできる限り長く、自分らしく暮らす可能性が高まると考えられる。

先行研究において、高齢者の社会参加活動には社会的責任の大きい順に 1. 就労 2. ボランティア活動 3. 自己啓発・生涯学習（趣味・稽古ごと）・保健活動 4. 友人・隣人等との近所付き合い 5. 要介護期の通所サービス（デイサービス）利用、という健康度に応じた5つのステージがあることが示されている^{14, 15}。老いは高齢者の生活の中にあり、身体・認知機能の低下は人それぞれで、その変化の過程も多様である。

また、高齢者の志向の多様化により、要介護期における高齢者の生活においても、さまざまな選択が想定される。そして、少子高齢化・人口減少社会の現状を鑑みれば、全ての高齢者が介護期において介護施設を十分に利用できるとは限らない。今後は、現行の通所サービスだけでなく、地域包括ケアシステムのネットワークとされる自宅から30分以内の範囲において、高齢者が社会参加活動を行い、開かれた高齢者の居場所を増やす必要があると考えられる。

本研究における高齢者向け紙芝居の編集者・監修者へのインタビュー調査と高齢者ボランティアのインタビュー調査から、高齢者向け紙芝居の展望として、地域と人と介護をつなげる、地域に介護を開いていくツールとしての可能性が挙げられている。高齢者ボランティアの紙芝居上演は、既に介護施設において有用な社会資源であるが、今後、地域に開かれた居場所が増えることで、高齢者ボランティアが上演を通じて地域の人たちと介護をつないでいくことが可能になる。

紙芝居を活用した高齢者の社会参加活動の役割として、地域住民における認知症への理解の促進がある。紙芝居を活用して認知症の啓蒙を行うのではなく、認知症の人も含めて紙芝居上演の場を共有することが、認知症の人および認知症への理解を醸成する可能性があると思われる。また、高齢者の価値観や生きてきた時代を知ることは、高齢者の人生について想像力を持って理解を試みることであり、高齢者とより良い関係を構築する高齢者ケアであるといえる。

また、高齢者ボランティアが高齢者に紙芝居を演じることは、高齢者同士のコミュニケーションであり、高齢者の自己肯定感とウェルビーイングの維持・向上に良い影響を与えることが示唆されている。高齢者が高齢者ケアとしての紙芝居上演を行い、演じ手と観客が場を共有し相互にケアし合うことが、高齢者の相互の社会参加活動であるという捉え方は先行研究において見られない知見であり、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の選択肢と可能性を広げ、地域のネットワークの構築を促進する一助となると考えられる。

加えて、本研究において、高齢者ボランティアの社会参加活動の意義として、現役世代の高齢者理解を促進する役割を担っていることが示唆された。少子高齢化・人口減少社会における高齢者の長寿化により、高齢者の年齢の幅も拡大すると思われる。そのため、現役世代の高齢者理解を促進する「関係をつなぐ」高齢者の社会参加活動の役割が増すと考えられる。

これまでの本研究における内容から、高齢者ボランティアによる社会参加活動の目的に、相互の高齢者ケアとしての社会参加活動という視点を加えることは、少子高齢化・人口減少社会における高齢者の社会参加活動を考えるうえで、重要な視点であると考えられる。

第6章では、第2章から第5章までの内容を踏まえ、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性を論考した。そして、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動のあり方の検討を行った。

第1節では、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性の考察を行った。地域の担い手としての高齢者の役割は、大きく分けて居場所づくり、関係づくり、自己実現であった。地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動による居場所づくりは、多様な選択肢が求められている。そして、高齢者の社会参加活動が困難となったときに、高齢者の活動をサポートする仕組みづくりが必要である。

また、高齢者ケアとしての紙芝居上演は、高齢者の自発性を引き出し、コミュニケーションを生む、他者と自分自身との関係を構築する、地域包括ケアシステムにおける有用な社会参加活動であることが明らかとなった。さらに、高齢者が自分の関心と状況において可能な社会参加活動を選択し、社会参加活動が自身のウェルビーイングの維持・向上につながることを実感できるような、社会参加活動を行う必要があることを指摘した。

第2節では、第1節の論考と、本研究で得た知見の内容全体を踏まえ、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討した。本研究におけるこれまでの考察から、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動は、老いと折り合いながらシームレスに活動を継続し、自分の好きなことで他者を喜ばせ、可能な限り自分のペースで自由に活動を行うことであると示した。

また、本研究における高齢者向け紙芝居の編集者・監修者へのインタビュー調査と高齢者ボランティアのインタビュー調査から、高齢者向け紙芝居の展望として、地域と人と介護をつなげる、地域に介護を開いていくツールとしての可能性を述べた。そして、高齢者が高齢者ケアとしての紙芝居上演を行い、演じ手と観客が場を共有し相互にケアし合うことは、高齢者の相互の社会参加活動であると指摘した。本研究における知見は、地域包括ケアシステムにおける多様な高齢者の社会参加活動の選択肢と可能性を広げ、地域のネットワークの構築を促進する一助となると考えられる。

次章では、研究のまとめと今後の課題を述べる。

¹ 川喜田二郎. 発想法：創造性開発のために. 改版, 中央公論新社, 2017, 230p.

² 上野千鶴子. 情報生産者になる. 筑摩書房, 2018, 381p.

³ 内閣府. 平成26年版高齢社会白書. 高齢化の状況, 2014, p.46-47.

-
- 4 社会福祉法人全国社会福祉協議会地域福祉部. “社会福祉協議会における 助け合い活動の推進”. 生活支援コーディネータースキルアップ等支援事例説明会. 2010-10-26. <https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/houkatsu/documents/zensyakyou.pdf>, (参照 2020-08-08).
- 5 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
- 6 森常人. 「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察. 関西外国語大学研究論集. 2014, (100).
- 7 高野和良, 坂本俊彦, 大倉福恵. 高齢者の社会参加と住民組織: ふれあい・いきいきサロン活動に注目して. 山口県立大学大学院論集. 2007, (8), p.129-137.
- 8 片桐恵子. サードエイジ研究の射程と課題. 老年社会科学. 2018, 40(1), p.67-72.
- 9 小林江里香. 日本の高齢者の社会参加は進んだか: 高頻度参加層の拡大と非参加層の縮小の視点から. 老年社会科学. 2015, 36(4), p.423-432.
- 10 三好春樹. “はじめに”. 完全図解 遊びリレーション大全集. 土居新幸編著, 三好春樹監修. 講談社, 2017, p.2.
- 11 斎藤ゆか, 藤原佳典, 倉高正高編著. “シニアボランティアの活躍”. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 大修館書店, 2016, p.29.
- 12 新崎国広. “人と人とのかかわり”. ボランティア論: 「広がり」から「深まりへ」. 柴田謙治, 原田正樹, 名賀亨編. みらい, 2010, p.83-84.
- 13 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, p.11-12, 216-217.
- 14 藤原佳典. 高齢者のシームレスな社会参加と世代間交流: ライフコースに応じた重層的な支援とは. 日本世代間交流学会誌. 2014, 4(1), p.17-23.
- 15 藤原佳典. “生活機能に応じた社会参加活動の枠組み”. 藤原佳典, 倉岡正高編著. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 大修館書店, 2016, p.7-8.

7.おわりに

本章では、本研究のまとめと今後の課題について述べる。

7.1 研究のまとめ

本研究の目的は、紙芝居を活用して高齢者ケアを行う社会参加活動に着目し、紙芝居の演じ手である高齢者に焦点を当て、活動の現状と課題を明らかにし、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討することである。そこで、研究目的を達成するために3つの研究課題を設定した。まず、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の現状を明らかにするために、文献調査を行った。次に、高齢者ケアとしての高齢者の社会参加活動の現状と課題を明らかにするために、文献調査とインタビュー調査を実施した。そして、紙芝居を活用して社会参加活動を行う高齢者の目的や意義、現状と課題等を明らかにするために、高齢者ボランティアを対象とするインタビュー調査を行った。これらの結果を踏まえ、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性を考察し、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動のあり方を検討した。

第1章では、世界で最も高い高齢化率で少子高齢化が進む日本の問題として、社会を支える担い手の不足を取り上げ、日本の少子高齢化・人口減少社会の背景を概観した。そして、少子高齢化・人口減少社会に対応する国の施策として2025年を目途に構築を推進している「地域包括ケアシステム」の概要を述べた。また、地域包括ケアシステムの推進のために、元気な高齢者の社会参加活動が求められており、地域の担い手として貢献できる高齢者の現状を示した。さらに、本研究で着目する高齢者の社会参加活動として紙芝居に関する活動を取り上げ、高齢者ケアの観点から活動の目的や可能性を明らかにする研究の必要性を指摘した。そして、研究目的と先行研究を述べ、研究目的を達成するための研究課題と研究方法、本論文の語句の定義と構成を述べた。

第2章では、少子高齢化・人口減少社会の課題である、社会を支える担い手の不足に対して、現役世代と高齢者が互いに支え合う関係が求められることから、高齢者の社会参加活動の必要性を述べた。また、高齢者の社会参加活動を促進する現状として、高齢者の身体機能の若返りと健康寿命の延伸が見られた。さらに、高齢者の一人暮らしが増加傾向にあり、高齢者が社会的孤立を防ぐには、地域社会において社会参加活動を行うことが効果的であることを述べた。

そして、地域包括ケアシステムの理念に加え、地域包括ケアシステムの提供には、介護、医療、予防、住まい、生活支援・福祉サービスという5つの構成要素と自助・互助・共助・公助の役割が必要とされていることを述べた。加えて、2025年以降も介護需要は増加することから、高齢者のシームレスな社会参加活動を目指す必要性を述べ、高齢者が増大する都市部では、高齢者の社会参加率が低く減少傾向にあることを指摘した。そして、地域の担い手として想定される高齢者のボランティアは、60歳代から70代前半の男女ともに約3割

前後がボランティア活動を行っていた。また、自治体がボランティア講座を開催しても、実践につながらないケースがあることを報告し、学んだ経験を誰かのために活かす活動につなげる必要性を述べた。

第3章では、まず、本研究における地域包括ケアシステムの自助・互助の捉え方について論じた。次に、高齢者の通いの場として全国に展開されている「ふれあい・いきいきサロン」が人間関係を豊かにしていく地域づくりとして機能している現状を述べた。また、高齢者ボランティアにおける、学校で子どもに読み聞かせを行う世代間交流プログラムは、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動として機能していた。加えて、世代間交流プログラムは、高齢者ボランティアのセルフケアと地域のネットワークの構築に貢献していた。さらに、健康課題を持つ高齢者ボランティアの活動の継続について、高齢者ボランティア自身のボランティア観・老いへの受容度・ボランティア仲間の支援に影響を受けていることが示された。

そして、本研究で着目する高齢者ケアとしての紙芝居上演が、主に介護現場におけるレクリエーションの一環として利活用されている現状を報告した。また、介護施設における、紙芝居を活用した高齢者ケアの取り組みとして、介護施設を利用する一人一人の高齢者を主人公にした「人生紙芝居」の実際を述べた。人生紙芝居は、紙芝居制作の過程で高齢者理解が進むことにより、主人公である高齢者の自己肯定感が向上し、介護職と高齢者の信頼関係が構築されていた。また、2009年から出版が始まった高齢者向け紙芝居は、介護現場のニーズに応じてボトムアップに出版され、高齢者ケアに利活用されていた。そして、高齢者紙芝居の前史では、現在の紙芝居に内包される特性として、街頭紙芝居と教育紙芝居の要素が見られた。加えて、高齢者向け紙芝居の特性にもつながる、コミュニケーションメディアとしての紙芝居の特性を述べた。

第4章では、高齢者向け紙芝居の出版に関する現状と意義および展望等を明らかにすることを目的としたインタビュー調査の結果と考察を述べた。高齢者向け紙芝居の編集者・監修者を対象とするインタビュー調査から、高齢者向け紙芝居は、紙芝居で介護できるという介護現場の実感に基づき、高齢者ケアのコミュニケーションメディアとして、介護職やボランティアによって活用されていることを報告した。また、高齢者向け紙芝居は回想の要素を含み、高齢者が楽しめて懐かしさを喚起するテーマが内包されていることを示した。そして、高齢者向け紙芝居は、紙芝居をきっかけにコミュニケーションを広げ、人と人との関係を構築するメディアであることが明らかとなった。

また、インタビュー調査の結果から、高齢者向け紙芝居の出版による波及効果として、公共図書館における社会参加活動の推進が見られた。一方で、公共図書館は、高齢者向け紙芝居の利活用の実態と有用性をより理解する必要があることを指摘した。また、介護現場において、介護職の新人教育に紙芝居上演が有用であることが明らかとなった。さらに、高齢者向け紙芝居の出版の目的として、定年後の男性が社会参加活動を行うきっかけとして活用されることが想定されていた。そして、高齢者向け紙芝居は、地域に介護の拠点を広げている

くツールとして活用される展望が示された。高齢者向け紙芝居は、地域・人・介護をつなげる有用なコミュニケーションツールである可能性が示唆された。

第5章では、高齢者ボランティアによる紙芝居を活用した社会参加活動に着目し、2000年の介護保険制度施行前後から始まった高齢者に向けた上演活動に焦点をあて、活動の現状と課題、高齢者ボランティアの意識や行動を明らかにした。そのため、高齢者を対象にした紙芝居上演を行う60代から70代の高齢者ボランティア6名に半構造化インタビュー調査を行い、その調査結果と考察を述べた。インタビュー調査の結果から、高齢者ボランティアの紙芝居上演は、地域の担い手として介護施設を中心に、持続的なレクリエーションの資源として有用であり、介護施設や観客である高齢者との関係を構築し、高齢者ボランティア自身のやりがいやウェルビーイングの維持・向上に良い影響を与えていた。

また、高齢者ボランティアの活動にとっては、公共図書館が活動の維持と推進に重要な役割を担っていることが明らかとなった。さらに、作品選定を通じた自己の納得感はセルフケアとしての自助の働きがあることを指摘した。そして、手づくり紙芝居という自己表現は、自分の伝えたいテーマを直接観客に伝えることで、高齢者ボランティアの達成感が高まることが示唆された。高齢者と紙芝居の親和性に関しては、街頭紙芝居を子ども時代に観た高齢者ボランティアにとって、紙芝居を活用した社会参加活動の原動力の一部になっていることがうかがえた。街頭紙芝居を観ていない高齢者ボランティアにとっては、自己表現を通して目の前の人とつながるコミュニケーションツールとしての特性が、紙芝居を活用した社会参加活動のモチベーションにつながることを指摘した。

第6章では、第2章から第5章までの内容を踏まえ、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性について論考し、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討した。第1節では、地域の担い手としての高齢者の役割と可能性の考察を行った。その結果、社会参加活動を通じた高齢者の役割と可能性は、大きく分けて居場所づくり、関係づくり、自己実現であった。また、高齢者が自分の関心と状況において可能な社会参加活動を選択し、社会参加活動が自身のウェルビーイングの維持・向上につながることを実感し、一人一人がよりよく生きるための社会参加活動を行っていく必要があることを指摘した。

第2節では、第1節の考察と、本研究で得た知見の内容全体を踏まえ、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動の検討を行った。本研究におけるこれまでの考察から、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動は、老いと折り合いながらシームレスに活動を継続し、自分の好きなことで他者を喜ばせ、住み慣れた地域で可能な限り自分のペースで自由に活動を行うことが必要であると示した。また、高齢者向け紙芝居の展望として、地域と人と介護をつなげるコミュニケーションツールとしての可能性を述べた。そして、高齢者が高齢者ケアとしての紙芝居上演を行い、演じ手と観客が場を共有し相互にケアし合うことは、高齢者の双方向の社会参加活動であることを明らかにした。

7.2 今後の研究課題

本研究の高齢者ボランティアへのインタビュー調査では、高齢者の社会参加活動の目的と意義等を深く理解するために、紙芝居に携わった経験年数が長く、高齢者に向けた上演経験が10年から15年ある人を対象とした。

今後は、上演を鑑賞する高齢者へのインタビュー調査を実施し、紙芝居を活用した高齢者の社会参加活動の意義に関して双方向の視点から分析を行い、高齢者の社会参加活動の検討をより充実させることが課題である。また、紙芝居の上演経験が浅いボランティアに調査を行う等、より幅広い高齢者ボランティアに調査を行うことで、高齢者の社会参加活動の現状と課題を包括的に捉えることも課題となる。さらに、高齢者ボランティアの上演活動への非参与観察を行い、直接活動を観察することで、高齢者ケアとしての紙芝居上演の全体像を把握することも必要である。

これらの研究課題を通して、より高齢者の視点に立った、地域包括ケアシステムにおける高齢者の社会参加活動を検討していくことを今後の課題としたい。

謝辞

本論文作成にあたり、2年間ご指導を賜った研究指導教員の呑海沙織先生に、心より厚く御礼申し上げます。また、貴重なコメントをいただいた副研究指導教員の綿拔豊昭先生にも、御礼申し上げます。

そして、インタビュー調査に快く応じてくださった調査協力者の皆さまには、多大なご協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げます。皆さまにインタビューさせていただいたことは、私にとってかけがえのない経験でした。これからも、皆さまの一層のご活躍を願っております。本当にありがとうございました。

また、私の選択を理解してくれた職場の上司と、励ましてくれた同僚に深く感謝します。良い職場に恵まれたおかげで、最後まで諦めずに頑張ることができました。研究室の修了生の方には分からないことを親切に教えていただき、誠にありがとうございました。

社会人同期の皆さまにも大変お世話になりました。特に2年目は、一緒に修了を目指した藤さん、西山さんには、社会人同士の想いを共有し支えていただきました。本当にありがとうございます。応援してくれた家族にも、いろいろと助けて貰いとても感謝しています。ありがとうございました。

参考文献

1. Laslett, Peter. The emergence of the third age. *Ageing and Society*. 1987, 7(2), p.133-160.
2. McGowan, Tara M. *Performing kamishibai: An emerging new literacy for a global audience*. Routledge, 2015, 214p., (Routledge research in education , 138).
3. McGowan, Tara M. *The kamishibai classroom: Engaging multiple literacies through the art of "paper theater"* . Libraries Unlimited, 2010, 99p.
4. Murayama, Yoh; Ohba, Hiromi; Yasunaga, Masashi; Nonaka, Kumiko; Takeuchi, Rumi; Nishi, Mariko; Sakuma, Naoko; Uchida, Hayato; Sinkai, Shoji; Fujiwara, Yoshinori. The effect of intergenerational programs on the mental health of elderly adults. *Ageing&Mental Health*. 2015, 19(4), p.306-314.
5. Sakurai, Ryota; Ishii, Kenji; Sakuma, Naoko; Yasunaga, Masashi; Suzuki, Hiroyuki; Murayama, Yoh; Nishi, Mariko; Uchida, Hayato; Shinkai, Shoji; Fujiwara, Yoshinori. Preventive effects of an intergenerational program on age-related hippocampal atrophy in older adults: The REPRINTS study. *International Journal of Geriatric Psychiatry*. 2018, 33(2), p.264-272.
6. Sakurai, Ryota; Yasunaga, Masashi; Murayama, Yoh; Ohba, Hiromi; Nonaka, Kumiko; Suzuki, Hiroyuki; Sakuma, Naoko; Nishi, Mariko; Uchida, Hayato; Shinai, Shoji; Rebok, George W; Fujiwara, Yoshinori. Long-term effects of an intergenerational program on functional capacity in older adults: Results from a seven-year follow-up of the REPRINTS study. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 2016, 64, p.13-20.
7. Thomas, Patricia A. Is it better to give or to receive? Social support and the well-being of older adults. *The Journal of Gerontology : Series B Psychological sciences and social sciences*. 2010, 65B(3), p.351-357.
8. 石山幸弘. 紙芝居文化史: 資料で読み解く紙芝居の歴史. 萌文書林, 2008, 221p.
9. 石田光規. 孤立の社会学: 無縁社会の処方箋. 勁草書房, 2011, 200p.
10. 伊藤順子. 高齢者のボランティア活動参加動機とボランティア活動満足感、活動から得た利益および生活満足度との関係. *高齢者のケアと行動科学*. 2019, 24, p.42-52.
11. 稲葉陽二, 藤原佳典. ソーシャル・キャピタルで解く社会的孤立: 重層的予防策とソーシャルビジネスへの展望. ミネルヴァ書房, 2013, 289p.
12. 岩田正美, 上野谷加代子, 藤村正之. ウェルビーイング・タウン社会福祉入門. 改訂版, 有斐閣, 2013, 284p.
13. 上野千鶴子. 情報生産者になる. 筑摩書房, 2018, 381p.
14. 上野千鶴子, 大熊由紀子, 大沢真理, 神野直彦, 副田義也編. ケアという思想. 岩波書店, 2008, 246p., (ケアその思想と実践, 1).

15. 内田由紀子. これからの幸福について: 文化的幸福観のすすめ. 新曜社, 2020, 152p.
16. 右手和子. 紙芝居のはじまりはじまり: 紙芝居の上手な演じ方. 童心社, 1986, 214p.
17. 右手和子, やべみつのり, 長野ヒデ子編著. 演じてみようつくってみよう紙芝居. 石風社, 2013, 127p.
18. 梅谷進康, 石田易司, 信達和典, 松尾まどか, 今井大輔, 中野堅太, 恩田泰輔. 高齢者の社会参加と生きがい: 就労・ボランティア活動と生きがい要素に係る意識との関係. 桃山学院大学総合研究所紀要. 2017, 43(2), p.49-61.
19. エリクソン, E. H; エリクソン, J. M. ライフサイクル、その完結. 増補版, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳. みすず書房, 2001, 202p.
20. 太田裕子. はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ: 研究計画から論文作成まで. 東京図書, 2019, 230p.
21. 岡本秀明. 都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討: 地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて. 社会福祉学. 2012, 53(3), p.3-17.
22. 奥田真美. 新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」. 講談社, 2017, 111p.
23. 小澤勲. 痴呆を生きるということ. 岩波書店, 2003, 223p.
24. 小澤勲編著. ケアってなんだろう. 医学書院, 2006, 294p., (シリーズケアをひらく).
25. 糟谷知香江. ナラティブ・アプローチによる経験の振り返り: 「人生紙芝居」を用いた試行的実践. 応用障害心理学研究. 2014, (13), p.37-46.
26. 加太こうじ. 紙芝居昭和史. 岩波書店, 2004, 322p.
27. 片桐恵子, 菅原育子. 社会参加と地域への溶け込みの関連: 地域での社会的ネットワークの及ぼす影響に着目して. 応用老年学. 2010, 4(1), p.40-50.
28. 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会, 2012, 260p.
29. 片桐恵子. サードエイジ研究の射程と課題. 老年社会科学. 2018, 40(1), p.67-72.
30. 片桐恵子. 「サードエイジ」をどう生きるか: シニアと拓く高齢先端社会. 東京大学出版会, 2017, 170p.
31. 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班代表安田常雄編著. 国策紙芝居からみる日本の戦争. 勉誠出版, 2018, 463p., (非文字資料研究叢書, 1).
32. 神谷美恵子. 生きがいについて. みすず書房, 2004, 353p., (神谷美恵子コレクション).
33. 紙芝居文化の会. 紙芝居百科. 童心社, 2017, 159p.
34. 上條秀元. 高齢者の居場所づくりについての一考察: 「ふれあいサロン」の活動に即して. 生涯学習研究: 宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要. 2007, (12), p.1-20.
35. 上地ちづ子. 紙芝居の歴史. 久山社, 1997, 115p. (日本児童文化史叢書, 15).

36. カルヴォ, ラファエル A; ピーターズ, ドリアン. ウェルビーイングの設計論: 人がよりよく生きるための情報技術. 渡邊淳司, チェン・ドミニク監訳. ビー・エヌ・エヌ新社, 2017, 407p.
37. 川喜田二郎. 発想法: 創造性開発のために. 改版, 中央公論新社, 2017, 230p.
38. 倉原宗孝. 終末期にむかう高齢者のナラティブケアに向けた紙芝居創作に関する考察: 特別養護老人ホームの入居者を対象にした「人生劇場紙芝居」の取り組みから. 日本建築学会技術報告集. 2018, 24(56), p.379-384.
39. 黒川由紀子. 認知症と回想法. 金剛出版, 2008, 218p.
40. 経済協力開発機構 (OECD)編著. 主観的幸福を測る: OECD ガイドライン. 桑原進監訳, 高橋しのぶ訳. 明石書店, 2015, 426p.
41. 子どもの文化研究所編. 紙芝居一子ども・文化・保育: 心を育てる理論と実演・実作の指導. 一声社, 2011, 197p.
42. 小林江里香. 日本の高齢者の社会参加は進んだか: 高頻度参加層の拡大と非参加層の縮小の視点から. 老年社会科学. 2015, 36(4), p.423-432.
43. 小林江里香, 深谷太郎. 都市部の中高年者におけるボランティア活動のニーズの分析. 老年社会科学. 2005, 27(3), p.314-326.
44. 小林江里香. 特集, 地域総括ケア時代における高齢者の社会参加・社会貢献: 高齢者の社会参加の動向, 地域包括ケアにおける支援提供者としての役割に着目して. Geriatric Medicine. 2017, 55(2), p.139-143.
45. 齋藤民, 李賢情, 甲斐一郎. 高齢転居者に対する社会的孤立予防プログラムの実施とその評価の試み. 日本公衆衛生雑誌. 2006, 53(5), p.338-346.
46. 齋藤ゆか. ボランティア活動とプロダクティブ・エイジング. ミネルヴァ書房, 2006, 422p., (MINERVA 社会福祉叢書, 15).
47. 堺正一. 高齢者と紙芝居: 紙芝居の歴史とともに歩んだ人たち. 人間の福祉. 2014, (28), p.1-20.
48. 佐藤陽. 支え合いにつなぐシニア世代の地域デビュー. 十文字学園女子大学紀要. 2020, 50, p.47-60.
49. 佐藤眞一. 認知症の人の心の中はどうなっているのか?. 光文社, 2018, 292p.
50. 信濃毎日新聞取材班. 認知症と長寿社会: 笑顔のままで. 講談社, 2010, 263p.
51. 柴田謙治, 原田正樹, 名賀亨編. ボランティア論: 「広がり」から「深まり」へ. みらい, 2010, 238p.
52. 柴田博. 8割以上の老人は自立している!. ビジネス社, 2002, 201p.
53. 柴田博, 杉原陽子, 杉澤秀博. 中高年日本人における社会貢献活動の規定要因と心身のウェルビーイングに与える影響: 2つの代表性のあるパネルの縦断的分析. 応用老年学. 2012, 6(1), p.21-38.

54. 清水美智子. 紙芝居「演じることと語ること」：紙芝居のもつ特徴と効果を探る. 名古屋柳城短期大学研究紀要. 2007, (29), p.39-48.
55. 鈴木常勝. メディアとしての紙芝居. 久山社, 2005, 122p., (日本児童文化史叢書, 38).
56. 鈴木隆雄, 権珍嬉. 日本人高齢者における身体機能の縦断的・横断的变化に関する研究: 高齢者は若返っているか?. 厚生学. 2006, 53(4), p.1-10.
57. 鈴木宏幸, 渋川智明. 認知症対策の新常識: 「絵本の読み聞かせ」が、予防・機能改善に効く!. 日東書院, 2018, 223p.
58. スノウドン, デヴィッド. 100歳の美しい脳: アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち. 藤井留美訳, DHC, 2004, 290p.
59. 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」編著. 藤原佳典監修. 地域を変えた「絵本の読み聞かせ」のキセキ: シニアボランティアはソーシャルキャピタルの源泉: 現役シニアボランティアが選んだ子どもたちに何度でも読んであげたい絵本続々101選. ライフ出版社, 2015, 331p.
60. 高野和良, 坂本俊彦, 大倉福恵. 高齢者の社会参加と住民組織: ふれあい・いきいきサロン活動に注目して. 山口県立大学大学院論集. 2007, (8), p.129-137.
61. 竹内孝仁. 介護基礎学: 高齢者自立支援の理論と実践. 新版, 医歯薬出版, 2017, 226p.
62. 竹内孝仁. 医療は「生活」に出会えるか. 医歯薬出版, 1995, 206p.
63. 竹内孝仁, 稲川利光, 三好春樹, 村上重紀. 遊びリテーション: 障害老人の遊び・ゲームの処方集. 医学書院, 1989, 206p.
64. 土居新幸編著. 完全図解 遊びリテーション大全集. 三好春樹監修. 講談社, 2017, 319p.
65. 遠山昭雄監修. はじめよう老人ケアに紙芝居: 観ること、つくること、演じることの楽しみ. 雲母書房, 2006, 254p.
66. ときわひろみ. 手づくり紙芝居講座. 日本図書館協会, 2009, 194p., (JLA 図書館実践シリーズ, 11).
67. ときわひろみ. 認知症を予防することば遊び回想法. 雲母書房, 2009, 222p.
68. 徳田雄人. 認知症フレンドリー社会. 岩波書店, 2018, 184p.
69. 豊島彩, 佐藤眞一. 高齢者のソーシャルサポートの提供に対する評価の質的検討. 生老病死の行動科学. 2014, 17-18, p.65-78.
70. 豊田保. 参加者の視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義. 新潟医療福祉学会誌. 2008, 8(2), p.16-20.
71. 中村久美. 地域コミュニティとしての「ふれあい・いきいきサロン」の持続性と包括性に関する研究. 日本家政学会誌. 2019, 70(7), p.403-415.
72. 中根千枝. タテ社会と現代日本. 講談社, 2019, 192p.
73. 野口裕二. ナラティブの臨床社会学. 勁草書房, 2005, 243p.

74. 野中久美子, 大場宏美, 倉岡正高, 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 藤原佳典. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討: 多様な高齢者との世代間交流プログラムにむけての支援策の提言. 日本世代間交流学会誌. 2013, 3(1), p.19-33.
75. 羽田富美江. 超高齢社会の介護はおもしろい!: 介護職と住民でつくる地域共生のまち. ブリコラージュ, 2019, 178p.
76. パットナム, ロバート D. 孤独なボウリング: 米国コミュニティの崩壊と再生. 芝内康文訳. 柏書房, 2006, 689p.
77. バトラー, ロバート; グリーソン, ハーバート編. プロダクティブ・エイジング: 高齢者は未来を切り開く. 岡本祐三訳. 日本評論社, 1998, 220p.
78. 広井良典. ケアを問いなおす: 深層の時間と高齢化社会. 筑摩書房, 1997, 236p.
79. 広井良典. ケア学: 越境するケアへ. 医学書院, 2000, 268p., (シリーズケアをひらく).
80. 広井良典. 特集, ケアの社会政策: ケアの倫理と公共政策. 社会保障研究. 2016, 1(1), p.22-37.
81. 広井良典. ケアのゆくえ科学のゆくえ. 岩波書店, 2005, 262p., (フォーラム共通知をひらく).
82. 広井良典. コミュニティを問いなおす: つながり・都市・日本社会の未来. 筑摩書房, 2009, 292p.
83. 藤原成一. 特集, ケア: ケアの原初景、連句型共創時空へ. 生存科学. 2015, 26(1), p.41-53.
84. 藤原成一. 「よりよい生存」ウェルビーイング学入門: 場所・関係・時間がつくる生. 日本評論社, 2020, 265p., (生存科学叢書).
85. 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 大場宏美, 李相侖, 小宇佐陽子, 矢島さとる, 吉田裕人, 深谷太郎, 佐久間尚子, 内田勇人, 新開省二. 高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果: 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム"REPRINTS"から. 日本公衆衛生雑誌. 2010, 57(6), p.458-466.
86. 藤原佳典. 高齢者のシームレスな社会参加と世代間交流: ライフコースに応じた重層的な支援とは. 日本世代間交流学会誌. 2014, 4(1), p.17-23.
87. 藤原佳典, 倉岡正高編著. コーディネーター必携シニアボランティアハンドブック: シニアの力を引き出し活かす知識と技術. 大修館書店, 2016, 207p.
88. 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 李相侖, 大場宏美, 吉田裕人, 佐久間尚子, 深谷太郎, 小宇佐陽子, 井上かず子, 天野秀紀, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因: "REPRINTS"高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から. 日本公衆衛生雑誌. 2007, 54(9), p.615-625.
89. 藤原佳典, 南潮編著. 就労支援で高齢者の社会的孤立を防ぐ: 社会参加の促進とQOLの向上. ミネルヴァ書房, 2016, 294p.

90. 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 李相侖, 井上かず子, 吉田裕人, 佐久間尚子, 呉田陽一, 石井賢二, 内田勇人, 角野文彦, 新開昇二. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム: “REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果. 日本公衆衛生雑誌. 2006, 53(9), p.702-714.
91. 文民教育協会子どもの文化研究所編. 新・紙芝居全科: 小さな紙芝居の大きな世界. 文民教育協会子どもの文化研究所, 2007, 199p.
92. 堀田穰. 紙芝居研究をめぐる現況について: 展望と課題. 人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要. 2014, (33), p.136(1)-119(18)
93. 堀尾青史, 稲庭桂子, 子どもの文化研究所編. 紙芝居: 創造と教育性. 童心社, 1972, 381p.
94. マクルハーン, マーシャル. メディア論: 人間の拡張の諸相. 栗原裕, 河本仲聖訳. みすず書房, 1987, 381p.
95. 増本康平. 老いと記憶. 中央公論新社, 2018, 206p.
96. まついのりこ. 紙芝居: 共感のよろこび. 童心社, 1998, 67p
97. 松繁卓哉. 地域包括ケアにおける「自助」「互助」の課題: 支援者一被支援者の固定的関係性からの脱却. 理学療法学. 2015, 42(8), p.728-729.
98. 溝上智恵子, 呑海沙織, 綿拔豊昭編著. 高齢社会につなぐ図書館の役割: 高齢者の知的探求と余暇を受け入れる試み. 学文社, 2012, 168p.
99. 宮坂道夫. 対話と承認のケア: ナラティブが生み出す世界. 医学書院, 2020, 277p.
100. 三好春樹. 関係障害論: 老人を縛らないために. 雲母書房, 2018, 341p., (シリーズ考える杖).
101. 三好春樹. 認知症介護: 現場からの見方と関わり学. 雲母書房, 2014, 255p.
102. メイヤロフ, ミルトン. ケアの本質: 生きることの意味. 田村真, 向野宣之訳, ゆみ出版, 1987, 236p
103. 森常人. 「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察. 関西外国語大学研究論集. 2014, (100), p.257-270.
104. 山本武利. 紙芝居: 街角のメディア. 吉川弘文館, 2000, 169p., (歴史文化ライブラリー, 103).
105. 若林靖永, 樋口恵子. 2050年超高齢社会のコミュニティ構想. 岩波書店, 2015, 157p.
106. 渡邊淳司, チェン・ドミニク, 安藤英由樹, 板倉杏介, 村田藍子編著. 渡邊淳司, チェン・ドミニク監修. わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために: その思想、実践、技術. ビー・エヌ・エヌ新社, 2020, 303p.